325
257

ヨ1142
328-267

跡しみ歩

著造賢上畔

大正
6. 11. 29
内交

序

これ既往六年のわが外的及び内的生活の斷片的發表である。同時にまた過去一年半の筆に於ける我勞作の積聚である。余が此土地に於てこの生活を開始したのは、明治四十四年の此月初旬であつた。そして此書に筆をとりはじめたのは、大正五年の四月であつた。すでに六年の星霜は彼方に消えた。しかし凡てが昨日の如くわが心の中にある。既に一年半の歳月は我を棄てた。しかし凡てが今日の如く我心の中に住む。彼方に消えし六年の星霜を今に生かすことは出來ぬ。しかし我心の中にあるものを其儘の姿にて外に表はすことは出來る。一小著、必ずしも舊りにし過去の繰言ではない、いま心に生

けるものゝ具象化である。但し我を棄てし一年半の歳月を我に取りもどすことは出來ぬ。一年半前に記せしものは一年半前の我心の體現である。一年前の勞作は一年前の我心の記錄である。この書の凡てに於て責任を有する余も、時の荷ふべき責任をまで荷ふことは出來ぬ。讀者願くはこれを諒せよ。

大正六年十月下旬の美日

風にさゞめく樹葉の音を聽きつゝ

著者記す

著者より

□余は此著述の進行中に於て、如何に度々筆を抛つたことであらう。また此書の出版について、如何に度々躊躇したことであらう。他なし、此書があまりに多く自己について――しかも可成り多く外的に且つ具體的に――語つてゐるからである。自己を高めることを知らぬ余も、自己を低めるには堪へなかつたのである。しかし顧つて思ふに、いづれの著述か自己について語つて居らぬものがあらう。我等は如何なる問題について語つても、遂に自己を語るほかに道なきものである。余は遂に恥を忍んで此書を公表した。

□余は本書に於て、恩師と友人諸君に關する記述を度々敢てした。又後者の或者より余に送り來し親展書を公表した。實名を記さなかつた一事を除いて、その凡てに於て寸分違はぬ事實の記載である。從つてそれだけ多く、先生及び諸君に對して罪を犯してゐるのである。罪を犯して居ると知りつゝ余が之を公けにせし理由に至つては、諸君に於て明瞭に推知し得ることゝ思ふ。余は諸君の寛恕を乞ふと同時に、諸君の寛恕を期待してゐる。これ友誼の余に命ずる處である。

目次

遂に農村傳道者となる
上……一
中……八
下……一七
農村傳道者の生活
農村生活……二四
述作……二九
讀書……三五
傳道五年
上……四二
下……五一
我心境に住む偉人の群
使徒パウロ……六四

目次

改革者ルーテル……七三
偉僧日蓮……八一
日本國の過去を顧て……九〇
傳道一日の記
上……一一〇
下……一二五
我心境に住む思想家の群
預言者カアライル……一三一
理想家トルストイ……一三九
人類の友ドストイエフスキイ……一四八
霖雨の日と晴れたる日
霖雨の日……一五八
晴れたる日……一六二
M村の二日
初の日……一六七

後の日……一七八
我心境に住む詩人の群
天然の詩人ウチルヅチス……一九〇
人生の詩人ホイツトマン……一九八
理想の詩人トロウ……二〇七
友
上……二一一五
中……二二一
下……二二八
霞ケ浦邊の二日間……二三八
壞滅の外にありて
吹雪……二五四
戰ひ……二五八
潮流を下瞰して……二六七

歩みし跡

畔上賢造著

遂に農村傳道者となる

上

郷里の中學を卒業した余は、政治家たるを目的として、東京の某私立大學に入つたのであつた。グラッドストンやリンカンの傳記に血を湧かせた少年の余は、たゞ花の如き活動の舞臺にのみ憧憬したのである。豫科の第一期生としてありし數ヶ月の間、余の最も頭を痛めた問題は、來るべき第二期に於て法律科に入るべきか政治科に入るべきかといふ事であつた。その時余は法律を學びて辯護士たらんか、政治

を學んで政論記者たらんかと、思ひ惑つたのである（あゝ愧づべき我過去よ！）。何れにするも、政界に活動せんとする我志望に變りは無かつた。嘯ふべきかな少年の空想！　さはれ當時にあつては、これ我最大の問題であつた。

紫電一閃、友は倒れてルウテルの夢は破れた。修道院は彼の赴くべき唯一の場所として殘つた。それにも似たる迅雷は我暖き夢を破つた。父の急病は東都にあること三ヶ月なる余を鄕里に歸らしめた。つゝいて起りし家の不幸は、我をして學を廢せしめた。孤獨と絶望のなかに、夢に東都の學園を偲びつゝ、故鄕に懊惱の一年を送りし時、父は遂に歸らぬ旅の人となつた。ながき憂愁は强かに余の精神と肉體とを蝕した。余は蒼白き頰に我老齢の俤を見る病弱の身となつた。そのまゝにして一年は早くも過ぎた。

新秋九月、再び東都の土を踏みたる余は、既に心的革命の第一階段を踏んでゐたのであつた。余は舊き志望を棄てゝ、新たなる志望を抱いた。余は文學科を選んだのである。一ヶ年間の苦き報酬を拂つて、人生の儚きと名利の虛しきとを學びたる

余は、さすがに此世の成功に生きんとの企畫に執し得なかつた。余は思想に生きんと志すに至つたのである。幼きより筆を執るを好める身の、今や熱鬧の巷に動くを厭うて人なき里に默想を樂しむ性情の人となりては、文學は學ぶに最も良く關はるに最も良き業となつた。清き思想を世に供する文士として立たんことが、余の願となつたのである。

思想に生きんと決意して、當然余の心に起りし問題は人生の根本的意義であつた。余は宇宙人生の根本問題を解して、我生の中心と根據を獲んとした。そして其ために相當の苦悶と努力とをした。今その經過について玆に語る要はない。「イエスキリスト遂に我を捉へたり」と、かく云へば足りるのである。千九百年前、西亞ガリラヤの湖畔に、その清姿を運びたるナザレの工人イエス――此人が遂に余を捉へたのである。かくて我が心は一大變革を經過した。それより以後、余は彼を我心靈の主權者として拜するに至つた。我全生の救者として崇むるに至つた。此世に關する我野心は、その根柢に於て碎かれた。彼の理想を實行すること、彼の精神に據つて立

つこと、彼の生涯に倣ふこと、これが余の最大の希求となつた。

現存の基督教會とその信者とを好まざる余は、基督教は信じても、教會に加入する心は少しも起らなかつた。似たものが十數名あつた。彼等は余より先に、無教會主義を標榜する某大家の門に馳せてゐた。その大部は學生であつた。かくて信行修養を目的とする一の團體が存在してゐた。余は早速これに加入した。我等は安息日ごとに午前は師の教に深き感激を味ひ、午後は郊外の清楚なる一室に會して、優婉なる武藏野の天然に圍まれつゝ、聖書を研究し、感想を交換し、懺悔し、祈り、泣き、叫び、警め、勵ました。今にして思ふ、當時の我等のいかに幼稚なりしよ！

されど同時に亦如何に新鮮なりしよ！ 幼稚にして新鮮なりし當時の我等を、幼稚ならざるべしと雖も新鮮ならざる今日より回想して、余は時々無限の感慨に沈むものである。我等は皆いたく變化した。我等のうちには、信仰を棄てゝ此世の榮華を追ひゆきしものも少なくない。然らずとするも、遠く離れて其居る所をさへ知らぬ者がある。今日にいたるも尙ほ信仰の友たるは四五に過ぎぬ。しかりと雖も、當時

の我等に「虹を見て我心おどる」新鮮なる靈覺のありしことは、我回想の眼にいと明かである。

新たなる生命の道を辿りては、筆を執りて世に立たんとするわが目的に、截然たる色彩が現れざるを得ない。思想を以てする基督教の傳道、これ實に余の志すに至りし處であつた。もとより筆そのものに特殊の興味を有する余は、小かなりとも此方面に我使命のあることを、夢疑つたことはなかつた。さればブルックス、ロバルトスンの迹を追うて教壇より會衆に教を說くの興味は我が有せざる所、ましてウェスレイ、ブース等大道に熱火の辯を揮つて衆民に悔改を促すの態度は、我心より遙かにかけ離れてゐた。余は宗教家てふ者の事業に何等の同感を起さゞる自己を、いぶかしと眺めた。しかしそれは打ち消しがたき事實であつた。偉を偉なりとせぬのではない。たゞ江河の我に近きを愛でゝ大山の我れに遠きを憾むのである。されば余は偏に筆に生きんとした。キリストの精神に立つ獨立の文士たらんと志した。かくて我理想的人物は英の文豪カアライルであつた。彼が基督教の外形を棄てゝ偏に

その精神に據て立ち、古への豫言者の態度を以て、その國民とその時代とを警めたる態度を、余は貴しと眺めた。そして余も亦彼に似たる文士、彼の如き獨立の思想家として立ち、思想に託してイエスの大精神を世に傳ふる日あるを願つた。カアライルか、然らずんば北歐の基督敎的思想家キェルケゴール、余は此二者の一人に似たるものとならんと志した。あゝ我天分に過大の價値を附したる我れの愚かなりしかな。少年の空想は尙ほ青年の余に附き纏つてゐたのである。

四年は夢のごとくに過ぎた。校門を出でし同級生は、それ〴〵思ひ〳〵の方向に進まねばならなかつた。その夏を鄕里に送りたる余に、新たなる問題が起つた。余は夏中をそれが思考に費した。筆を以て世に立つ資格と實力の全からぬを感じたる余は、且かゝる生活の物質的に甚だ不安定なるを恐れたる余は、中等敎員となりて育英の業に理想の追求を求めんかとの新問題を、心に提供せられたのである。そして故山初秋の裝ひを後にして東都の空に向ひし時に於ては、余は旣に中等敎員たらんとの決心を抱いてゐたのであつた。――その十一月余は某縣廳所在地の中學校に

奉職した。

あゝ中等敎員！　余が少年時代に於て最も嫌ひしものは敎師であつた。男兒世に處す、須らく驚天動地の業をなすべし、焉ぞ小學敎師又は中學敎師のごとき卑小なる業に從ふべけんやと。かくて余は、如何なる卑き業に就くとも敎師にはならじと決心してゐた。敎師たるは最大の屈辱なりと思つてゐた。しかしながらナザレのイエスを信ずるに至つて、敎育は貴き事業と化した。凡そ宗敎信者より見て、傳道に比して劣らぬは敎育である。ゆゑに余は、遂に我宿痾たる「敎師嫌忌」の感情をうち破つて、遂に一中學の英語敎師として赴任するに至つたのである。

あゝ我神よ、汝は余より貴きものを奪ふ處の恐るべき主である。俗界に名をなさんとの我野心を粉碎し給ひて、汝はヨリ眞摯なる志望を我れに起し給うた。此時汝は我至寶たりし肉の成功を奪ひ給うた。しかも靈界に生きんとの余の第二の志望に、尙ほ多くの不純なる分子のまじれるに於て、汝は之れをしも擊ち給うた。再び汝は我至寶を奪ひ給うたのである。而して我性情に於て最も厭へる業の却て高貴なるを

示して、之を以て其時我追ふべき最良の道となし給うた。少年時代に余の最も厭ひし宗教を我をして信ぜしめし汝は、こゝにまた我最も厭へる事を我業として與へ給うた。あゝ我主よ！　汝は二度我が寶となせしものゝ泥土たるを示して之を奪ひ、二度泥土に包まれし寶を示して之を與へ給うた。之を思うて余の頰に流るゝ涙は、悲哀悔恨のそれではない、歡喜奉謝のそれである。

中

人は神の子である。ゆゑに之をして神の子たる特性を發輝せしめねばならぬ。而してこれを促すものが教育である。「玉磨かざれば光なし」。故に磨かねばならぬ。石ならば磨くも効ない。玉なるが故に磨かねばならぬ。人をして神の子たる本來の面目を發輝せしめんとする育英の業は、かくの如くに考へ來つて、その意味や深く、その價値や高い。この信念を抱いて此理想を追ふべく、余は一田舍教師となつた。そして此理想が到底現在の日本教育界に於て實現せられざるを學ぶのに、余は四ケ

年の月日を要した。

同志の送別會をも斷つて急遽その地に向ひたる余は、車上よりその都會をきつと睨んで思うた、我れ能く此土地に多くの信者を造りて以て此都會を潔め得んと。また初て壇上に六百の生徒に對して心ひそかに云うた、汝等わが携へ來れる聖書の偉力を知るの日あらんと。あゝ嗤ふべきかな我若かりし日の空想！　少許の俸給を以て我が肉體と精神の自由を賣りわたしたる傭人の身たるを悟らずして、たゞ偏に一片の空想に生き居たりし當時の我姿を回想して、余はいとゞ回顧の涙に咽ぶものである。

新たなる事に對して起る自らなる興味を以て、余は日々教育のことに當つた。かくて夢の如くに數ケ月は過ぎた。熱心と愉快の中に忽ち過ぎた。學年は改まつた。熱心と興味は少しづゝ衰へはじめた。落ついた心の鏡に、我從事しつゝある仕事の眞相は次第々々に映りはじめた。映りし姿は毎日少しづゝ濃くなりまさつた。それと共に、教師たるを厭ふ情念が次第に起つてきた。かの姿と此情念とは、相比例し

て其色と其度とを増し進んだ。遂に堪へられなくなつた余は、赴任後滿四年にならんとする一ヶ月前に於て、辭表を提出してその土地を後にした。いま少しく其仔細を語らう。

我生涯の斷片を主題とせる此文に於ては、余の目的は日本教育の批評にない。しかし事の順序として、在職四年にして知り得たる教育の實際を少しく語らねばならぬ。法文に表はれたる日本中等教育の目的の何であるかは余は知らぬ。しかし夫れがその實際に於て、高等教育の豫備科たるに過ぎぬは事實である。其卒業生を高等程度の學校に送ることが今の中學教育の實際の目的である。五年間の教育は唯その為めの知識の準備である。その他は凡て裝飾物である。或は裝飾物と異ならぬものである。されば中學を卒業して直に實際生活に入るものに取つては、現今の中學教育なるものは大なる贅澤物である。否大なる妨害物である。そは實際生活に入る準備に於て、何等教ふる處ないからである。そして其教ふる處の大部分は、實際生活に於て何等役立たぬものであるからである。否むしろ其破壞者であるからである。

見よ、中學を卒業して直に家に歸れる者が、概ね怠惰なる青年として徨々相さまよへるを。これ半ば以上制度の罪である。さはれ、制度の缺陷を色濃くする教育當事者の誤れる教育も、亦與つて力あるものである。

かくの如く現在の中等教育は、其實際に於ては主として知育——殊に或目的のための偏したる知育——に限られてゐる。しかも其知育すら、決して完全を以て稱することは出來ぬ。否々之れに大なる缺陷がある。缺陷とは何ぞ。教授時間と教授材料と教授法とに、窮屈なる制限を有すること是れである。割一主義は不幸にして我知育の金科玉條である。ために教師は教授の自由を束縛せられて、何等著しき自己特有の働をなすことは出來ぬ。極て狹き範圍に於てのみゆるさるゝ自由を以てして、根本に於て受くる大なる束縛を以てして、爭でか力ある教育をなすことが出來よう。右の如き割一教育は、自覺ある教師に取つて大なる禍であると共に、生徒自身にも亦少からぬ損害をもたらす。殊に中位以上の生徒が、其伸ばし得べき才能を充分に伸ばし得ずして、空しく劣等生の犧牲となるは、輕々に看過すべからざる大問題で

ある。且又その學才の一方に秀でゝ他方に劣れるものは、たとへ其秀でし方面が天才的偉大なりとても、劣れる學科に全精力を注がずば落第の否運に會するがため、其長所を空しく萎縮せしむるほかはない。甚だしいかな人の子を賊することや。

體育と雖も、一週三四時間の無趣味なる體操や强制的なる武術を以て、いかで完璧を稱することが出來よう。身體の鍛錬にして全からんには、是非とも放課後の遊戯を必要とする。しかるに此種の運動競技を樂しむ者は、學生の中比較的少數である。そして多くは中位以下の生徒である。知識の注入のみに力を費す身體脆弱の半病者と、肉體徒らに發達して頭腦ます〳〵遲鈍なる愚者とを造りつゝある現今の中等敎育を、たれか浩歎の眼を以て見ぬものがあらう。

さりながら、現今中等敎育の最大缺陷は德育の不徹底である。その修身科なるものは德育の最大要素であるが、一週一時間、道德の要綱を生徒に傳へ、生徒はそれを自己の知性に受け入れるのみである。名は德育なれども、實は知育の一部である。さればこそ試驗を課してそれが記憶を强要し、採點を爲して及落判定の一標準とな

す點に於て、他の知識的學科と少しも異ならぬのである。敎ふる者も敎はる者も、之を學科の一と心得居るのみである。從つて生徒は、道德とは記憶すべきものにして實行すべきものに非ずと考ふるに至ること、理の當然である。優良なる敎師ありて、かくの如き制限あるにも係らず、ある感化を生徒に與へて、その德性を涵養することも無いではない。しかしこれ例外である。事それ自身が根本的に過つてゐる。かくの如くにして生徒の德性を高めんとす、これ木に緣つて魚を求むるものである。

然らば德性の實際的訓練は如何にして行はるゝか。これ全校の敎師が協力一致して爲すべき事である。そして兎も角も、形の上に於ては然か爲されてゐるやうに見える。さりながら德育の標準そのものに至つては、たゞ「規律」といふ一點に存するの實狀にある。規律を正しく守るものは操行の優者である。然らざるものは操行の劣者である。表面端正なるものは德に於て優れ、然らざるものは德に於て劣つてゐる。內心の如何は少しも問題とならぬのである。專ら外と形を見る敎育である。內と實とを問はざる敎育である。

規律本意の教育は、勢ひ監督本意の教育とならざるを得ない。教師の見張り居る處に於ては、生徒は靜肅にして端正である。故に教師の前にて窮屈なる思をせる生徒は、教師の眼のとゞかぬ所に於ては放肆惡行を事とするに至る。從つて監督を益々嚴しく且廣くすることになる。すると監督せらるゝものは、益々監督の眼を逃れて私事を行ふに至る。かくして恰も罪人を追ふ警吏と警吏を避くる罪人との如く、遂に盡くる時はないのである。遂には校外監督なるものを設けて、校門外に於ける生徒の行動を束縛し、且探偵せざるを得ざるに至る。これ實に外面的德育の當然なる歸結である。

操行點なるものが修身點の外にある。後者は修身科の答案に對する採點である。前者は生徒の全操行に對して加へたる、學校の評點である。そして操行點といふは名のみにして、實は生徒の表面を見て感じたる教師の好惡の情の發表に過ぎぬのである。温和な上品な生徒、殊に教師に對して恭謙なるらしき生徒は、操行に於ては優に滿點を占め得る。しかし鋭峻不屈の生徒は、如何に操守堅固にても、操行に於

ては中位又はその以下である。余の奉職せし學校に於ては年三回全校の教師相會して操行點會議なるものを開き、會議の結果——多數決を以て——各生徒の操行點を定める。しかし各生徒の操行の實際を知らぬ者が判斷を下すのであるゆゑ、自ら前述のごとき標準に依る外はない。それも一級の全時間を一人にて受持つ小學校に於てなら、生徒の操行品性をも或程度までは知り得る。しかし乍ら一週多くも僅かに五六時間、少きは一時間のみしか同一の生徒に接せずして、その操行を評價せんとす、これを無謀の極と云はずして何とか云はう。かくの如くにして能く人の子を賊はぬことが出來るであらうか。

かくの如き規律本意の德育に於ては、勢ひ監督と威壓を以て生徒に臨むほかはない。これ今日の中學校に於て、體操教師に概ね退職軍人を用ふる理由である。退職士官、退職下士——彼等は軍隊にありて兵士を訓練せしと同じ精神を以て生徒を訓練し、同じ評價法を以て生徒を見る。彼等は學生の良否を定むるに、全く兵卒の良否を定むる標準を以てする。彼等にとつては、軍隊も學校も大差なきものである。

彼等はその舊き頭腦と舊き方法とを以て、廿世紀の活舞臺に働くべき少年學生を律せんとする。玆に於てか幾多の矛盾と滑稽とが續出する。學生が陽に彼等の命令に服すと雖も、陰に彼等を輕侮し、嫌惡するのも亦已むを得ない。しかしながら規律本意の德育に於ては、彼等は此上なき權威者である、且缺くべからざる働き手である。ゆゑに彼等の職員間に於ける勢力の頗る大にして、概ね校長をも左右するの力を有するは、理の當然である。

以上の如き監督本意の德育が、それ自身にて種々の弊害を生むべきは、推知するに難からぬ處であるが、殊に其最大缺陷とも云ふべきは、その全然消極的なる點である。すなはち現今の中等教育に於ては、德性の低きものを矯正せんとする方法のみ行はれて、德性の高きものを更に高からしむる工夫が全然閑却せられてゐる。屢々開く職員會議に於て、問題となるものは不良生徒の惡と其矯正法であつて、良生徒については教師は全然安心して、之をそのまゝに棄て置くのである。長處を伸ばすの工夫なくして、一に短所の矯正に日も亦足らざらんとす、そも〳〵是れ教育の

本旨を誤れるものではないか。且又惡しき生徒の改善なるものも、其方法の愚なるため多くは失敗に終り、教師相會するや、これを話題として唯長太息を洩らすのみなる有樣である。

以上の如き德育は、生徒をして僞善者たらしむること寔に恐るべきものがある。彼等は想ふに至る、道德とは人の前に於て外面を正しくすることである、內心の如何は毫も問ふ處でないと。無邪氣なる新入生の純白なる心が、月を逐ひ年を經て次第に濁りゆくは、實に無慙なる有樣である。ましてや彼等は、彼等の憧憬する此世の成功者の、決して道德堅固の人々にあらざるを新聞紙に於て學び、不德汚行の輩の大手を振つて濶步せるを實際社會に於て見、又彼等に道德の重んずべきを口を極めて教ふる教師も、自らは必ずしも深くこれを重んぜざるが如くなるを知りて、道德とは必要に應じて着用すべき裝飾物なりと、早くも推定するに至るのである。

下

余は思はずも長く批評の語をつらねた。しかしこれ、四年間の實驗に依て知り得たる事の概要としては、寧ろ短きに失するのである。そはともかく、日に月に之等の事を明かに印刻せられたる余は、不安と苦痛の次第に我心を侵蝕し進むを冷かに傍觀し得なかつた。若輩なる余も、兎に角或理想を抱いて教育界に入つたのである。そして此理想に應ずるだけの自由の活動を豫期したのである。しかるに教育そのものゝ根本的精神に於て、また知育、體育、德育の個々の方法に於て、事實が悉く我理想と反するを見出した。そして定められたる範圍を超えての活動は、もとより許されぬ。然り、今や教育は一の大なる器械である。そして各教師はその器械の一部である。器械の一部としては、たゞ器械的の作用を忠實に果しさへすれば宜い。或理想を有する者の自由行動のゆるさるゝ筈は固よりない。かくて余は、己れが眞正の傭人(やとひびと)なるを次第に發見するに至つた。しかも少許の金を以て身を敵國に賣り以て

その用を務むる所の、一個卑陋なる漢子(をのこ)を、自己に於て見出すに至つた。

かくて余は無意味にたゞ其日其日の務を果してゐた。そして心に於て教育界を遠ざかりつゝある己を、明かに認めずには居られなかつた。余が職を棄つる半ヶ年前、たま〳〵或貴人の縣内巡遊があつた。全縣下は鼎の湧く騷ぎとなつた。準備は數ヶ月前より行はれた。色々の事があつた。凡てが芝居であつた。凡てが僞善であつた。口に於て善を敎ふる學校が、僞善の實物敎授をなすのである。そして余は余の手をそれに貸しつゝあるのである。我心の耻ぢつゝある事に、我脚と我手は動きつゝあるのである。——余はたゞ茫々乎として此事にたづさはつた。夢の如くその數ヶ月は過ぎた。人はすべて其事を忘れた。次第に噂にすら上らずなつた。たゞ余のみには、それが一の恐ろしき活ける問題として殘つた。そして余の速かなる解決を促してやまなかつた。

問題は未解決のまゝにして、早くも第一學期は終つた。暑中休暇に於て自由奔放の生に歸りし余は、嬉しさのあまり、身が傭人の境涯にあるを忘れてゐた。早くも

新秋は來た。余はまた教壇の人となつた。未解決の問題は、倍舊の勢を以て余の解決をせまつた。余が現今の教育に對して、全然興味を失ひしは事實である。余は唯パンのために毎日僞善の生活をつゞけつゝあるに過ぎぬ、かく思うて、余の苦惱は今や絶頂に達した。あゝ余はパンのために節を賣り居る卑屈なる男子である。さりとて今此パンを離れんか、余と共に母と妻子は忽ち路頭に迷ふであらう。そして余に賴りて學業を續け居る弟は、忽ち廢學の否運に會するであらう。さりながら、眞理と信ずる所に據つて人の子を教育せんと願ふ余が、人の子を賊する仕事の手先として働きつゝあるは、まさしく節を敵に賣りて生活の資を得つゝある捕囚の生涯である。いま生活の保證を棄てゝ曠野にさまようは辛い。さりとて此儘にあらんか、我心的生命の敗滅に歸するは近い。物を得れば心を失ふ、心を得れば物を失ふ。噫如何にかすべき。強ひて此問題を心の外に逐はんとするも、日々矛盾の生活を送れる苦痛はそれが解決を迫つてやまぬ。人生の分岐點に立つて余の心は麻とみだれた。

懊惱の身に羨しきは懊惱なき人々である。余は何等の疑懼なくして生徒を教へつゝある同僚の安心を羨んだ。そして思うた、余もしナザレのイエスに接せざりしならば、余も亦彼等のごとく幸福なるを得たであらうと。しかし乍ら、今に至つてイエスを棄つるも時すでに遲い。たゞ苦悶の倍加を惹き起すのみである。あゝ我主イエスよ、汝は實に余が有する凡てを奪ひて、余をして汝に仕へしめんとする恐るべき君である。

我よりも父母を愛む者は我に協はざるものなり、我よりも子女を愛む者は我に協はざるものなり、その十字架を取りて我に從はざるものも我に協はざるもの也。（馬太十章）

と汝は宣し給ふ。我主に忠實ならんがためには、一切を棄てゝも彼の我に與へ給ひし理想に從はねばならぬ。彼の踏みし足跡を我も踏み、彼の擔ひし十字架を我も擔はねばならぬ。これ實に彼の我れに向つて爲し給ふ要求である。もし此要求に從はざらんか、彼と我との間に永遠の袂別あるのみである。

時に余に起りたるは傳道心であつた。基督教の獨立傳道者となつて一生を送らん

との思念が、少しづゝ心に起り始めた。そして其心が次第に強くなりつゝ行つた。獨立傳道者最大の武器たる筆は、細く弱いながらも我に存する。既に時代後れの筆ながら、兎も角も神より與へられし我能力中に於ては、最も優れしものである。不幸にして口は筆ほどには動かない。さはれフチックス、ウェスレイの熱烈なる傳道よりも、スピノーザ、カアライルの深き思念を好む我には、此事は結句幸ひである。余は筆を以てイエスの福音を傳へることが出來る。そして福音以外眞に人を救へ世を救ふ道のなきを悟れる余は、傳道を以て我唯一の命とすべきではないかと。かくて余の新生活の希欲が強くなりまさると共に、今營みつゝある生活の厭はしさは次第に強くなるのみであつた。

たゞ殘る處は生活の憂である、パンの得らるべきか如何である。しかし乍ら我も亦一個の男兒である。僅かに數十圓の俸給を以て敵國に仕へつゝあるは、餘りに意氣地なしと云はねばならぬ。ましてや「稼くことなく穡ることをせず倉に蓄ふることなき」天空の鳥をも養ひ給ひ、「今日野にありて明日爐に投入れらるゝ草をも」裝

はせ給ふ神は、必ずや糧と衣を我に給したまふであらう。嘗ては弟アベルを殺したる兇惡のカインをも保護し給ひし神、荒野に奴隷ハガルと不逞の子イシマエルとの飢餓を醫し給ひし神、テシベの野人エリヤを溪谷に鴉をして養はしめ、異邦に貧婦をして養はしめ、荒野に天使をして養はしめ給ひし神——彼は必ずや我と我家族に食すべき糧と纏ふべき衣を與へたまふであらう。「汝等まづ神の國とその義とを求めよ、さらば之等のものは皆汝等に加へらるべし」とイエスは言ひ給ふ。よし〳〵我心すでに決せり、明日のことは明日にまかせん、今は我歩むべき最上の途を取るに如かずと。かくて余は四年間働きし教育界を棄てた。同時に四年間我生を寄せし都會を棄てた。そこには殘り惜しき何物もなかつた。余はたゞ前途の希望に胸とゝろかせて、其都會と其校舍とに永久の訣別を告げた。九月二十七日の日記に記して云ふ。

朝、馬太傳六章三十一節以下を讀んで天來の力にうたれた。

と。かくの如くにして余は農村傳道者となつた。時は余が此世に生を享けし廿八年目の秋であつた。（大正五年四月稿）

農村傳道者の生活

農村生活

都會に育ち、都會に學び、都會に働きたる余が、その最後の都會を去るにあたつて、心の指したる方向は田舍であつた。余が田舍傳道者となつたのは、都會傳道よりも田舍傳道をまされりとしたからではない。傳道は人に向つて福音を紹介することである。故に苟も人の住む所ならば、何處に於て爲してもよい筈である。余はたゞ田舍に住みたかつたのである。田舍の空氣に思ふさま身をひたして、充分に手足を伸ばして見たかつたのである。都會にあつて萎縮けし心を、心ゆくばかりに開いて見たかつたのである。そして田舍に住むが爲に、おのづから田舍人に傳道することになつたのである。農村傳道者たる前に先づ農村居住者たらんこと、これ余の願であつたのである。

余は僅かの緣故をたどつて、南總九十九里沿岸に近き一小農村に退いた、其處で余はまづ永く屈せられし我手足を伸ばし、ながく壓縮されし我胸をひらいて、思ふまゝに純潔なる田園の空氣を呼吸した。然るのち余は徐ろに周圍を見た。

銚子の尖端と大東岬とを繫ぐ線は二つある。その第一は弧線をなせる砂濱である。人は之を九十九里濱と呼ぶ。その第二は更に深き弧線（殆ど半圓）をなして、蜒々として連る丘陵である。下からは丘陵と見ゆれど、實は臺地の眉端である。二つの弧線の間は沃野である。その幅、長きところは三里に至るであらう。この沃野に數多の農村と十餘の小都會とが立つ。太平洋の波濤がこの臺地の眉端と戰ひし壯觀は、遠き過去のことにして之を今に還す緣もないが、海水が三里の東方に退却せしために「滄海變じて桑田とな」りし此沃野の出現は、いま其處に住む幾萬の人の感謝の思出であらねばならぬ。

わが住む村は此沃野に立つ農村の一である。そして新來の客を驚せし第一の事は、村に無數の樹木の立つことであつた。中位以上の家は申し合せたやうに東方に向つ

て開けて、他の三方は大樹小樹を以てかこませてある。ことに亭々として聳ゆる數おほき高木は、神祕と爽快と高貴のいみじき結合である。しかし我住む村のみが例外ではない。人もし試みに前記の第二弧線の一端に立つて、普く下方を看下せば、廣漠たる平野を點綴せる無數の小森林を見るであらう。この森林と見ゆるが即ち個々の村である。この中に人家が立つのである。けだし平坦なる野の民にとつて、最も恐ろしきは强風である。殊に蒸暑き南風と氷のごとき北風との强きは、自然の中に暴露せる此地の避け難き名物である。されば樹木を植ゑて風をふせぐは、自然に促されし人間の工夫である。

この如き村の住民となつて、余は居ながらにして森林生活の實行者となつた。小さきデーヰッド・トロウとなつた。窓を排すれば、田畑は青々の色を呈して長くつゞいてゐる。その盡くる處は、鬱蒼たる樹木のために眞黑に見ゆる丘陵の一帶である。あちらこちらに見ゆる眞黑な塊は、いづれも森林部落である。目をあぐれば、椎、欅、杉、松等の喬木は、其とり〴〵の高き姿に云ひ知らぬ力を藏して立つてゐる。

仰げば、天空の半はその躍る雲と共に我現界に入る。耳に入るものは「風に動かさるゝ」樹の葉の音である。諸々の鳥の妙なる歌である。まれに起る人聲である。目を閉ぢ、心を沈め、耳をすます時、我をそゝるものは大自然の生命である。われに迫るものは大宇宙の呼吸である。われに響き來るものは全能者の聲である。春に佳く、夏に佳く、秋に佳く、冬に佳い。朝に佳く、晝に佳く、夕に佳く、夜に佳い。月夜に佳く、暗夜に佳く、曉月に佳く、星夜に佳い。風あるも風なきも、雲あるも雲なきも、雨降るも雨降らぬも、みなそれ〴〵の興趣がある。惡魔は都會を造り神は田舍を造れりと云ふ。鈍根われの如きも、かくまで自然に相抱かれては、つゐに神の光輝を忘るゝことは出來ぬ。

とみに我心身は生きかへつた。籠に捕へられ居りし鳥の、野に放たれては、生氣を恢復せずには居られない。心も體ものび〴〵として來た。形式と物質と因習とを生命とせる現代文明も余を全然壓倒することは出來なかつた。余には尙ほ殘存せる生命があつた。そして其者が少しづゝ生きかへり始めた。余は自己を取り戻したの

である。涙と鬱憂とを以て糧とせりし我も、今は感謝と歡喜とを以て心身を養ふに至つた。大地を踏みたてゝ我脚の健かなるを誇り、手をひろげて我心の天をいだく嬉悅に醉つた。余は曾て次の如く記した。

……生れて初ての田舍生活は如何に彼れ（自分のことである）を解放したであらう。我と自ら縛る繩を解へぬ以上は彼を束縛する何ものもなきを彼は感じた。彼の住む村は森の中にある。彼は家にありて「森林生活」の實行者である。彼の仕事場（書齋）の前の庭には椎だの欅だの檜葉だのいふ樹木が幾十本もある。その向ふは神社で、松と杉の大木が亭々として天空に向つて頭をもたげ、手をひろげて居る。潑溂たる樹の香は彼の胸にひしと迫り、鳥は數多くきたつて其快音を以て彼の書卷に勞れし腦をいやす。……或時かれは丘にのぼつて遠く丘下の野を見渡した。見わたす丘下の世界は中秋の日に照らされて、萬頃の稻田は大洋より來る涼風に黃金の波を動いた。青海は遠く延びて白帆を浮べてゐる。萬象は靄氣につゝまれて朦として白日に輝いてゐる。彼は泛然として涙のくだるのを禁じ得なかつた。

と。この丘に登つた「或時」とは、余が此地に定住した約二週間の後なる十月十九日の午後であつた。その日の日記には次の如くある。

我ヲ護ル神、我ニ力ヲツケル Christ
古山玉菱ノ中腹マデ上ル、見渡ス平原ノ清サ、我ハ此清キ中ノ人タルヲ感謝ス、ア、〇〇ノ生活（前の生

活）ニ比シテ今ノ何ゾ大ナル感恩ニ値スルゾ、心自ラ臨然トシ始メタリ、ア、感謝々々。

烏兎匆々、回顧すれば余もこの農村に住むこと、既に四年半に及んだ。世を遁れたるが如き我生活にも、その間に種々の變化が起つた。往事茫々、夢のごとくである。しかし天然と共に在る我生活は少しも變らぬ。家にありては果樹を育て野菜を作り、野に出で丘陵を走りては自然の大景に心を洗ふ。余は今も尙ほ雲を見る。今も尙ほ草を嗅ぐ。今も尙ほ土を耕す。今も尙ほ花を愛づる。今も尙ほ樹を仰ぐ。今も尙ほ風を聽く。今も尙ほ天然に包まれて生きてゐる。今も尙ほ天然に近く住んでゐる。

心靈の光り鈍くして、ともすれば神を忘れ去らんとする余は、せめても神の造り給ひし天然物に近く在りて、彼と我との接近をはかるより外に道はない。これ余が農村生活をつゞくる重なる理由である。

述作

述作は余の生命である。かく云へば、人は余の生命の微々たるを笑ふであらう。しかしながら、狹しと雖も我土地ならば、これを耕し、これに肥料を施さねばならぬ。愚かなりと雖も我子ならば、之を養ひ、これを育てねばならぬ。「筆は劍よりも力强し」とヰクトル・ユウゴーは云うた。劍を揮ふことを好まざる余は、勢ひ筆を揮はざるを得ない。書卷と靜想とを好む余は、おのづから筆に走らざるを得ない。

敎職を拋つて獨立傳道に志す時、余の心の大部分は筆を以てする傳道に走つてゐた。學生時代に二冊の飜譯書と二冊の飜案的著書を出したことは、今に至つて冷汗三斗の思がする。しかし我生來の文字癖は、此時牢乎として拔くべからざるものとなつた。のち敎師たる時に於て、僅かの暇を利用しつゝ、辛うじて『人間上進論』を飜譯した。そして學校を退きし少し前の暑中休暇よりは、カアライルの大著『クロムエル傳』の飜譯に取りかゝつた。六月の末、ほゞ此事を決せし時、日記に左の

如く記した。

自分ノ天職ハ著述ニアリ、サレバ校務ハ糊口ノタメトシ、歸宅後一週二三回（殊ニ暑中寒中休暇）執筆セン……

と。かくの如き敎師に對して俸給を支給せし○○縣は、大なる損害をしたわけであつた。しかし罪は自分のみにはなかつたと思ふ。——十月校を辭して野に急いだ時、匡底深く藏せられしは『クロムエル傳』五冊と未完の飜譯草稿とであつた。

傳道生活の大部を執筆に送らんとの我願は、幸に充たされた。恩師U先生は余の新生活に對して大なる同情と奬勵とを賜ひ、余に囑するにその主幹する宗敎雜誌のために毎月起稿することを以てした。そして一方に余は『クロムエル傳』の飜譯をつゞけた。細字千三百頁の原文を九百餘頁の日本文と化するに、余は四ヶ年になんとする年月を費した。その間、余は實に人知れぬ苦心を重ねた。難解を以て名高きカアライルの文章を讀むの困難に加へて、書中載する處のクロムエルの書翰と演說は、いたく余を惱ました。時代の舊きは其奇怪なる行文と相俟つて、讀む者の

頭腦に大なる重荷を課する。況んや良好な辭書もなく、參考書も乏しい身の苦みは、一通りでなかつた。了解するに難きものを更に邦文に譯すことは、抄譯なりとは云へ、大切なる所は一句も洩さじと努めた余に於ては、並々ならぬ苦き杯であつた。かくて余は倦怠と戰つた。困難と戰つた。中止を慫慂(しようよう)する魔鬼と戰つた。實に余の書齋は戰場であつた。そこに於て、誰人も知らず又知り得ぬ戰が戰はれた。たれか云ふ文學は娯樂なりと。これに我精力の最も良き部分と我頭腦と精神の最も良き方面とを傾倒せずしては、一行といへども書けるものではない。

『クロムエル傳』の飜譯終つて、余は重荷を卸した感があつた。暫らく休養せしのち余は詩聖ウォルヅヲスを邦人に傳へんとの希念を起した。彼の詩集の大部を讀みて、其中より五十七篇を選みだした。そして之を邦文に改めて解說を附した。詩の飜譯は、幾度も〳〵書き改めて最上の努力をなしたにも係らず、頗る劣惡のものの ほかは出來なかつた。これ慥かに我失敗の作である。

青年時代に於て、數年間獨逸文學の飜譯をつゞけたカアライルは、その仕事の創

作ならぬを以て、自ら journeyman's work (日雇人の仕事) と之を罵つた。その同じカアライルは『サアタ・レザアタス』の中に次の語を發した。

What is the use of health, or of life, if not to do some work therewith? And what work nobler than transplanting foreign Thought into the barren domestic soil; except indeed planting Thought of your own, which the fewest are privileged to do?

健康を有するも生命を有するも、之を以て或仕事をなさずんば何の用ぞ。而して如何の事業か、海外の思想を自國貧瘠の地に移し植ゑるほど、高貴なるべき。たゞし自己獨創の思想を植うるてふ、極少數者のみが爲し得る事業はおのづから別なり。

人よ、天才の矛盾を咎むるなかれ。甲も乙も共に彼れが貴き實感なのである。そして凡人なる余の心にも、亦交る〳〵此二つの相反したる感想が起つた。後の語は、飜譯に勞る丶我れを屢々激勵した。前の語は、我文筆の業について默想する我を常に叱咤した。回顧すれば、少小過つて細き譯筆を執りしより、既に十年の年をそれに献げた。かくて此「日雇人の仕事」のうちに我一生は終るのではあるまいか。天才ならぬ我れも斯くてはあまりに寂しい。——余は創作に移らんと決心した。

かゝて現はれたものが『悲哀より歡喜まで』である。これ我十三年の心的經過を約説しものである。材料蒐集のための讀書に數ケ月を費せし後、筆を執つて毎月一篇又は二篇を草しつゝ進んだ。我心靈の過去をたどりつゝ、基督的救濟の眞意を説かんとは、余が企畫であつた。種々の苦心があつた。わが小さき精神がそれに集注された。出來上りし者は甚だ拙なるものである。さはれ著者なるものより見れば、その一頁一頁が苦鬪の名殘である。

輕佻浮薄なる文字を歡迎するは今の世に限らない。基督の福音を筆を以て傳ふるが如きは、所謂「割に合はぬ仕事」である。物の報酬を考へて出來る仕事ではない。「彼は賣れさうもない本ばかり出してゐる」と、昔の友等は余を批評したとか。そして或深切なる友人は、もつと一般に向くものを書けと忠告してくれた。世には著述を以て家を建て財を積む人も少くない。もし余が、生活の分量をその性質以上に貴ぶならば、余はこの忠告に從ふべきである。さり乍ら思へ、文士の筆は武士の劍である。武士の劍が輕々しく拔くべきものでないならば、筆も亦尊重して使用せねば

なるまい。たとへ余に「人よりにあらず、亦人に由らず、イエスキリストと彼を死より甦らしゝ父なる神に由りて立てられたる使徒パウロ」の大確信はなくとも、少くとも余は福音の宣傳者である。されば我筆もし一度なりとも、イエスの精神を傳ふる以外の事に動きなば、余は神の賜を濫用せし罪をまぬかるゝことは出來ぬ。我は我が凡てを神に献げたものではないか。我が筆は我が筆にして我が筆ではない。かれの命のまゝにのみ動かすべきものである。

Our wills are ours, to make them thine.

と詩人は斷じた。物の報い少なきを知りつゝ筆を動かし、多く賣れざるを知りつゝ書を著すは、余が負ふべき小かなる十字架である。偉大なる彼犧牲の大生涯にならはんとするわが小かなる犧牲である。カリバリ以上に立てる羞辱の十字架と、それより流れくだる碧血とを仰ぎ見る時、わが筆いかで彼のためならで動かうや。わが舌いかで彼のためならで動かうや。あゝ主よ、余をして財魔の誘惑に陷ることなく、此世に生くる限り汝の聖業に從はしめよ。

讀書

書に淫するは我幼時よりの病癖である。余は群童の戸外に嬉戯する聲を聞きて机邊に端坐する小兒であつた。學生時代に於て、教科書以外の書に眼をさらさずしては、余の心は安んじなかつた。人を教ふる身となつても、余は我知識を肥やし我思想を練ることを棄てなかつた。今も尙ほ余は書を讀むを好む。書齋はいと〻貧弱なれば、師より借り友より借りて、余は書に耽る。讀みし事の大部は忘れてしまふ。それでも余は書を讀みつゞける。腦力と精力とを多く讀書に費すことを、愚かなりと思ふ時もある。それでも余は書を飽かずに讀む。飽いても强ひて讀む。强ひて讀んで其多くを忘れる。それでも讀む。これ余の性癖にして如何ともすることは出來ぬ。かの守錢奴が財の蓄積さるゝてふ事その事をのみ樂みて、これを使用するの途を知らず、空しく蓄財の努力のうちに死するが如く、余もまた獲たる知識を腐らせつゝ、さらに獲んと努むる努力のうちに、目を閉づることであらう。貴むべきか—

否、賤しむべきか—余はこれを知らない。たゞそれが痼疾のごとく余につき纏ひて離れざる一事は慥かである。

森に住みて野を眺めつゝ暮す今の住居は、書を讀むに於ては大學圖書館にまさる好適の場所である。「書物はこれを讀む場所によりて價値を異にす」と喝破したる詩人ホイットマンならねども、世界を拂ふ風に吹かれつゝ、風に運ばるゝ美花の芳香に醉ひつゝ書に親むは、正に無上の快樂である。連日筆をのみ執る能はず連日土をのみ耕し得ざる我にとりては、書は世に背ける我孤獨の生涯の大なる慰めである。

傳道者なる余は、專門學科として舊新兩聖書の研究をする。聖書及び一般基督教に關する書籍を讀む。この研究は必ずしも容易くはない。時には煩瑣な辭句の註解をも精讀せねばならぬ。また時にはいやな神學書をも讀まねばならぬ。併しながら書物は娯樂としてのみ讀むべきものではない。

自身のため又は子孫のために財を蓄ふることに於て、家族又は國家を創始することに於て、名譽を獲得することに於ては、われ等は一時的(モウタル)である。しかし眞理を取扱ふ時に於て我等は永遠的(イムモウタル)である。

これ『森林生活』の著者、デーヰッド・トロウの語である。げに眞理の獲得は國を建つるにまさる大事業である。されば高貴なる眞理を少からず藏する聖書を研究して、その中より金銀寶玉を採掘せんとする事業は、その伴ふ困難と煩雜とを足下に踏まへて忍耐を以て遂行すべき値あるものである。

眞理の獲得に要するものは、忍耐のほかに寛洪である。聖書のみを讀みて我等は固陋となる懼がある。トロウはまた曰ふた。

……さらば謙つてゾロアスタにも親めよ。而してイエスキリスト其人と共に、凡ての貴き人々（聖者、思想家、詩人等）の我を廣くする感化に浴して、「我等の敎會」を亡ぼせよ。

と。「我等の敎會」「我等の敎會」と、敎理の外廓を廻らして、宗敎の形骸を守ることの愚かさよ。

我等に敵抗はざる者は我等に屬くものなり（馬可傳九章四十節）。

とイエスは言ひ給ふた。われ等は生れながらにして觀察者にして、且思考者である。我を養ふ良書は到るところに在る。偉大を以て稱すべき書は多からずとするも、味

つて以て我精神を肥やすべく、飲んで以て我渴を醫やすべき良好なる書は、その數少しとしない。——ゆゑに余は專門以外に讀書の範圍を伸ばしてゐる。人の稱して以て趣味となす處のものには全然沒交渉なる余も、讀書てふ事の範圍に於ては多趣味である。科學、文藝、哲學、宗敎、思想の各方面にわたりて、時の古今を論ぜず、洋の東西を問はず、いやしくも良書にして且了解し得べきものは、（時には良書ならず又了解し得ぬものをも）、讀んで以て我思想の肥料とする。敎訓と眞理とは我讀む何れの書にもある。宇宙と人生とについて或暗示を受けぬことはない。眞理の大山は巍峩として我前に立つてゐる。それを一歩一歩攀づる我れに、小なる努力あつて大なる喜悅がある。余は此世に生けるかぎり書を讀みつゞけんと願ふ。目的とする處は、神の造り給ひし宇宙と神の子たる人の生について、ヨリ深く知り、自ら育つと共にこれを他にも頒たんとするにある。これ正に傳道者たるものゝ義務にして、又快樂である。

曾てカアライル先生は、其名著『サアタ・レザアタス』に於て左の如く曰うた。

人類過去の產物は三つある。第一は都市である。第二は耕地である。そして第三は書籍である。第三は最後に發明せられたもので、他の二を凌駕する。眞なる書の價値は、げに驚異すべきである。年々毀破れ年々修繕はればならぬ石造の都市とは違ふ。それが若し耕地に似てゐると云へば、靈的の耕地である。それは靈的の樹木として永久に立つてゐる。年ごとに新しい葉がうまれる。眞の書を著はすものよ、汝も亦征服者である。勝利者である。悪魔に勝つなれば眞正の勝利者である。汝は大理石や金屬よりも永く生くる者を建てたのである。愚か者よ、何故に汝は埃及の金字塔などを觀るために遙々と出掛けてゆくのか。彼等は過去三千年間、馬鹿顔をして、何もせずにぼんやりと砂漠を看下してゐる奴等ではないか。汝は汝の希伯來聖書を、或はルツテルのその譯譯を、開くことは出來ぬのか。

と。然り、思想の黄金は道行く人の前後左右に轉がつてゐる。しかるに、道に横はる銀貨銅貨を拾ふに忙しき今の人は、かの黄金を顧みない。眞理の花はいと美はしく室内に咲いてゐる。しかるに、疲れし脚をひきづりつゝ花を逐うて狂ひ廻る現世人は、手近の花を忘れてゐる。その讀むものは日々の新聞紙である。教科書である。娯樂雜誌である。低級なる小説である。その語る處は、いとも〳〵小さき其日其日の出來事である。隣人の噂である。天候に對する不平である。昨夜の地震の話である。

外國語を解するものと雖も、概ね片々たる俗惡文學を樂みて、俗語難句の知識を誇る位のものである。我等は倭人國に住んで居るのではなからうか。かくても我等は世界の一等國民と誇稱するのであらうか。イザヤの大豫言をも知らず、イエスの大精神にも接せずして、また東洋の產として殆ど自國の產の如く誇る孔孟の眞精神をも讀み得ずして、それでも皇國の民と誇るのであらうか。あゝ救ひ難きは文字なき民ではない、文字あるも之を善用し得ざる民である。死せしカアライルをして、又死せしトロウをして、尙ほ其預言の鞭を絶たざらしむる民は、決して幸ひなる民ではない。

＊　＊　＊　＊　＊

土を耕し野を歩みて天然と交はるは、我が生活の第一である。紙を展べて想ひを綴るは、我が生活の第二である。良書に眞理を探るは、我が生活の第三である。これに口を以てする傳道を加へて、農村傳道者の生活の樣式は完備する。最後のものについては、篇を改めて說かう。（大正五年六月稿）

傳道五年

上

露國出征の首途に立つ那翁が馬の轡をとらへて、Man proposes, but God disposes（人は計畫す、されども處理するは神なり）と叫びたりと云ふ老媼の語は、余が小さき生涯の說明として、またなき言葉である。我が村落生活の過去五年間を回想するとき、之を一貫する大能の手跡の墨痕淋漓たるを、余は思はれずには居られない。

そも〳〵余は筆の傳道を好んで、口の傳道を厭ふものである。多く筆を動かし稀に口を動かさんとは、余が初めの計畫であつた。これ一は我天性の傾向に從へるなりとは云へ、また實に前者の永續的なると後者の一時的なるとが、對比せられし爲であつた。しかしながら、數名の同士はその集會に於て余の聖書講義を要求し、また別に求道者を募りて、余をして素人說敎の口を開かざるを得ざるに至らしめた。

かくの如くにして四年と九ケ月を過ぐる今は、筆の努力と口の努力が相伯仲するの有樣である。或は後者が前者を超ゆるかも知れぬ。文士たらんと計畫せし我は、次第に農村傳道者となりつゝある己を發見する外はなかつた。體は田舍にあるも、心は文明世界とその學術、その文藝、その思想にありたる我は、都會の衣を纏うて野を耕す田夫に比すべきものであつた。不純なる衣を去りて我手を揮ひ我脚を動かすに至らずば、余が農村に退きし意味も不徹底に終るをまぬかれぬ。キリストの福音を宣傳せんがために村落にある余は、更に土臭くなるを要する。土の香が我五體より發するに至らずば、キリストの光明はかゞやき出でぬ。神は有識階級をのみ目指す我文筆生活の半を削ぎて、文字なき村落居住者に福音を宣傳する村落傳道者を我より造り給ふた。彼は我が熱愛し我が計畫せし筆の事業の半を奪ひて、我が嫌惡し我が忌避せし口の事業を與へ給うた。かくて余はやゝ純粹に近き田舍傳道者となつた。感謝すべきか感謝すべからざるか、余は能くその事を知らぬ。たゞ But I propose and I dispose（されど余は自ら計畫し且自ら處理す）と、彼老媼に答へたる那翁にな

らひて、やゝもすれば自ら計畫し、自ら處理せんとする驕慢にして痴愚なる余が、事は皆わが意表に出でゝ、願はざる處に引き廻さるゝ自己の姿に大能の鮮かなる手跡を認むるは、我内心に感ぜらるゝ明白なる事實である。讃美すべきかな彼れ！

余が最初の傳道地はN村である。此處のAは余と師を同じうする關係上、以前からの親友であつた、彼の家に於て時々教友の集會がある。同志數名來會する外、Aの家族もこれに出席する。余が此集會に出るやうになつてから、Aは村の青年數名を招いた。のち村人のための聖書講義會が別に毎月二回開かるゝことゝなつた。これ日曜日をも勞働に費す村人のためには、夜に於て特別の集會をするを要したからである。余は日曜日の夕方家を出で、二里半の道を徒歩してAの家に到り、聖書を講じてのち、一泊して翌日再び二里半を歩みて歸るを常とした。曾て余は次の如く認した。

集まるものは大部分農家の青年である。かれ等は日の暮るゝまで働いて、休む間もなく夕食を喫めて直ちに馳ぜきたるのである。……彼等は都會の青年や學生のやうに利巧さうな顔をしては居らぬ。日に焼けた眞黒な正直さうな顔をさげてやつて來る。彼等には學生へのやうに福音は早くは還入らない。しかし彼等は實際生活の勇士であるから、少し這入つたゞけが直ちに實際生活の上に表はれる。それ故口に云ひ表はすことは學生の信者に劣るが、實際に體得せる點に於てはさても後者の及ぶ處でない。

健康に因て吸收せらるゝ澄澈たる智、

快活に因て吸收せらるゝ眞理（チルヅチス）

は彼等農村の青年の獨壇場であつて、文明の學問中毒に心の平衡を失してやゝもすれば病的たらんとする都會の學生に、容易に得られぬものである。

これN村に於ける傳道一年半後の、余の落着いた心に浮びし感想であつた。しかし乍ら、最初は暗夜に歩む人のごとく何事もわからず、たゞ新たなる業に對する新たなる興味を以て、幼稚なる說教を繰返すのみであつた。初會には二三十人の聽衆が集まつた。その中には老人も壯年も青年もあつた。第二回目より次第に來會者の數が減つた。老人と壯年者は追々來なくなつた。青年のうちにも來なくなるものが殖えた。しかしまた新たに出席しはじむる青年もあつた。一年以上も續けて出席した後、急に姿を見せなくなるものもあつた。來會者の多寡は問題にすべきものでな

いと知りつゝも、さて多い時には心うれしく、少ない時には心さびしい。ましてや信仰の出來始めた嫩葉の其のまゝに凋みゆくを見るは、いたましくも又辛きことである。一回の説教にも、時としては一週間の準備を要することがある。意氣ごんで數里の道を行きみれば、來會者のあまりに少きに、我口舌の鋒先の鈍りしことも一再に止まらなかつた。辛きこと、悲しきこと、寂しきこと—ともすれば之等が我が安息日の糧であつた。時には我勞力に酬ゆるを知らぬ人々の無情を怨みて、聖き安息日を濱せしこともある。机に向つて筆甜りつゝ感ずる我平靜も、活ける人と實際の交渉に入つては、亂れがちなることが感ぜられた。一は勞力の結果を思はず他はそれを思ふがためである。

主の御跡を慕ひまつる身の、十字架を負ふは、もとより覺悟せる處である。ましてや我味ふ心勞が多くは我肉情の生む處なるを知つては、余はその纒綿に屈せずして、決然として彼岸を指す進路を歩まねばならぬ。されば、

こゝに云はざる外の事ありて日々我れに迫る、即ち凡ての教會の憂慮なり、誰か弱りて我れ弱らざらんや、誰か躓いて我心熱せざらんや（哥林多後者十一章二十八、二十九節）

との使徒パウロの述懷は我れにもあれど、

また汝等を累はせざらんとす、そは我れ汝等の所有を求めず、たゞ汝等を求むればなり……我いよ〳〵汝等を愛すれば愈々汝等に愛せられず、されど欣びて汝等の靈魂のために財を費し身をつくすべし（仝十二章十四、十五節）

との彼の語は我を勵ましてやまぬのである。げに余は『汝等の所有を求めずたゞ汝等を求む』るのである。我がために求むるのではない。これを「潔き女としてキリストに献げんとする」のである（同十一章二節）。そしてキリストに献げんものは、彼の嘉し給ふ祭物でなくてはならぬ。今日濱の眞砂の如く數多き曖昧なる信者の如きは、彼の嘉納し給ふ祭物ではない。故に余は確實なる信者を求める。眞正なる信者を求める。少くとも、確實となり眞正とならんと努めつゝある信者を求むる。而してかくの如き信者を得んがために「財を費し身をつくす」も、また已むを得ない。否、我れに於て若干の犧牲を拂ふことなくして、斯かる貴き信者の得られる筈はない。

「……これ如何にもして彼等數人を救はんため也」（哥林多前書九章二十二節）と、パウロはいみじくも云ひたるかな。げに「彼等數人を救はんため」に、然り彼等數人に生命を與さんために、余は喜んで我生命の一部を割かねばならぬのである。「たとへ萬樣の死と苛責とが我を俟つとも、我は一人の靈魂を救はんがために、一萬回これを受けて辭せざるべし」と、偉大なる傳道者ザヰエーは云うたではないか。

傳道滿一年を經たとき、H村が新たなる傳道地となつた。この村に於て近頃敎友の一人となつたBが、その家に來聽者を招いたのであつた。Bが村校の先生である關係上、來聽者の大部は小學敎師であつた。ほかに二三の農夫、商人等があつた。此村に於ても、來聽者は幾多の變遷を經た。初め來りし人々の大部は後に來なくなつた。そして中途より、ほかの人がよく加はつた。余はN村に於けると全く同じ經驗をH村に於ても嘗めた。それは辛くして又嬉しき經驗であつた。余の說く所が多數者に斥けられて少數者に受納れらるゝてふ一事は、約翰傳を多く讀み約翰傳を多く說く余にとつては、まことに喜ばしき滿足の寄與者であつた。

毎月第一と第三の日曜に於て、余は先づ四里の道を歩みてH村にゆく。來會者は大抵六七名である。先づ一時間半乃至二時間にわたる輪講會を司りしのち、余は一時間の聖書講義（說敎を兼ねたる）をなすを常とする。そして半時間乃至一時間の雜談又は質問應答をなせし後、余は一里半の道を引きかへしてN村に到る。途中に於て日の暮るゝが常である。N村のAの家に集まる農村青年は、六七名のこともある、十二三名のこともある。外に數名Aの家族が聽講する。そして疲れし話者は疲れし勞働者に向つて、約一時間の聖書講義をなし、のち一時間內外の輪講があつて、更に少時の雜談をせし後に散會する。一日を肉體の勞働につかれし人々が、更に其夜を精神の勞働に用ひてのち歸途につくは、大抵十二時に近き頃である。一泊して翌日二里半の道を歩みて歸宅せし後は、余はたゞ綿のごとく疲れて臥するのみである。――かくの如くにして暑き日も寒き日も、雨ある日も雨なき日も、風ある日も風なき日も、それが第一と第三の日曜であるかぎりは、余は必ず右の兩村を訪ふ。そして心身ともに疲れはてゝ歸宅する。

傳道四年目の夏より、Y村が新たなる傳道地となつた。この村のCは以前からの教友であつたが、いよ〳〵自宅にて「集會」をすること丶なつて、來聽者を募つたのである。來聽者は隨分多い。しかし其急速に減少しつ丶あるは、他村に於ける既往と同樣である。この村に於ては毎月二回集まる。

傳道五年目の春より、M村に於て、毎月一回數名の人が集まつて、余の聖書講義を聽くこと丶なつた。またK村のDの家に於ても、凡そ二十日に一回、適當なる日を選んで、聖書講義會を開くこと丶なつた。集まるものは十數名ある。しかし次第に減少することであらう。今余が毎月の集會を表にて示せば左の如くである。

第一日曜　午後H村、夜N村（宿泊）……二日間の徒歩約八里
第二日曜　午後自宅、夜Y村（宿泊）……二日間の徒歩約二里
第三日曜　第一日曜に等し……
第四日曜　午後M村、夜Y村（宿泊）……二日間の徒歩約五里
第五日曜　午後N村にて總集會……往復約五里

外に平日に於て凡そ二ヶ月に三回K村にて開く……往復一里半
（此表は其後多少の變更を經た、しかし此文の草せられた時は此通りであつた。）

下

傳道五年、その結果如何とたづぬる人もあらう。あ丶結果、結果、余の恐る丶は此語である。イエスがその死を制めんとせしペテロを「サタンよ我後ろに退け……」と叱したのは、生きよとのサタンの誘惑を怖れぬた丶めであつた。結果の一語に身慄する我は、結果、結果とせまるサタンの囁きに、捨てし世の舊き聲に耳を蔽ひし坂東の勇者をまねしこと、一再にとゞまらなかつた。結果のために働くは、此世のことではないか。結果を見すしては滿足せぬのは、不信なる現世とその子等のことではないか。これ我が厭ひ棄てたる此の世の、厭ひすつべき精神ではないか。眞理のために働く其一つ一つの活動が即ち成功である、結果の如何は問題ではない——かく詩聖ブラウニングは高唱したではないか。——かく思うて余は結果、結果と我

にさゝやくサタンの聲と戰ひつゝ、偏に我に與へられたる道にいそしまんと心がくるものである。

もし强ひて余が傳道五年の結果を成敗いづれかの範疇に入れよと迫る人あらば、余は「失敗」の一語を以て答へ度いのである。そも〳〵人は聖靈に感ぜざれば、イエスを主と云ふことは出來ない（哥林多前書十二章三節）。花は日光を受けずしては、天に向つてその光輝を發することは出來ぬ。傳道師と園丁とは肥料をほどこし、雜草を除き、日光と空氣の供給を自由ならしめ、以て成るべきものゝ成る時を待つものたるに過ぎぬ。偉大なる聖手の動くごとに凡てが書かれてゆく。傳道事業に成功又は失敗の評語を附するが如きは、世に上なき曲事である。しかしながら此曲事を以て我に臨む人あつて、而して此曲事を以て我の彼に應ずるを强ふるならば、余は「失敗」と高く叫ばう。

そして所謂傳道の失敗は、殊更に農村傳道に於て强く感ぜられるものである。これ農村に於ては、一人の摯實なる求道者を得んためにも少からぬ努力を要し、そして一人の眞の求道者を得し時は、多數の聽者を失ひし時であるからである。いづれの村に於ても、余の味ひし經驗は同一であつた。はじめ會する者は多數の單なる聽者である。たゞ聽かんために集まるものである。基督敎の何物なるかを知らず、聖書をも持たぬ人々である。これ等の人々のなかより、眞に救を求むる人が出づるまでには、短くとも一年間（或時は數年間）集會をつゞけねばならぬ。その間に大部分の人は全く姿を見せなくなる。既往五年間に、余は數百人に向つて口に依る福音の證明をなした。そして其中の少數を除いては、みな神の眞理を厭ひ棄てた。あるひは敬して遠ざかつた。

かく我が傳道は、たしかに失敗に了つた。さはれ余は、此事を以て決して自己の恥辱としない。「光は暗きに照り暗きはこれを悟らざ」る此世に於て、余が唱ふる福音の人に斥けらるゝは、余の恥辱にあらずして、寧ろ小かなる余の誇である。神よ！願くはこの小なる誇を我にゆるし給へ。友よ！乞ふらくはこの小なる誇の故を以て我を尤むる勿れ。

殘留した少數者は眞の意味に於ての求道者である。眞面目に天の聲をさぐらんとする人々である。そして此うちから、次第々々に信者が出づるのである。しかし教會に係りなき我等は、また有形的區劃をこのまぬ我等は、名目を以て人を區別することを欲しない。故に眞正の意味の求道者と信者とは、兩つながら我等の友人として貴重なのである。肉の洗禮は益なし、靈の洗禮こそ効あれ。徐々としてしかも確實に我等の友がキリストの救濟を享受するを見るは、世にまたなき嬉しきことである。いでや斯かる貴き友の二三を擧げて、此篇を結ばう。

既に四年九ケ月傳道したるN村に於ては、余の貴き友が七八名ある。そのうちAとEとは、余よりも前にキリストの救ひにあづかりし先輩にして、余の最も畏敬する友である。この二人の特色ある生涯と信仰とについて、余は語るべき多くを有すれども、いま暫くこれを略す。青年者のうちにFがある。彼れの剛健多感なる資質は、その信仰と相伴つて、彼れの生活に或種の特色と意義とを與へてゐる。余が初て此村に傳道せし時より、彼の態度は他の者と全く違つてゐた。數ある聽者の中に

も、彼のみは余の目につかずには居なかつた。果せるかな、他の凡てが遂に福音を受けざりしなかに、彼れ一人のみは摯實なる信者となり得たのである。また年少者側に、すでに福音信受の歡喜に浴せし者が數名ある。かれ等は初は熱心なる聽者でなく、集會に出席することも月に一回、または二ケ月に一回位の有樣であつたが、いつかどうか主の捉ふる處となつたのである。その中のGは、曾て左の如きハガキを余に寄せた。

拙筆もて申上候、昨日は突然先生を訪問し大いに御邪魔いたし誠に申譯無之候……さて先生訪問の目的は何か信仰上の助けと成るべき事を伺ひ申候事に御座候處、それに違はず有益になりし御話なし下され誠に感謝する次第に御座候。亦先生には以前よりも吾々のため、神の國の福音、傳道なし下され、少しながらも神の御國の道を歩みて、その惠と慰めをうけ、神の御國の福音の書も身にしみて讀むことの出來る迄になし下されしこと皆先生の御影にて、そは大なる基督信者となりてこそ初めて御禮申上げ得べきことゝ存じ居候へば、必ず大なる信仰のある人となりて御禮申上げ候……。

余の小なる努力に對して、立派なる信者となりて報恩せんと云ふ。けなげなる覺悟と云ふべきである。附記す、Gの齢は二十である。

Gより一歳年少のHは、或時青年の會合に於て告白するに、長く彼れを惱ませし東京熱の全然失せしことを以てし、且以後は基督敎の信仰を以て立たんとの覺悟を披瀝した。Hは小學校の秀才であつた。そして貧しき小作人の長男である。鍬を持つて泥田に立ちつゝ、東都の空に憧れの眸を注ぎし彼が過去數年間は、げに大なる同情に値する。かれの新たなる決心の告白に接したる余は、直ちに筆もて小なる同情と奬勵とを致さずには居られなかつた。左掲は余の手紙に對する返信である。

……先づ先生を始め〇〇氏〔N村の中心人物たるA〕に深く感謝してやまざるのであります。何となれば私が先日話したる如く決心するを得たのも、初め種々の誘惑のため暗黑にと足まで入れしを、〇〇氏の實に御仁愛を以て警告せられ、而して先生の御話にも聞きに參ることが出來、一回二回と回數を重ぬるに及び愈々其非を悟る事が出來、今にいたる樣な幸ひを思ひては深く〳〵〳〵感謝するのであります。而して私はあの神の福音を信ずる樣になりてより、貧家の子弟なるもかへつて幸ひと思ひ、小作農を大いに趣味を以てやることが出來る樣に相成りました。尙私は一生之れに依り吾が身を送り、且は他人をも大いに救ひ度く思つて居ります。で私は此現在の考を終始一貫させ度きが大に希望する所、私は大正五年度より、前に少しは酒を呑みましたが、酒煙草は一切禁することと致しました、目下〇〇君と共に研究〔聖書を研

究すること〕する次第、尙ほ近隣の人々をもすゝめんとしつゝあります。扨私はよく人の多く集まる所などでクリスチャンの非難をされる事がありますが、彼等はあはれなる者と見て之にさからひません。然しこれからは一層深く研究し、尙聖書に關する書物を讀まうと思つて居ります……

N村に於ける青年農夫中の余の友は、大凡この類である。彼等を他の農村青年と比較する時、眞に彼等が粗衣をまとへる貴人なることを知るのである。

H村の傳道を一二年つゞけし時に、會主たるBの實際的信仰がその聖書知識の增加とともに、一層の光輝を加へし外に、先づIが熱誠なる信者として頭角をあらはし來つた。Iは高等學校の學生であつたが、家庭の悲劇は容赦なく彼を故郷の代用敎員となした。胸に創ある彼は、福音の値と力とを感ずることに他の者より敏であつた。彼の熱誠なる信仰と摯實なる態度とは、日增に增大した。「世に最も薄倖なるものとして自己の不運をかこち居たる小生も、福音の光に照らされて大なる幸福を受くる身となり申候」とは、嘗て彼より送り來りし書翰の一節である。彼について記さんとせば、多くの材料がある。しかし玆には、彼が基督敎に接して心的革命を

經たる最も著しき一人であることを云へば足りる。また同じ村に於て、一人の青年農夫が信仰に入つた。Jがそれである。彼は初から眞面目に勞働し眞面目に生活せる青年であつたが、基督敎に接するに及びて、徐々として救濟に入り、徐々として信仰を得た。しかしながら家庭に於て、また鄕黨に於て、彼は戰はねばならぬことが多くあつた。孤獨の苦みを彼はしば〳〵嘗めた。苦悶は度々彼れを襲つた。信仰の動搖は時々彼の受くる十字架であつた。しかし彼の心靈的家屋は巖の上に立ちしと見え、動搖は度々あつても崩壞は遂になかつた。彼の心をみだす波動は、たま〳〵彼の誠實なる信仰を語るものである。彼も亦貴き信者の一人である。彼は或時自己の信仰の薄弱なるを强く恥ぢて、左の如き苦悶をした。

……何故神は自分如き人間を、罪を知りて罪を思はざる一番の下等社會に投げ入れざりしや、何故にかゝる無神經同樣の人間を此世に出せしや、何をさせても一人前の仕事の出來ざる不具者として此世に出せしか、實に落涙に忍び難く相成候。何につけてもつれなき浮世より、かよわき我身の何處に立場が有るかと、悲哀の情は一層高まり申候。時に小生はふと讃美歌を思ひ出し候「誰をかたのみて、なににか賴らん、たゞ神のむすぶ愛の友あり」。愛の友に尾行すること並に三年八ヶ月、行に於て多少改まりしことは事實に候へども、キリスト敎の根本的眞理を得ざるために候、只々自身の無智なるに悲感いたし候。……昨夜より「えん世」的に相成り、自分の不眞面目なる事が……痛切に腦に浸み渡り申候。同時に先生の御敎訓により、今何年かの後には、一人前の信者となれると云ふ確信致し居候處……之では神の下僕として仕ふる事が出來ぬと、遂に苦みに悶へ居候。先生の熱心なる傳道も、小生に取りては一を得て九を水泡に歸したることゝ深く御詫致す次第に御座候、今日は悲感のあまり仕事も手に付かず、父の留守をつけ込み靈室内に於て此亂書を認め差上申候間、御多忙中恐入り候へども御閲覽被下候へば本懷の至りに御座候。

右の手紙の末尾に、次の如き祈禱の言葉が記してあつた。彼は獨り靈室にあつて、此の切なる祈をさゝげたことであらう。

神ニ祈ヲ捧ゲシ言葉モ附記ス

ア、愛ナル神樣。此ノ力弱キ罪アル私ニアナタノ暖キ御手ヲ垂レテ救ヒ給ヘ。常ニ眠レル此目ヲ充分ニ開キ、アナタノ御敎ニヨリ一日モ早ク心强キ生涯ニ入リ、アナタノ御慈愛ヲ充分ニ味フ事ノ出來マスル樣、此ノ弱キ靈ヲ救ヒ上ゲ給ヘ。ドチゾ砂上ニモ立ツル事ノ出來ザル此信仰ヲ、巖ノ上ニ立ツルコトノ出來マスル樣。只々私ハ小キ事ニノミ煩悶シテ居リマス。ドチゾ此ノ煩悶ヲ取除キマシテ、アナタノ偉大ナル御力ヲ與ヘラレン事ヲ。此短キ祈禱ヲ貴キ「イエス」ノ御名ヲ通シテ祈上奉ル、アーメン。

彼の煩悶を以て彼の薄信に歸する者あらば、そは淺薄にして且無情なる人である。

「我神、我神、何ぞ我を棄て給ふや」と苦悶の叫を發したる時に於て、主は最も神に近くあつたではないか。我等は事の外形を見ずして、その內眞を見ねばならぬ。J の摯實なる自己省察と、痛切なる祈禱の態度こそ、まさに彼の値を語るものではないか。かくの如き動搖を經てこそ、また斯くの如き動搖に於てかくの如き切實なる銳感を持してこそ、我等は初めて後に於て、不動の信仰を與へられるのである。慰めよ！友。君は此時まさに、高峯を極むべき中途の暗き谷を歩んで居たのである。やがて天霽れ氣沈みてのち、君は天を指す高峯の清姿の我に遠からぬに驚くことであらう。多望なるは君の前途である。

Y村のKは、近頃信仰に入つた青年である。忽ち彼は附近青年の嫉視を受けた。たまたま一事件の突發するあつて、五六の青年は自己の罪を蔽はんため、理不盡にもKに對して批難攻擊を集注した。此事を耳にしたる余は、一書を送つて彼の苦境をなぐさめんとした。左掲はそれに對する彼からの返書である。先づ事の顚末を述べたるのち、次のごとく記してあつた。

……かゝる道ならぬ理窟を以てする彼等と爭ふの無益なるを知り、一は過日先生の愛敵の敎訓の講義も聞き、小生は男らしく彼等に謝罪致候。しかし小生は其節に彼等を惡み且剛愎と思ふ念慮も、幾分か平生よりうすらぎたる一事は、終生の喜びとする次第にて候……實に鄕黨の友人に捨てらるとも、又如何なる誤解、羞辱、迫害を蒙るとも、我を守る師あり又眞の友あり、小さきながらも小生の心事を解する人あるを知り、心滿足に堪へず候。……又信仰の度を高むるに於て好き機會を與へられしを感謝致し居候。此事に就き少なからず小生は罪を犯したれど、神は小生をはなし給はず、益々聖手を伸ばされ、余の罪多き身をも厭はせられず、義の方に引き寄せられつゝあるを感謝致候。……聖書の意味も幾分か以前より解することを得、神の導きに依り舊約書 エレミヤ哀歌三章三十節の忍辱の敎も目を通すやうに相成候。……義のために責めらるゝものは幸なり、我主のために責めるゝならば、如何なる迫害羞辱も喜で之を受けらるゝやうになりしは、誠に先生の御力による外なく候。もし我にして神を知ることなかりせばかゝる問題も起らず、若し事件起りしならば余は無念やる瀨なく、自殺でもせしやと思ひ居候。……今まで情實のために身は縛られ、自由ならざりしも、今後は非常に自由となり、義の前には千萬人の敵ありと雖も我れ往かんと云ふ大いなる勇氣も、神より授けられし樣の心地致し候。……先づは飢文にて御煩讀の勞を謝し申候、古歌に

踏まれても根づよくしのべ道草の

やがて花さく春はきぬべし

之を愛誦致居候。

此手紙に接して、我にも亦少からぬ滿足と感謝とあり。乃ち耶利米亞哀歌三章三十節の忍辱の教とは何なるかと、聖書をひらき見れば、鮮かなるかな古へ預言者の大精神！

おのれを擊つものに頰をむけ、充ち足れるまでに恥辱を受けよ。そは主はとこしなへに棄つることを爲し給はざるべければなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

傳道五年、何のためぞと人は怪しまう。何を獲しかと友は尋ねよう。怪しむをやめよ。尋ぬるをやめよ。而してたゞ余が忠實なる播種者ならざりしを責めよ。目的と結果とは、傳道者にありては多く問題とならぬ。たゞ天の父の命に忠實なりしか如何、わが蒔きし種の健全なりしか否か——これのみが問題である。

さりながら、學び得し一事は明かである。そは「我父あたへざれば人よく我に來

るなし」（約翰傳六章六十五節）とのイエスの語の眞なることである。げに此世は、大體に於てイエスを斥くる所である、そして其中の極て少數者が、彼を主として迎へるのである。此世を代表するユダヤ人に向つて、イエスは言ひ給うた「されど汝等信ぜず、こは我羊にあらざれば也。（されど）我羊は我聲を聽く、われは彼等を知り、かれ等我れに從ふ。われ彼等に永生を與ふ、彼等いつまでも亡びず、又これを我手より奪ふものなし。我に彼等を賜ひし我父は萬物より大なり、又わが父の手より彼等を奪ふ者なし」（同十章廿六—廿九節）と。深きかな此教！　貴きかな此聖語！　われ今之れを如實に知りて無限の感謝に耽り、宇宙を貫く聖手の委に心より醉ふ。神よ願くは次の傳道五年、また次の傳道五年をも祝し給うて、我をして終生此樂しき業にあらしめ給へ！　（大正五年七月稿）

我心境に住む偉人の群

使徒パウロ

勇剛なる使徒パウロ！　基督信徒となりて初めの數年は、余はむしろ彼を怖れた。彼は余にとつては、あまり偉らすぎた。余の心に親しきは、使徒ヨハネであつた。彼が愛の使徒と稱ばれてやさしき人であつたと云ふ傳説と、彼の著作と稱せらるゝ約翰傳と約翰書の優雅高遠なる姿とが、相俟つて彼を余のこゝろに最も近きものとなした。弱き余は、そして詩的冥想の安易を樂む余は、パウロの活動的なるを怖れて、ヨハネの靜寂味に心をよせた。新約聖書の人物中に於て、主と仰ぐイエスは別として、聖ヨハネは我理想の人であつた。然るに、のち、約翰文學が使徒ヨハネの作なるか如何が大なる疑問であることを聞き知つて、我が心に濃かりしヨハネの姿が忽ち薄くなつた。我が心はおのづからパウロに牽きつけられ行つた。パウロの書

翰を學べば學ぶほど、彼は余に親しい人となつた。怖ろしき彼が愛すべき友と化した。我が實際生活の種々相にひき比べて、彼の精神の如何に偉烈なるかゞ次第に知られて、彼はます〳〵余に親しき人となつた。

耿々たる彼の精神は、觸るゝものを燒き盡さずしてはやまぬ活火である。彼が生ける精神の具象化たる彼の書翰を讀んで、彼より臨みきたる靈化的勢力を受けぬことは出來ない。人の心靈に靈火を點ずる力に於て、彼よりも大なるものはない。イエスが至聖至美なる天の靈光であるならば、彼れパウロは正に地上最高の山巔に熖々天を焦して燃ゆる烈火である。イエスなくして吾人は遂に神を知ることは出來ぬ。同時にパウロなくして吾人は遂にイエスを知ることは出來ぬ。何となればイエスの精神を最も能く弱き人間――そして人は皆弱くある――の中に體現したものは、彼れパウロであつた。神らしきイエスの精神が、パウロの中に人らしく（最も完全に）現はれたのである。イエスより神性を除き去ればパウロとなる。此意味に於て彼は特別に我等に近い。イエスが我等に近いとは別の意味に於て我等に近い。

生時に於て多くの信者を獲たる彼は、その比類なく靈活熾烈なるペンを以て、死後に幾萬億の信者を產んだ。げに新約聖書が人を信仰に導く最强且究竟の力である以上は、その頁の半近くを占むる使徒パウロの位置はさぐらずして明かである。四福音書を以て足れりとする信者は、世に稀である。人を信仰に導き且その信仰を養ふに於て、パウロ文學の功績は絕大である。然り、パウロはその獨一無二の筆力を以て、既往將來に、數限りなく基督者を作り且養ふ。

これ果して何に基づくのであるか。彼の敎義の完備優秀を以てその原因とする人あらば、余は「否」と答へよう。何となれば彼の敎義をその儘受け納れぬ信者は、世に甚だ多いからである。パウロはイエスの單純なる福音を複雜にしたのであるとの批難は一理ある。またパウロを通してイエスに還れとの勸奬も無理ならぬ。彼の說く敎義はかなりに煩瑣である。野の鳥の如く自由にして奔流のごとく不羈なるイエスの福音が、パウロの筆に上つては、學究と論理の臭味を多分に荷つたものとなる。彼の贖罪論と、再臨說と、終末學と、豫定說と、基督論とを、其儘に受け納れ

ることは容易くはない。彼の敎理の結晶たる使徒信經は、固形して枯死せる敎會の武器としてはいざ知らず、靈的生命の源泉たる値に於ては絕無である（勿論彼の精をなめし後人の作ではあるが）。然り、彼の敎義はその外形に於ては、萬人の受納るゝ處とはなり得ない。

併しながら、眞生命は如何なる外形を纏ふとも、あくまで眞生命である。外形は時代の思潮と個人の敎養とに制限せられる。しかし眞生命は何處にありても、純の純たるものである。愚人は王者の衣につゝまるゝも、飽くまで愚人である。眞人は襤褸を纏ふも、眞人たるの實を輝き出ださずにはおかぬ。パウロの有せし眞生命は天來の至寶である。されば之を包みし敎理てふ衣が善きにもせよ、惡きにもせよ、至寶は至寶として輝くほかはない。實に彼はその抱きし眞生命を以て、無數の基督者を生み出だしたのである、生み出すのである。彼の敎義の優秀深遠なるは認めざるを得ざる處、さはれ是れ萬人に强ゆべきものではない。たゞその把持せし生命の雄偉豐贍は、彼のペンを通して我等が心に促々として迫る。かくて我等は彼の影響

のもとに立たざらんとするも能はない。彼を親しき人とせざらんとするも能はない。

傳道の精神と方法とを敎ふる人として、パウロはまたなき我師である。彼の全書翰の隨所に、此事が敎へられてゐる。彼は言の智慧を用ひず、人の智慧の婉言を用ひなかつた。これキリストの十字架の空しくならざらんため、又人の信仰をして神の力に由らしめん爲であつた（哥林多前書一章、二章）。彼は愼みて他人の置きし土臺に建てじと、イエスの名の未だ稱へられざる所に福音を宣傳した（羅馬書十五章）。死に定められし者の如く末の者として顯はされて、敢て愧ぢなかつた。飢ゑ、また渴き、また裸、また撻たれ、かくて定まれる住處なく、骨折りて手づから工をなし、詈らるゝ時は祝し、窘めらるゝ時は忍ひ、世の汚穢また萬の物の塵垢の如くして、しかも心にイエスキリストの無限の富を抱いてゐた（哥林多前書四章）。いかにもして彼等數人を救はんために、彼は凡ての犧牲と配慮と勞苦とを敢てした（同九章）。激しき迫害に逢ひて、生命を保たん望をも失ふに至りし時、彼は己を恃まずして死にし者を甦らする神を恃んだ（哥林多後書一章）。彼は彼の敎を聽いて信ぜざる者多きを見て、すこしも驚かなかつた。むし

ろ之れを當然のことゝした（同二章十五節、十六節、同四章三節、四節）。彼は自己の事を述べず、たゞイエスキリストの主たることを述べた。故に此寶を盛れる己の瓦器たるに敢て失望しなかつた（同四章）。彼は肉體に一の刺を與へられて、我肉の弱きを誇つた。これキリストの力彼れに宿らんためであつた（同十二章）。容は儒くその言は鄙しと、一部の人に批難せられし彼は、たしかに其風采と辯舌とに於て、優雅高尙ではなかつた。しかし奪ふべからざる靈力が彼の五體より發せしは慥である（同十章）。彼は人々に道を說いて其所有物を求めず、たゞ彼等自身を求めたのである。ゆゑに彼等の靈魂のために、欣びて財を費し、身を盡して厭はなかつた（同十二章）。彼は彼等の心にキリストのかたち成るまでは、欣んで產の劬勞をなした（加拉太書四章）。彼等を懷うて、啻に神の福音のみならず、己れの生命をも彼等に與へんことを喜んだ（帖撒羅尼迦前書二章）。同胞の救濟を熱望せる彼は、其のためにならんには、キリストより離れ沈淪に至らんも亦厭はじとまで切言した（羅馬書九章）。眞正の意味に於ける献身的傳道者とは彼であつた。主の福音を宣傳せんために、凡てを棄てゝ之を糞土の如く思ひし彼は、その生涯とその精神とに於て我無

二の師である。余の些かなる傳道も、彼に似たらんことを願ひつゝ營めるものである（能はずとは雖も）。指導者とし、激勵者として、彼はいと余に近くある。

併しながら、パウロが特別に余の心情に近いのは、その偉烈なる人格と雄渾なるペンの背景として、彼の多分に有する人間味のためである。神らしき人なるイエスと對比して、げに彼は人らしき人であつた。彼は天上の星ではない、あくまで黑き土の上に生ひ出でし美花である。燦として輝く彼の生涯と人格と文章が如何に雄勁であつても、その間に隱見する黑き土を全く蔽ふことは出來なかつた。人間らしき感情と、忿怒と、苦悶と、心勞と、そしてまた弱點とを彼は多分にもつてゐた。そして其眞情が有りのまゝに隨處隨時に露出した。彼は此世の修養家の如く、抑止するを要せぬ感情の迸出を抑止して、圓滿無謬を衒ふことを欲しなかつた。彼はたゞイエスを主と仰いで、自身はその僕（しもべ）であれば足りた。そして福音を辯明して、不信の此世より少數の友を選（え）り出すを以て、足れりとした。故にその他の事に於ては、全く無頓着であつた。人間味を豐かに把持して、その自然の流露を妨げなかつた彼

は、大なる小兒としてまことに我等の心情に近い。

彼の書翰を讀んで、彼の靈的生命のいみじき富贍を認むると共に、その人間味の力强く躍動せるを感知せぬ人はない。羅馬書のごとき組織立ちたる敎理論のなかにも、此要素はかなりに存する。哥羅西書の如き落着きたる文書の中にも、それが充分に認められる。まして加拉太書、哥林多後書の如き、濛々たる戰塵の中に血と涙とを以てしたる記錄には、彼の人間らしき感情が「山間の急流の如く」轟きわたつてゐる。彼の悲哀も、苦惱も、歡喜も、憤懣も、さながらに現はれてゐる。彼の弱點とも云ふべき敵に對する熾烈なる抗爭心と、味方に對する痛切なる愛情とは、何よりも瞭かに迸流してゐる。殊に哥林多後書第十章以下の如きは、彼がみづから「わが斯く云ふは愚なるが如し」、「わが斯く云ふは狂へる者の如し」と云ひて、我自らわが狂愚ならざるかを怪みしほどに、彼の人間味が旺盛に表はれてゐる。我等は彼の肩に手をかけて「親しき兄弟！」と叫ばんとするの情に堪へない。

彼の人格と生涯とは決して完璧を以て稱することは出來ない。改信以前に於て義

者の血を以てその手を汚せしことは暫く措くとして、基督信者となりて後も、彼は決して完全無疵の人ではなかつた。眞理の擁護のためなりとは云へ、彼は餘りに多く敵を有してゐた。味方の中にすら敵を有してゐた。彼の抗爭の癖が大に過ぎたのである。彼がバルナバと事を共にするを潔しとせずして怫然袂を拂つて去りしが如き、又ともかくも十二使徒の頭首たるペテロを衆人稠坐の公席に面責せしが如き、此行爲を是認すべきか如何は暫く措き、彼が激烈なる感情の發作を抑止せざりしは明瞭にして、玆に大なる小兒たる彼の面目が躍如として表れてゐる。また彼が初めユダヤの律法派と猛烈なる戰を開きながら、後これと融和もしくは妥協するが如き——少くとも然く思はる丶——態度を示し、遂にエルサレムにて殊更にユダヤの祭事に加はるに至りしが如き、又當時の基督敎の本山たるエルサレム敎會と離るべくして遂に離れ得ず、ために一種の妥協策に出でしが如き、たとへそれが愛心の發露なりとするも、我等はそこに彼の人間味の少からぬを觀取せずには居られない。余はこ丶にパウロを責めんと欲するものではない（彼に缺點はあつたが責むべき點は

なかつた）。たゞ我等に親しき兄弟パウロの面目を描かんと力めたに過ぎぬ。實に使徒パウロである。「人よりに非ず亦人に由らず、イエスキリストと彼を死より甦らし（よみがへ）し父なる神に由りて立てられたる」偉大なる使徒パウロである。同時にまた、兄弟パウロである、親しき友パウロである。

慕はしきパウロよ、愛すべきパウロよ。汝は余にイエスの精神を最も明かに告げてくれた。汝は余に傳道の精神と方法とを敎へてくれた。余の小なる傳道とそのための云ふに足らぬ犧牲の生涯は、大なる汝のそれに象（かたど）りてなさる丶ものである。此世に於ける余の事業は救主イエスを紹介するにあれども、イエスを紹介せんとして、余は常に汝のペンと汝の生涯とを借り來るものである。偉大なるパウロよ、そして兄弟パウロよ。願ふ、余が此世にある限り、我思想と勇氣の源泉として存せよ。

改革者ルーテル

改革者ルーテルに於て、凝滯せる歐洲に大復興を起して近世文明の端を拓きし大英雄を認めたるは、余が少年時代のことであつた。のち或ルーテル傳を讀みて、彼が甚だ弱き方面を有する人なるを知りて、意外の感にうたれると共に、幻滅の淋しさを味つた。然るにまた後、カアライルの英雄崇拜論中のルーテル論を讀みて、弱き彼の強くあり得し秘義を學びて大に得る所ありしと共に、彼が甚だ我等に近き人なるを感ぜざるを得なかつた。當時自己の怯懦と荏弱に苦しみゐたる余は、これによりて甚だ力强き感を抱くに至つた。頃者、博士リンゼーのルーテル傳を友人藤井氏の譯筆を通して讀みて、余のルーテルに對する敬慕と接近とは一入增してきた。カルヰンとか、ツキングリとか、ウェスレーとかなど云ふ宗教的偉人の名が、余より多くの感興を惹かざるに、ルーテルのみは我心に强き鼓動と應鳴とを促してやまぬ。信仰の偉人として、パウロに次いで我心情に近きは、實に彼れルーテルである。

彼は決して天性の英雄ではなかつた。また强剛不屈の偉男兒でもなかつた。彼はむしろ其天性に於ては、弱き人であつた、やさしき人であつた。柔和と愛憐と謙遜とは、彼の特色であつた。憂鬱の發作は時々彼れを襲つた。「思慮深き溫和と鋭敏纖細に過ぐる愛情」とが彼にあつた。

ルーテルは淺き觀察者には、臆病惰弱な男子と見えたであらう。謙卑と內氣らしき溫柔が、彼の主たる特色であつた。

とトマス・カアライルの云うたのに、虛構のあらう筈がない。故に法律を學びし彼は、鋭敏なる感受性の强ふるまゝに、この世の希望をすてゝ、修道院の隱棲を選ぶに至つた。父母の大失望も大反對も、彼を活動世界に引きもどす力はなかつた。彼は修道院の奉仕に於て、煩瑣と過勞とを厭はずして、小心翼々として努むる底の人であつた。彼はそのまゝ隱れたる生涯を營むを以て、何等憾む所なしとした。二十七歲にして羅馬の本山に使した時、法王とその周圍の腐敗は、敏感なる彼の眼を逃るゝことを得なかつたのは事實である。さりながら、彼れ一個微力の寒僧、いかで

威權並びなき法王朝に叛逆の弓をひき得ようや。夢にだに彼は斯かることを思ひ得なかつた。彼は默して自己の小なる仕事にいそしんだ。そして心靈的安心の域に達して、獨り惠深き法悅に住んで足れりとした。

法王廳の赦罪劵販賣に、敢然ひとり起つて抗せしは事實であつた。しかしそれすら、豫め計畫して本山改革の戰を開始したと云ふわけではない。もし販賣人テッツェルが彼の受持區へ入り込まなかつたならば、彼は反抗の矢を放つ要はなかつたのである。しかし乍ら彼はウィッテンブルヒの牧師として、或はその敎會員の中に赦罪劵を購ひて罪業の消滅に得々たる者あるを發見し、或は赦罪劵購買の可否如何を質問する者あるに會して、自己の職分に忠ならんとして、また天よりの聲を斥けざらんとして、遂におのれを僞ることは出來なかつた。牧師たる職分を遺憾なく行はんために、彼は遂に赦罪劵販賣に反對せざるを得ざるに至つた。宗敎改革者として彼は起つたのではなかつた。彼は己に託せられたる少數の靈魂を切愛したのであつた。彼は英雄ではなかつた。彼は基督者であつた。そして理想の牧者であつた。されば

偏に神に忠實ならんとして、彼は遂に此世の大勢力と戰ふ結果を惹き起したのである。此世の英雄豪傑てふ稱呼の外にある彼は、我等の近くに立つものである。

謙遜なる彼も、神の聲に促されて立つ時は、眞勇の人たらざるを得ない。彼の如き忠誠摯實なる心に靈火が燃え立つ時に於て、そは遂に天を焦さずしてはやまぬ。さりながら彼は英雄ではない、計畫者ではない。唯敎會の弊害驅除に努めたのみであつた。從つて法王の權威を否認せんとは、ゆめにも思はなかつた。ましてや羅馬本山の支配を脫して、新敎を創設せんとの野心をや。彼はたゞ敎會の弊害だに改まれば、滿足したのであつた。この意味に於て、彼は實に溫和なる改革者であつた。

ルーテルの切なる願は、弊害の改められんことであつた。敎會內に分爭を惹き起すことや、基督敎界の父たる法王に背くことなどは、彼の夢にも思はなかつた處である。

とカアライルの喝破せし通りであつた。

その法王を反基督と斷じて大反抗の旌旗を飜したのは、ライプチッヒに法王廳の大學者ヂョン・エックと論爭せし後のことであつた。此時彼は、博學精敏なる論敵の

追求する處となつて、遂に己が法王否認の大原理に立つものなることを自認せしめられたのである。法王に忠實なることの、彼の立場として到底不可能なることを、彼自ら知らずして、敵に之を指示されたのである。以後、温和にして不徹底なる改革者は、激烈にして根本的なる改革者となつた。是れ彼のみづからの求めし處にあらずして、彼を罠に陷いれんとせし敵のなせし處であつた。敵が遂に彼をこの最後の所まで逐ひ込んだのである。事の成行が遂に彼をして茲に出づる外なからしめたのである。神の聲と自己の職分に忠實ならんため、遂に起ちて小改革の旗を上げたる彼は、敵に強ひられて遂に大改革の戰士とならざるを得ないことゝなつた。彼はどこまでも英雄ではなかつた。たゞ神の聲に聽從する基督者であつた。

ウォルムスの議會に呼ばれて、著書の意見の改更如何を問はれし時、その第一日に於て彼は意氣甚だあがらなかつた。そして一日の猶豫を乞うた。人たる彼の面目が茲に躍如としてゐる。しかし祈禱の一夜は明けて、キリストが彼の全心を占領した。彼は二時間にわたりて、自己の立場を擁護した。彼は曰うた、彼の著書の文は半

ば自己のもの、半は聖書より出でしものである、自己の者には人間の弱點が伴つてゐる、思慮淺き怒や、人間の暗愚や、その他取消し得べき種々の弱點が交つてゐる、しかしながら健全なる眞理と聖書とに根據を置くものに至りては、彼は一毫も之を變改することは出來ぬと。「聖書の證言か、又は平明公正なる論議かによりて我を駁せよ、然らずば余は改言する能はず。良心に背ける事をなすは安全にあらず、且輕卒なり。茲に我れあり。我は此外に出づる能はず。神よ我を助け給へ！」と、これ彼の結尾の語であつた。實に靜肅と温雅と謙遜とを兼ね有する聖き勇氣よりの語であつた。げに奥ゆかしき態度であつた。生れながらの豪勇は、彼の持たぬ處であつた。彼は弱き人の子であつた。故に信仰に確く立つ時に於て、淸き勇氣が彼に加へられたのであつた。彼は天性の英雄として我等に遠く立つ人ではない。基督者として我等に近く立つ人である。我等の友である。兄弟である。同志である。

彼は完全なる人ではなかつた。彼の粗野なる言動は、時として人の感情を害した。彼はまた重大なる過誤をなした。農民が一揆を起せし時の如き、彼は些の同情を有

たざりしのみか、諸侯に向つて叛亂せる農民を速かに殺せと申し送つた。農民の頼むに足らざるを學びて、憤怒と失望とが彼を驅つて此殘酷なる言葉を發せしめたのである。また彼は、改革者を庇保する某貴族の不義の結婚を公認せしことさへあつた。のち彼は之を取消したりと雖も、不義の結婚そのものは既に行はれてしまつた。駟馬も及ばずとは此事である。彼が聖書を引き來つて此惡事を辯護したのは、如何に當時の事情を參酌しても、明々白々なる罪過であつた。頭髪を剃られしサムソンの甚だ弱かりしが如く、彼の心境にイエスの住まざる時に於て、彼は全く弱き普通人であつた。その憤怒と、その失望と、その過誤と、その煩悶とを以てして、彼は何處までも英雄兒ではなかつた。彼はどこまでも我等の仲間の一人であつた。しかし信仰に立ちては、彼は全世界を敵となし得る人であつた。そのウォルムスに行くに當つて、友人リンクに書き送りたる左の語は、這般の消息を洩らして餘りある。

余は知り且信ずる、イエスキリストは今生きて支配し給ふことを。此智慧と確信とに余は賴るのである。

故に一萬の法王と雖も恐れない、何となれば余と共に在る者は世に在る者より大であるからである。〔藤井氏の譯を借る〕

恰もこれイスラエル國の豫言者エリシヤを捕へんとして、スリヤの大兵が押しよせし時、エリシヤが怖るゝ僕に向つて「懼るゝ勿れ、我等と共にある者は彼等と共にある者よりも多し」と答へしと好一對である。「もし神われらを守らば誰か我等に敵せんや」とのパウロの實驗の聲が、また彼れルーテルにもあつた。故に弱き彼が强くなり得たのである。これ彼が單なる一基督者として、英雄以上の大事を成就し得し所以であつた。

故に余は又ルーテルに向つて「兄弟ルーテルよ」と呼びかけ度いのである。そして彼の肩に我手をかけ度いのである。我の手を以て彼の手を握り度いのである。畏敬する我ルーテルよ。されど又慕はしき兄弟ルーテルよ、愛すべき我友ルーテルよ。願くは來つて汝が信仰の祕密を我に語り、我小なる生涯をして汝の大生涯に倣ふものとならしめよ。

偉僧日蓮

日本國二千六百年の歴史――閲し來れば豪傑と呼び、英雄と稱し、傑士と名づけ、烈婦と云ふべき者は少なくない。眞の宗敎家も眞の學者も、亦必ずしも少なしとしない。しかしながら眞に「偉大（グレイトネス）」と歎稱すべき者を物色せんとして、我等は曉天に星を求むるの悲歎を味はざるを得ない。これ未だ曾て大原理(great principle)を抱きたることなき我日本國に於ては、已むを得ぬ事實である。さはれ我が僧日蓮に至つては、疑もなく此のいと稀なる星の一であらねばならぬ。偉大なる原理なくして、尙ほ且偉大彼の如きを產せし我日本民族の過去を思うて、余は驚歎と希望のこもゝ〳〵我心を壓し來るを感ずるものである。

人多く日蓮を以て英雄僧となし、その勇氣と剛膽を稱する。これ固より誤謬ではない。されどその因て來る源を忘れて枝葉に執し、いはゆる英雄豪傑てふ野心家の群に彼を伍するの風あるは、大なる過誤である。彼は決して世の所謂英雄豪傑では

なかつた。彼は眞の宗敎家であつたのである。それ故に不屈の意氣と不敵の勇膽とが、彼の人格を彩（いろど）つたのである。これ眞の宗敎家の附屬物にして、必ずしも然く異とすべきものではない。「我は法華經の行者なり、釋迦佛の御使なり」との彼の自信ありて、權勢威武を怖れず艱苦迫害に屈せざる鐵石心が生れたのである。「妙法を信せずんば此國亡びん」と確信したる彼は、その妙法を宣傳する自己を以て日本萬民の救者なりと確信したるが故に、「日蓮此國に生れて關東の御支配を蒙る、身は隨ひ奉つるべし、心は枉ぐべからず」との獨立を保ち得たのであつた。「人よりに非ず、亦人に由らず、イエスキリストと彼を死より甦（よみがへ）らしゝ父なる神に由りて立てられたる使徒パウロ」と自己に就ては信じ、「我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人すべて信ずる者を救はんとの神の大能たれば也」と我が敎說（おしへ）については信じゐたることが、使徒パウロの大生涯の源泉なりしは知る人ぞ知る。亞細亞の東端と西端に、時を異にして生れたる二大偉人の相似たる生涯を思ふ時、余はその因て來る心源のまた甚だしく相似たるを、認めずには居られない。

苦難と迫害とは心靈革命者の糧である。政權の斧を揮ふ政治家と、官權の城砦に隱るゝ宗教家と、附和雷同の外に生きざる俗衆と――此三者は個々に、或は共同して、彼を迫めなやます。果せるかな、僧日蓮が心靈革命の旗を三浦半島の海風にひるがへすや、官僚と官僧と俗衆とは、牙を振り爪を立てゝ孤獨無援の貧僧を襲ひ來つた。或は陽に威權を用ひ、或は陰に陷穽を設けて、偏に彼を亡ぼさんと力めた。路傍の呪咀、草庵の燒打は愚か、一度斬罪に處せんとし、二度遠島に流し、その徒を捕へて監禁し或は斬首し、以て喬木を其萌芽に於て屠らんとした。然るに迫害と患難と貧苦に責めたてられて、彼の志はます〳〵固くなつた。改宗せば赦さんと曰はれて、彼は笑つて之れを斥けた。他法誹謗をさへ罷めなば妙法の弘布を許さんと曰はれて、彼は頑として頭を振つた、一寸の讓歩も彼は敢てしなかつた。「日蓮、法華經の行者として流罪死罪に及ぶ、その難に逢ふ處毎に佛土なるべきか」とは彼の覺悟を語るものである。有司と宗教家と同胞とに迫害られて、異常の苦難に處しつつ、「われキリストのために懦弱と凌辱と空乏と迫害と患難に遭ふを樂みとせり」と

云ひたるパウロの心境は、亦實に我日蓮のそれであつた。勇剛なりしかな彼！　而して彼をして能く勇剛ならしめし其信仰の大なりしよ！

妙法を以て日本國を救はんとは、彼の志願であつた。それがために彼はあらゆる苦難に堪へた。然るに妙法の自由弘布は遂に允許せられたれども、他の教法を禁止するの令は遂に現はれなかつた。烱眼なる彼はこゝに奮鬪の生活を棄てゝ、身延山に隱棲した。蓋し日本民族全部の救濟の近く實現さるべからざるを觀取して、彼は專ら自宗の擁護と弟子の養成に沒頭し、以て百年の後を期したものであらう。然らずとするも、彼が晩年の隱遁は、彼が生涯の終を完了する最上の道であつた。そして又、彼の生涯と人格とに奥ゆかしさを漂はす一の芳香であつた。妙法の公許は所謂功成り名遂げしもの、以後の彼は尊崇と安樂とに圍まれんとするのであつた。此時彼は世を逃れ山に走りて、其處に彼の健康を損するほどの貧癖苦澁の生を營んだ。彼は當然受くべき甘き杯を我と自ら斥けて、受くるに及ばざる苦き杯を選んだ。暮ふべきは實に彼の大生涯であつた―その壯時に於て又その晩年に於て。

彼の教義は如何なるものであつたか余は知らぬ、また知らうとも思はぬ、法然親鸞の所信に多大の興趣を感ずる余は、それとは正反對なるべく想像せらるゝ日蓮の教説を窺はうとする意をもたぬ。彼に於て貴ぶべきは、其信仰の内容よりも寧ろ其信仰の態度であつたと余は信ずる。彼は眞宗教を有つて居なかつたかも知れぬ、しかし眞信仰に至りては之を完全に抱いてゐた。彼は眞に信じた。そして其所信に循つて眞に行動した。眞に生きた。眞の生涯を送つた。彼が釋迦の教説を法華經一卷に限つたのは、誤謬であつたかも解らぬ。併し原始佛教の如何なるものなるかは、容易に正確に判定せられ得ぬ性質のものであれば、要は各人獨自の判斷に任せるよりほかない。問題は其判斷を下す人の態度如何である。日蓮が多年の周密なる研究と、切實なる求道と、其結論に執する確信こそ、我等の學ぶべき處ではないか。而して一度釋尊の正法を得しと信じたる後の彼が、之を以て日本を救ひ得べしと信じ、自ら釋尊の御使と信じ、堅信不屈、克難奮鬪、勇剛鋭進、ために凡てを棄てゝ顧みざりし態度こそ、實に眞信仰者の儀表たるべきではないか。

偉大なる宗教家に共通の現象として、僧日蓮は著しく豫言者の風骨を具へてゐた。彼は『立正安國論』を草して、日本國民の墮落、柔弱、放漫、驕奢を叱し、正しき政治と正しき宗教の行はれざるを責め、かくの如くんば内憂外患交々起らんと警告した。爲政者に向つて直接の諫諍をなした。曰く「蒙古の來るもの、國家の法華經を信ぜざるに由る」と。又曰く「佛法の邪正を決し、其正なる者を取つて其邪なるものを斥け給へ、かくの如くにして國家始めて安泰にて候はん」と。正法を信受せずば國は亡びんと、彼は警めた。佛道を棄てゝ政道何とて擧らんと、彼は敎へた。正道地に絶えて國の衰亡來ると高唱したる彼は、古へイスラヘルの豫言者たるイザヤ、エレミヤ、アモス等の再來と稱ばるべき豫言者であつた。殊に外冦を以て天の懲罰となし、之を避くるの道は一に正法に歸するにありと叫びたるに於て、彼の彼等と全く一致せるは著しき點である。以賽亞書、耶利米亞記等の燃ゆる豫言に眼をさらしたる者は、日蓮が『立正安國論』の眞意とその數回の國諫の精神を、たやすく感受し得るであらう。我が日蓮はイザヤ、エレミヤ等と同一の意味に於ける

預言者であつた。故にまた彼等と同一の意味に於ける愛國者であつたのである。

今や彼を以て愛國者となし、軍國主義的愛國心の唱導に彼の名と其敎を應用するもの多きは、たとへそれが官僚宗敎家と官僚軍人と官僚學者の所爲とは云へ、痛歎すべき限りである。彼の愛國心とは、斯かる淺薄なるものではなかつた。もし彼にして今日に生れしめば、彼は必ずや民の獨立を奪ひて軍隊萬能を唱へ彼の名を利用して私を行ふ閥族に向つて、猛烈なる痛罵を浴びせることであらう。彼れいかで二十世紀の大惡魔たる軍國主義の使徒とならうや。軍隊萬能の主張を以て唯一の愛國となせる徒よ。退いて靜かに卿等が利用しつゝある日蓮の精神を味へ、而して眞正の愛國の何者なるかを學べ。然るのち我等は眞正の愛國について卿等と共に語らう。

イザヤに比すべく、パウロに比すべく、ルーテルに比すべき、日蓮の如き眞宗敎家を生みたるは、日本民族の大なる榮譽である。而して彼の如き偉人を其生時に於て了解し、其唱道する所を信奉したる數千の日本人ありし事は、吾人をして我同胞について失望するなからしむる一大事實である。我等の先祖の或者は、逐はれて住

むに處なく迫害(せめ)られて食するに糧なかりし一箇微賤なる沙門(しやもん)を、幕府の禁令を犯してまで、いみじくも信受し、いみじくも擁護したることよ。これ日蓮以上の聖者たる神の子キリストを與へられて、尙且つ之を拒斥して十字架上に釘(つ)けたるユダヤ民族に、勝ること數等である。然るに七百年後の今日は如何。徒らに偉人とその所說の糟粕枝葉に執して悉く根幹を忘れ、官人と僧侶とは此世の俗事に之を利用せんとし、善男善女と稱する平信徒に至りては唯唱名のほかに何物をも有たぬ狀態に在る。あゝ唾棄(だう)すべきかな彼等！　彼等は彼等の誠實眞摯なりし祖先に對して、果して耻づる所ないか。何が故に偉人の心胸に分け入りて眞信仰の態度を學ばざるぞ。何故に脚を捉へ尾を攫みて象を知り得たりとなせし盲人輩に傚ふぞ。

あゝ日本民族よ、汝は眞信仰の態度に於て決して歐米の民に劣る民族ではない。由來汝は宗敎に於て長けた(た)る民である。然るに現今の有樣は如何。早く醒めて汝が本來の面目を發揮せよ。（大正六年四月稿）

日本國の過去を顧て

○「われ律法と預言者を廢るために來れりと思ふ勿れ、われ來りて之れを廢るにあらず成就せんためなり」（馬太傳五章十七節）とは、イエスの發せし有名なる語である。偉大なる心靈的革命者イエスキリスト、革命的大思想の祭壇に犧牲としてその身を横へたる彼れ、彼は何がゆゑに敢て此の保守的思想を抱いて居たのであるか。彼の絶大を以て して、尙ほ且つ狹くして舊き猶太思想の羈絆を脱し得なかつたのであるか。

○そも〳〵「律法」とは何ぞ。これ所謂モーセ律である。モーセの五書に記された る拜神及び人倫の道の總稱である。そして其骨髓は十誡である。されば律法とは決 してたゞの法律ではない、神を敬ひ道を行ふことである。律法は多岐にわたると雖 も、要するに神と人とに對する人間の道を規定せしものたるに過ぎない。即ち律法

とは、イスラエル民族にありては、信仰と道德の總名であつたのである。

○「豫言者」とは神の言を人に傳へて、人を神に歸らしめんと努めし偉人である。人人が徒らなる形式の敬神に耽りて、靈に於て神を信ぜず、人と人との間に仁義の道すたれしを、批難叱責せしは彼等豫言者であつた。「神を畏れその誡命を守れ、これはすべての人の本分なり」（傳道之書十二章十三）と說きたる傳道之書作者、及び「來れ、我等ヱホバにかへるべし」（何西阿六章一）と叫びたるホゼアは、寔によく豫言者の精神をあらはした者である。サムエルよりバプテスマのヨハネに至るまで、豫言者の數は多かりしも、またその說く所は多岐にわたりしも、その精神に至りては全く單一である。

○されば「師よ律法の中いづれの誡か大なる」と問はれたるイエスは、「汝心をつくし精神をつくし意をつくし主なる汝の神を愛すべし、これ第一にして大なる誡なり」と先づ信仰の要を說き、次に「第二もまた之に同じ、己のごとく汝の隣を愛すべし」と道德の骨髓を示し、然るのち「凡ての律法と豫言者は此二つの誡に據れり」と言ひ給うた。神に對する關係と人に對する關係、即ち信仰と道德、これ律法の精

髓である、これ豫言の骨子である。

○かくのごとくに考察し來るとき、イエスが「われ律法と豫言者を廢るために來れりと思ふ勿れ、われ來りて之れを廢るにあらず成就せんためなり」と云ひたる精神を領解することは難くない。舊き宗教と道德とを成就せんためなりと云ふは、其未だ成就せられざりしを想定しての語である。まことにイスラエルの宗教と道德とは、未完成のものであつた、未だ不完全の狀態にあつた。もとより選民を以て誇れる彼等の、其宗教と道德とに於て、遙かに同時代の他國民にまさりしことは云ふまでもない。げに彼等は、心靈的に又精神的に、獨一無二の地歩を占めてゐた。さはれ彼等の宗教と道德の、たとへイザヤの偉大とエレミヤの切實とヨブの深奥とを以てするも、到底完全を以て稱すべからざるは、舊約聖書を讀む者のひとしく認むる處である。

○希伯來民族の宗教の缺陷は少くとも二つあつた。一は義の神を知つて愛の神を知ること不充分なりしことである。「神を畏れよ」と多く云ひて「神を愛せよ」と少く云ひしことである。怖るべき審判者としての神を見て、愛の父としての神を少し

しか見なかつたことである。二は神と民族との一般的關係を認むること多くして、神と個人との直接的關係を認むること少かりし點である。從つて豫言者、祭司等の特別階級のみ直接に神と交はりて、一般國民の個人的に神に接することが不充分であつた。一言にして云へば、彼等の信仰の團體的又は民族的にして、個人的ならざりしが、第二の缺陷であつた。

○この古き信仰の缺陷を補ひて、これを完成したるは主イエスキリストであつた。彼は口に天父の愛を高唱し、その人格と生涯とに於て天父の愛を事實的に證明し、その十字架より神の大愛を永遠に流れしめた。そして各個人の心鏡に天父の姿をやどらしめて、衷心より出づる信頼を可能ならしめ、無能なる團體的信仰を斥けて、各人をして「千歳の磐」に築きて永遠に生くるを得しめた。人が如實に神を知り、はたと之に接するを得るは、寔にイエスキリストに在りて賜はる恩惠である。——げに彼れは舊き宗教の完成者である。

○希伯來民族の道德の缺陷は、其條文的、命令的、外形的なる點にあつた。古代に於

て無比なりし聖き道德も、之等の缺點を如何ともするとは出來なかつた。條文的なるは煩雜をまぬかれぬ。命令的なるは束縛をまぬかれぬ。外形的なるは僞善と化しやすい。以て完全なる道德と稱するとは出來ぬ。イエスは愛を以て道德の骨子として之れを煩雜より救ひ、衷心よりの自發的德行を重んじて之れが束縛を取り去り、內心の清淨を主眼として僞善の餘地なからしめた。舊約の道德と四福音書のイエスの敎誡とを對比する時、たれか彼が舊道德の偉大なる完成者なるを思はぬものがあらう。

○げにイエスは新信仰を以て、律法と豫言を醇化完成した人であつた。「さらば我等信仰をもて律法を廢るや、然らず、却て律法を堅うする也」(羅馬書三章卅一)とパウロの云ひし通りである。固よりイエスは、舊思想の完成をその主なる目的としたのではない。彼の主眼とする所は福音の宣傳にあつた。福音そのものの立場より見て、彼は全然新たなる思想の宣傳者である。しかしながら、ユダヤの宗敎と道德の立場より見て、彼は明かにその完成者である。ユダヤ思想は深き意味に於て、悉く彼により て實現せられた。彼は新思想を唱道して而も自ら舊思想を醇化完成したのである。

○獨一の宗敎と無二の道德とを抱きしイスラエル民族は、果して貴重なる寶の所有者として恥ぢなかつたであらうか。否々、彼等は屢々偶像崇拜と道德的敗頽とに陷り、屢々豫言者の叱責と警告とを煩はした。そして斯くの如き事を繰返しつゝ、遂にイエス出現の時に至つた。當時の彼等の實狀如何。一般民衆については暫く問はず、信仰と道德の敎導者たる「學者と宗敎家」の有樣については、之をイエスの語に知ることができる。

○イエスの弟子が食する時手を洗はぬは、古への人の「遺傳」を犯すものと、エルサレムの學者とパリサイの人がイエスを責めた(馬太傳十五章)。イエスは却て彼等を責めた。

汝等は亦汝等の遺傳によりて(のために)神の誡を犯すは何故ぞ

と。「神の誡」とはモーセの民に與へし律法のことである。「遺傳」とは後世の宗敎家が律法に附加したる煩瑣なる形式である、無意味なる儀式である。食前には手を洗ふべしといふが如きものである。「遺傳」(tradition)である、ゆゑにたゞ古人より代々傳はり來りしものである。古人よりの相傳なるが故に之れを守るべしと云ふ以外、

何等それを守るべき根據なきものである。當時の宗教家はかくの如き多くの「遺傳」を民に課した。そして「遺傳」を重んずるのあまり、「神の誡」を棄てゝ怪しまなかつた。イエスはこれを責めたのである。

○イエスは進んで彼等が「遺傳」に執して律法（神の誡）を棄つる實例を擧げし（四節—六節）後、イザヤの語を引用して現代を責め給うた。

此民は口にて我れ（ヱホバ）に近づき唇にて我れを敬へども、其心は我に遠ざかり、人の誡を敬として徒らに我を拜す

と。「人の誡」は「遺傳」である。そして遺傳をのみ貴ぶゆゑ、おのづから律法（信仰と道德）を破り、口先のみにて神を敬ひ、無意味にのみ神を拜するに至る。凡そ「遺傳」の盛なるは、信仰と道德の棄てられし證左である。盲者の案内をするものは盲者である。民を導く學者と宗教家の暗黑を知る時、われ等は民の暗黑層一層甚しかりしを想はざるを得ない。

○彼等宗教家の手にありて律法は輕んぜられ、預言者の精神は棄てられて、たゞ遺

傳のみ勢威を揮つた。かくて暗黑は全ユダヤ國に臨んだ。實に民族のこの危機を救ふものは、律法と預言の完成者イエスキリストの外にはない。もし彼等にして彼を承け入れしならば、モーセと豫言者の精神は最も高き意味に於て實現せられて、舊きイスラエルは茲に新生命の榮光に入つたことであらう。かくて瀕死の彼等は、少年の元氣と希望を回復したことであらう。不幸にして彼等は之れを覺らずして、我を救ふ者を我とみづから斥けて、遂に破滅を招いてしまつた。そして彼れの豫言は不幸にも適中して、遂に彼等は地上に其國を失つてしまつた。ユダヤ亡國史を閲するもの、誰か限りなき遺憾なきを得よう。

○飜て思ふ、我愛する日本國の過去と現在は如何。そこに道德はなかつたか。否、大いにあつた。固有の神道に加ふるに外來の儒教と佛教とを以てして、我民族既往の精神界は、必ずしも貧弱を以て稱することは出來ぬ。凡そインダス河以東に發生せし人類の最美なる思想は、我國に於て相會し、相補ひ相磨きつゝ、過去十數世紀間の我文明史を彩つた。多くの傑士は心靈界に起つて、永久の生命を奏でつゝ民衆

を導いた。赫耀たる炬火は、民族の前路に不斷の輝光をゆらめかした。凡そイエスの福音と其副產物とを外にして受け得べき最大の精神的恩惠が、我日本民族にのぞんだのであつた。

○我等の祖先の宗敎は如何。彼等は立國のときに於て、すでに天神を祭つたのである。その多神的傾向は、希伯來民族ならぬ彼等にまぬかれぬ處であつたが、多神の中に主神を立てゝ一神敎に近よらんとせし傾向に於て、彼等は古への埃及民族又は希臘民族と一致してゐた。儒敎の入るや「天」の觀念を彼等に傳へ、佛敎の來るや「佛」に賴るの信仰は起つた。神社を建てゝ神を祭り、寺院を建立して佛を拜した。我等の祖先が佛敎を信受せしことの甚だしく盛なりしは、その形骸の今いたる處に見らるゝに由て知られる。而して神道も亦それ相應に盛であつた。今靜かに法然、親鸞等の信佛のあとを其遺文に探り、日蓮上人の偉烈なる精神をその生涯に於て知り、黑住宗忠等の信神の心理をその傳記に學ぶ時、われ等は我等の祖先の間に偉大にして深奥なる信仰の存せしてふ一事實に到達せざるを得ない。

○我等の祖先の道德は如何。儒敎の仁義禮智信は、實に彼等の道德であつた。天道として道德を守ることは、實に彼等の人生觀であつた。個人道義の根柢を天に置きし點に於て、彼等は多くの泰西の道德學者（基督敎以外の）にまさつてゐた。

天子より庶人に至るまで一に是れ身を修むるを以て本と爲す（大學）

とは彼等の信條であつた。家の齊ふも國の治まるも、凡そ此世の善といふ善の凡ての根源は個人の修德にありとは、彼等の堅き信念であつた。彼等の一人は實に左のごとき語を以て、其道德的信念を發表した。

人は幼きより古の聖の道を學び、我心に天地より生れ得たる仁を行ひて自ら樂しみ、人に仁を施して樂しましむべし。仁とは何ぞや、憐みの心を本として行ひ出せる諸々の善を凡て仁といふ。仁とは善の總名なり。仁を行ふは是れ天地の御心に順へるなり（貝原益軒）。

○我等の祖先はその信仰と道德とに於て、頗る希伯來民族に似てゐた。その優秀なる人々の間には、深き宗敎的信念と强き道德的確信があつた。その俗衆の間にすらそれ相當に其餘影が在つた。さりながら、其のいづれも完全ならざりしは言ふまで

もない。而してユダヤの舊き信仰と道德を成就完成せし基督敎は、亦實に我日本の舊き信仰と道德の完成者である。完成は完全化である。故に舊思想の精神と目的を成就するのであつて、その細目に拘はるのではない。長きに失するを伐り、曲れるを撓め、短かきを伸ばし、修正し、醇化し、以て舊思想を完成してこれを新たにするのである。基督敎を以て一國の舊思想を悉く破りて之に代るものとなすは、一面のみの觀察である。これを他面より見る時は、イエスの福音は舊思想の精髓と精神と目的とを、その最高の意味に於て成就するものである。舊きを完成して、これを今日に甦へらすものである。この意味に於て世界人類の救主なるイエスは、亦日本民族の救主である。我等は人類の一員として—宇宙に生を享けし一人として—彼の救濟に生くると共に、また日本民族の一人として彼の救ひに甦へるのである。

○優秀なる宗敎と道德とを抱き來りし日本民族の現狀は如何。かれ等は今彼等の舊思想の精髓を棄てゝ顧みず、徒らにその形式を守つてゐる。まことに「遺傳のために神の誡を犯」してゐる。神の誡としての信仰と道德を棄てゝ、たゞ遺傳をのみ貴

んでゐる。彼等のいま行ふ宗敎の儀式も道德の形式も、皆これ父祖よりの遺傳をその儘に無意味に受けしものである。彼等は「人の誡を敎として徒らに我れ（神）を拜」してゐる。人の誡なる遺傳を我生の指針となし、そして神佛を拜するはたゞ無意味なる形式としてゞある。かくて國に理想は絶え、歌はたゞ絶望の餘沫として存し、暗黑と敗頽と悲愁とは全國土を蔽ふに至つた。靈に於て亂れて、肉も亦遂に敗れた。全土に漲る狂亂と絶望、たれか心を痛めぬものがあらう。あゝ我愛する日本民族よ、汝は徒らに悲曲の好題目を後世の史家に供せんとするか。あゝ危きかな此の民！

○かくの如きに至りしは半は彼等の罪であり、半はその抱きし靈的光明の完璧ならざりし罪である。されば我民の舊き靈的光明を完成して、國人各々に永遠に築くの確信と希望を與ふる一大救濟者を、我民族は要する。而して此要求に應ずるものは、實に律法と預言の完成者イエスキリストの外にはない。しかも彼等の大多數は、我を救ふものを我と自ら斥けつゝある。いたましきは恩人に鋒を向くる民である。後

に至つて悔ゆるも時すでに晩いであらう。あゝ早く汝等の救主を受けよ、我愛する國人よ。

＊　＊　＊　＊　＊

上掲の文は大正五年三月草したるものである。これより曩、余は某所に於て『山上の垂訓』の講義を開始した。人を敎ふるは自己を敎ふることである。余は馬太傳第五章を開いて、正座して之に對した。そして考察し、默想した。我心靈の小なる鏡に映じたる眞理の姿を、其儘に傳へんことを欲したのである。美訓（十二節まで）を紹介するに、三回の講義を要した。次に基督者が此世の鹽たり光たることを說明した。第五回の夜は近づいた。余は十七節—二十節の聖句を前にして思うた、これ熱心且周到なる考究を要する箇處であると。律法の束縛より我等を救ひて心靈自由の鄕に導きたるイエスが、玆に律法を成就せんために我れ來れりと宣し、「天地の盡きざる中に律法の一點一畫も遂げ盡さずして廢ることなし」と斷じ、「人もし誡のいと小さき一を破り又その如く人に敎へなば、天國に於ていと小さき者と云はれん」と

敎へしは何故であるか。或はこれ猶太人たる馬太傳著者が、安なる着色のインクを用ひたのではあるまいか。——これ余の第一に起した疑問であつた。

余は聖書を前にして長き默想をつゞけた。余の座右に馬太傳の註解書は一冊もない。嘗てゴアーの山上の垂訓解說を讀んだことがあつたが、此評判よき書物は余に何等の新光明をも與へなかつた。余は三種の英譯聖書と二種の邦譯聖書と、獨譯聖書、希臘聖書各一種とを參照して、辭句の意味を探るほかはない。しかし辭義は明瞭にして疑ふことは出來ぬ。かくて余は默想を續けた。その結果は上記の文となつて現はれたのである。

讀者は余に、少しく我思想の絲を手繰るの自由を與へねばならぬ。余は少年時代より、何とはなしに泰西の思想に憧がれる癖があつた。中學時代に於て學びし和漢の敎科書——その中には大鏡や增鏡もあり史記も文章軌範も左傳もあつた——も余の眼には愚劣なものとほか映らなかつた。W大學に學びても、支那哲學史や日本儒敎史の講義を休んで、カアライルやエマスンに親んだことは度々あつた。日本文學

の最隆盛期たる德川時代の文學史を精細に講せられても、余は其中に生命の一片をも感知し得なかつた。巣林子の『關八州繫馬』の講義を聽いて、さすがに力ある作とは肯かれたが、シェークスピヤの『ハムレット』や『キング・レア』より受けたる深刻なる感動と比して、二人者を並び稱する人々の淺はかさを笑つた。或夏のことであつた、余はユウゴーの『哀史』の邦譯に滿足せずして、五十錢を投じて中西屋に購ひたるその英譯の安本を携へて、鄕里なる我家の蒸暑き二階に之を讀んだ。英語の力に乏しかつた當時の余が、一冊細字千頁餘を讀了するに費せし努力は、尠少ではなかつた。しかし余の受けたる底知れぬ靈感は、之を償うてあまりあつた。——余の心はます〳〵故國の思想と文學とに背いて、只管泰西思潮のあとを逐うた。余の基督敎信仰が、これを促す重なる原因であつたことは、云ふまでもない。余は基督敎とそれより發せし思想の外に、世に眞正なる文學の題目あることを想ひ得なかつた。

熱心は往々にして物の一面のみを見せしむる。熱心の去つた時、他の一面の回轉

し來るは避けがたい事實である。戀は盲目なりと、昔或る賢い男が云うたとか。余の歐洲思想に對して抱きたる戀は、余より東洋思想を見るの眼を奪つたのである。中等敎員たりし四年間は、自分の信仰の沈衰時代であつた。西洋思想の心醉より半ば醒めたる我眼に、うつりたるは東洋の美點であつた。その時我友にOなるものがあつた。彼は基督敎思想を除いた外の西洋思想に通じて得た。英文學に於ける彼の造詣は同僚の驚歎する處であつた。彼はまた東洋思想に於ても、思ひの外の知識を有つてゐた。そしてラフカデオ・ヘルン氏に私淑してゐた彼の心は、西洋思想よりも多く東洋思想に傾いてゐた。基督敎と其敎會との間に區別を立てなかつた彼は、日本敎會の現狀と歐洲敎會の歷史とよりする歸納法を以て、基督敎そのものに對してゐた。そは彼の大なる誤謬であつた。しかし已むを得ざる誤謬であつた。從つて彼は佛敎思想に對して少からぬ興味をもつてゐた。彼の机上にはエマスン全集と相並んで夜船閑話があつた。メレヂスの小說と相對して翁問答があつた。ブラウニング詩集と相隣つて菜根譚があつた。彼は時々和漢の書物中の深思妙想を余に紹介し

た。和漢學復興の聲は當時甚だ盛であつた。幾多の飜刻書は現はれた。けれども余は之に對するに、極度の冷眼を以てした——恰も元素を集めて生物を造らんとする化學者の努力に對するが如くに。時代の大勢も時としては一人の力に劣る。かの復興の大勢は余より憫笑の外何物をも引き出し得なかつたが、この一友の影響は余の思想界に一種の改革を惹起した。他家の庭園の美にのみ醉ひし余に、我家の庭園の亦棄てがたきを敎へたのは、我友Oであつた。爾來自分は少しづゝ和漢の書籍に親しみ、少しづゝ和漢の思想に觸れた。

四年は夢と過ぎた。獨立傳道者となりし余は、生れて初めての農村生活をなして、農村の實狀について學びし處少なくなかつた。その中の一は、農村に於て漢學の尙ほ甚だ盛なることである。漢學塾はなほ相當に榮えてゐる。冬期の夜學の敎科書は多く漢籍である。余は小學時代を地方の小都會に送つたものであるが、當時は漢學の勢力尙ほ衰へずして、小學生は概ね朝學と稱して、每朝登校前、附近の敎師の宅に通つて四書の素讀或は意味を學んだものである。しかしこは既に二十年の昔

に屬してゐる。二十年の歲月を超えて向ふに遺したる過去が、二十年後の今日、眼の前に回轉し來つたのである。余は意外の感にうたれた。保守的思想の甲殼いと堅き我農村の精神界を示されて、余は長太息を催した。しかし飜つて思ふに、農村と云へば我國の大部である。ゆゑに國民の大部分は尙ほ儒敎のうちに生きて（或は死して）ゐるのである。善きにもせよ惡しきにもせよ、わが同胞の大部の心に、微弱ながらも呼吸をつゞけつゝある思想を、閑却することは賢き行爲ではない。——余の和漢の舊き思想に對する興味は、かくて倍加した。

余は新たに和漢の思想に親んだ。しかし時の缺乏は、此仕事の速度を極て遲々たらしめてゐる。さはれ、海に絲を垂るゝ者が容器に收めたる數尾の魚を以て、一灣の魚族を髣髴せしむるが如く、余の知りし僅少の和漢思想も、和漢思想そのものゝ値を知る材料としては、必ずしも不足ではなかつた。余はまことに東洋人の遺したる精神的財產の寶庫に、すくなからず驚異の眼を見ひらいたのである。孔子の聖、孟子の賢は今更の如く自分を驚かした。熊澤蕃山と中江藤樹とには、宇宙を包む或

偉大なる思想があつた。貝原益軒は天地に充つる光輝を直視した。伊藤仁齋は眞正の德を體得した。西行法師は詩人としての天分に於て、歐洲の大詩人等に劣らない。日蓮と法然と親鸞とは、その信仰とその思想とその生涯とに於て、明かに宗教的偉大である。

うらやまし如何なる空の月なれば
こゝろのまゝに西に行くらむ

と歌ひし源信僧都の如き、純粹なる來世信仰の把持者を佛教界に見出し、

天地とともにめぐりし心こそ
かぎり知られぬ命なるらめ

と詠せし黑住宗忠の博大なる思想と高貴なる信念とを、神道界に於て見出す我等は、我等の祖先が心靈の指導者に於て少からず惠まれしを想はざるを得ない。されば こそ君侯の仇を報せんがために、殉教者の如く身を棄てし四十七士のうちに、

草枕むすぶ假寢のゆめさめて
常世にかへる春のあけぼの

と詠じて陽々たる希望のなかに瞑目したる間喜兵衛の如きもあれば、また

梅で呑む茶屋もあるべし死出の山

と悠々たる微笑を以て死を迎へたる大高源吾の如きも出でたのである。

さり乍ら何よりも明瞭なることは、東洋三千年の思想の寶庫も、其中に一の完璧なるものを有せぬてふ一事である。優秀なるものと、高貴なるものと、純良なるものと、靈偉なるものとは無きに非ずと雖も、遂に以て世と人とを完全に救ひ得べき完全なる思想は生れなかつたのである。眞理と光明と生命とのかなりに著しき斷片は數多ありしと雖も、その本體は遂に中亞以東に生れなかつたのである。之を探らんがためには、我等は是非とも千九百年前の西亞の一端に至らねばならぬ。そこに太古のまゝなる湖水の傍に擧りたる眞生命の聲に、耳を澄まさねばならぬ。イエスキリスト、彼はあらゆる律法と預言者の完成者である。あらゆる善思想とあらゆる達人との足らざるを補ひて、之を成就完整する「神の子」である。日本國の過去を顧て、われらはキリストてふ一點に歸り來るほかはない。（大正五年十二月稿）

傳道一日の記

上

五月廿日、正午頃家を出でた。廿日は丁度この月の第三日曜である。冬は午後一時開會のH村の集會が、日の長い此頃は午後三時開會と云ふことになつたので、朝早く家を出るのを罷めて、午前を家に費した。そして一日半の努力を要した準備の訂正や補修に此時を用ひた。

H村までは四里に近き道、全部徒歩いても途中を少し汽車に乘つても約三時間はかゝる。汽車に乘つても時間に於て利益のないのは、それが少し廻り道になるからである。今日は腫物のために二三日不快であつた後のことゝて、汽車を用ひた。それは、時に於て利するなくも、脚の勞力に於て少しく利する所あるからである。

下車してから、眞直に二里も伸びてゐる縣道に歩を運ぶのは、なか〳〵に倦怠を

促すわざである。しかし羽織は風呂敷の中に收め、身には單衣一枚の尻を端折た自分は、下駄の音も輕ろげに脚を動かし得るのである。まして今は一年中の絶好期である。さすがに日の光は弱からねど、海をわたつて來る風には云ひ難き凉味がある。眼を放つて眺むれば、萠えたつ新綠の美はしさ！ 潑溂たる生命の香は來つて我心胸に入らんとし、彼を抱く我心にも亦彼に似たる生命の本具せるを思はせる。うち仰ぐ蒼穹は神の愛の浩大無涯なるを暗示し、我をめぐる生命の豐溢は到らぬ隈なき彼の恩惠を偲ばせる。泥田に鍬を揮ふ農夫の心は知る由もないが、少くとも彼等の五體は輝々たる日光に浴して歡喜に躍るのである。

How curious! How real!

Underfoot the divine soil—Overhead the sun.

如何に靈妙なるぞ！ いかに眞實なるぞ！

脚下には神聖なる地——頭上には日輪。

と詩人ホイットマンが勁拔なる詩句に、多量の哲理を含ませたのは、恐らくは斯かる時に斯かる天然の中に立ちてのことであらう。思へば月に幾回となく、我職務に强

ひられて、書齋の捕囚より天然の解放に導かるゝ我は幸なるものである。

坦々たる大道を歩むの單調は、われに種々の回想を起させる。思へば此道を歩み始めてから、春風秋雨四年半の歳月は早くも我を棄て去つた。初は毎月一回、中頃は毎月二回、そして此頃は、第一日曜を縣外出張に用ふるため舊に歸つて毎月一回、自分は必ず此道に歩を運んだ。種々の日があつた。今日のやうに快爽な日のみではなかつた。或時は身を切るやうな烈しい北風に、三時間を惱みつゞけた。或時は篠つく豪雨を犯して行つた。或時は微風の一そよぎもなき夏の炎天に、流汗の淋漓たるを味つた。日村に行く日曜日に限つて雨ばかり降るやうな秋もあつた。しかし身體の壯健な自分は、一回も缺席したことはなかつた。そして汽車以外の乘物——馬車、人力車、自轉車——の力を借りたことは一度もなかつた。足袋裸足になつて雨の路をたどる日は、云ふまでもなく快晴の美日ほど快くはない。しかし幸に呟きが我口より出たことはなかつた。長き道に退屈して倦怠の欠伸をしたことは多い。しかし幸に不平の我心を汚したことはなかつた。或時は甚だ樂しくあつた。或時は

樂しくはなくも、少くとも不快ではなかつた。余は斯く云うて敢て誇るのではない。たゞ我なすべきことを爲したに過ぎぬ。まして余の聽者が皆忠實なる勞働の子である——其或者は些細の報酬に甘んじて多大の勤勞を敢てする村落教師であり、又或者は弛みなき勞働の生を營む農夫である——を思うては、一週の中、六日の多分を家に樂居する余が、僅かに殘りの一日だけ心身に過重の勞役を課したとて、そこに何等誇るべき理由が含まれて居ないのである。

右の如くにして四年半の今日となつた。聽者は幾度か變遷し又變遷した。そして二三の信者が現はれたのが其結果である。さはれ余の回想を最も樂ましむるものは、過去四年半の我が此勤勞が神の恩惠に由て、滯りなく行はれ來つたことである。

And for the man who strives for a noble end, there is no failure. The very effort is fulfilled, is triumph.

高貴なる目的のために努むる者には失敗と云ふことはない。爲さるゝ努力そのものが勝利である。

とは近者エイ・アー・スケムプ博士が、詩人ブラウニングの精神を紹介して述べた名言である。高秀なる詩人の作品に含まるゝ此の高秀なる一原理は、凡そ此世に於て

精神的事業に從ふ者の座右の銘であらねばならぬ。何となれば、由來凡ての精神的事業は「高貴なる目的のために努むる」ことであるからである。されば若し余に結果に執する此世の事業家の心の片影だにあらば、神よ願くはそれを我より取り去り給へ！　もし余に勤勞の徒らなるを慨かんとする淺墓なる涙の一滴だにあらば、神よ願くはそれを我より取り除き給へ！

様々の回想と感慨に耽りつゝ、目的地に着きしは午後三時であつた。すでに主人Bを始め、八九人の人々が集まつてゐた。H村の會合はH村だけの部會であつて、來會者は五六人に過ぎぬのが常である。或時は炎天に汗みどろになつて到り着いて、僅かに二つの人影をしか見ないこともあつた。また或時は僅かに二人の人を前にして、强雨の囂々たる音と競つて敎を說いたこともあつた。殊に昨年の春Lが北海道に去り、間もなく主人の老父が此世を辭した後は、何となく淋しき會合を保つことが度々あつた。然るに昨冬またMが病のため鄕里に歸つたので、ひとしは我等の會合は淋しくなつた。しかし「そは我名のために二三人の集まれる處には我も亦その

中にあればなり」との主の御約束は、我等の强き支柱であつた。そして此頃は人數に於て舊に復することが出來たのである。余はまたＡＢＣの敎授に歸らねばならぬ。しかし凡てが感謝である。

休憩十分、まづ哥林多前書の輪講より始めた。五章、六章を數回に分つて、出席者が輪講するを、後から余が補正するのである。聖書の輪講は聖書研究の最上法である。そして信仰の發達は、聖書知識の進歩を以てその必須豫件とする。聖書を精讀する者が悉く良き信者ではない。と同時に良き信者にして聖書を精讀せぬ者は一人もない。されば余は各所の會合に於て、說敎をするのみにては滿足できぬ。已むを得ざるを除いては、必ず說敎の前または後に、一時間乃至二時間の聖書輪講を課する。のみならず、余の出席する場合の外にも時々會員だけの研究會を開催することを注文する。既に昨秋より、N村に於ては毎日曜日夜、茨城縣T村に於ては毎日曜日午前、いづれも會員だけの聖書研究會を續けてゐる。そしてY村も三ヶ月ほど前より之を眞似、H村も亦今月の第一日曜にその第一回の會合を催したとのことで

ある。聖書の自發的研究と生活の生きたる實驗と相伴ふ時、信仰は進まざらんとするも能はないのである。

主人B氏の祈禱を以て始めし一時間半の輪講會は終つて、十數分の休憩をなした。しかる後余は起つて、彼得前書二章十一節—十七節を朗讀し、祈禱の後、大略左の如き說敎をなした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此箇處の主眼は「肉の慾を去るべし」、「善き行をなすべし」、「上にある王或は……方伯に服ふべし」、「凡ての人を敬ひ、兄弟を愛し、神を畏れ、王を尊ぶべし」等の道德的勸誡にあることは、一見して直ちに分ります。その中「神を畏れ」を除いてしまふと、他は悉く此世の普通の道德であります。神を畏れよと云ふ一句さへ、世に所謂敬神思想だの敬虔の觀念だの云ふ文字と同型のものとも見られ得るので、此箇處の主眼點は此世の道德にして何等珍らしきものでないとの批評が出來ます。そこで聖書の道德も亦これ普通道德の一種であるならば、基督敎なるものは全く贅物であるとの論斷が、不信者側から出るかも知れません。また信者側には、聖書に於て普通道德の說かるゝのを見て、何となく「調子の低い」と云ふ感を起す人、「王を尊ぶべし」「方伯に服ふべし」など云ふ語に、四恩を說いて國家道德の奴隸たるに忙しき佛敎家の態度を見るやうな氣がして、妥協迎合の臭味を厭ふ人たちがありませう。

しかし私共は、まづ精密に聖書の本文を調べて見ねばなりません。そして第一に見るべきは十一節であります。「愛する者よ、我れ汝等にすゝむ、汝等は旅人また寄寓者なれば靈魂に逆ひて戰ふ肉の慾を去るべし」とあります。勿論絕對の禁慾を勸めた語ではありません。凡ての肉慾を去るべしではありません。「靈魂に逆ひて戰ふ肉慾」を去るべしと云ふのであります。そして此種の肉慾の存在すること、及びそれに囚へらるゝことの惡しきは、我等の能く知つて居る所であります。肉慾に陷りて靈魂の衰滅を來せし者は、我等の周圍に大群をなしてゐます。そして此肉慾を除くべき理由は「汝等は旅人また寄寓者なれば」であります。

我等はまことに、此世にありて旅人また寄寓者たるを感ずるものであります。旅

人には本國がなくてはなりません。さらば我等の本國は何處にありませうか。「我等の郷國は天にあり」と聖書にあるのが夫れであります。人は之を空想として嘲りませう。しかし、神が我等の目の涙を悉く拭ひとり復死あらず悲み哭き痛み有ることなき所の「新しき天と新しき地」が、我等の待望の目的物であることは事實であります。勿論信仰なき者に此の希望のありやう筈がありません。しかし信仰は愛の生母であると共に、亦希望の生母であります。信仰の進むと共に、此世の眞相は益々我等に明かになります。世の壞亂敗頽の恐しさは、いやが上にも著しくなつて來ます。そして「我等こゝに在りて恒に存つべき城邑なし」との感が日增に強くなります。此時誰か「唯來らんとする城邑を求む」るの心的狀態に入らぬものがありませうか（希伯來書第十三章）。信仰の進歩は、一方に此世の眞相を示すと相對して、他方に靈魂の本性を我等に敎へます。我等の心靈は、眠つてゐる時は己れについて何事をも知りませんが、一度目を醒ますと、其の本具せる永遠性を肯定せずには居りません。その衷心に湧きたつ永生の思慕と希望と信念とは、拂ひ去らんとするも能はざる一の

心的事實となります。これ我等自身に永遠に生くる力があるからではありません。我等に與へられたる心靈が、其本來の要求を以て我等に迫るのであります。其時私共は「凡ての恩惠を與ふる神」が「キリストイエスにある限りなき榮えに入らしめんとて」我等を招き給ふたのであることを悟ります（彼得前書五章）。かくて此世にては旅人なるを知りて、此世に關する我等の不平は消失します。此世は惡しき世であつても靈魂の鍛錬場としては絶好であると思へば、我等は此世の不義や自己の逆境に就て不平を起さずにすみます。

以上の說明に依て「汝等は旅人また寄寓者なれば靈魂に逆ひて戰ふ肉の慾を去るべし」と云ふ語を「汝等の本國は天にあれば靈魂に逆ひて戰ふ肉の慾を去るべし」と言ひ換へることが出來ます。しかし本國の天に在る者は何故肉の慾を去るべきでありませうか。これが說明を要する點であります。そして之は靈魂に逆ふ肉慾は、靈魂の墮敗を惹き起すものである故、靈魂の本國歸還を妨ぐるからのことであると思ひます。げに吾人は唯肉慾を去るのではありません。靈魂に逆ひて戰ふ肉慾を去

るのであります。そしてそれは我等の本國歸還に妨げなからんためであります。たゞ肉慾に耽る勿れでは、普通道德であります。それに信仰的根據を供して、初めて宗敎的道德となります。普通道德の缺陷は、その根據の曖昧なるとその實行力の稀薄なるとにあります。此缺陷を補うて、道義に明白なる根據を與へ、人にそれの實行力を與へるのが、宗敎的道德の長所であります。聖書に記されある道德的敎訓は、凡て此種のものであります。

次に見るべきは十二節であります。「又汝等異邦人の中にありて善行をなすべし、これ汝等を謗りて惡を行ふ者と云へる異邦人をして、汝等の善行を見て、神が眷顧み給ふ日に神を崇めしめんためなり」とであります。異邦人とは、此場合は不信者のことであります。即ち不信者の中より尙ほ信者の出でんために、信者は行に由りて福音の價値を證明すべしとの意味であります。行に依りて傳道せよとの勸めであります。傳道の大部分は善行によりて行はれます。筆舌に依る傳道は一部分の働きしか致しません。故に善行は大なる傳道であります。頑昏なるアウガスチンも、母モニ

カの品性と熱愛と永き祈禱の忍耐とを見、又アンブロースの信仰的勇行に接しては、遂に福音に歸向せざるを得ざるに至りました。又米の有名なる雄辯家ダニエル・ウェブスターは云ひました「最も力ある宗敎の證明はニュウ・ハムプシヤに住む我老叔母である」と。もとより善行は人に見せるためのものではない故、傳道を目的として爲すべきものではありません。此不信社會に處して不信者の間にありての、即ち異邦人の中にありての善行は、それがおのづから不信者に對する福音の證明となることを心得居りて、吾人の一言一行が神意に背かぬやうにすべしとのことであります。從つて、不信者の間にての信者の惡行は福音の價値を下げるもの故之を避けよ、との意味も含まれてゐます。不信者の間にての信者の善行が福音の實際的證明であり、之に因て尙ほ信者の現はるゝことあるを思ひては、我等は善行に敏ならんとの心を起さゞるを得ません。たゞの善行ではありません。根據ありての善行であります。又實行力を伴ふ善行であります。

次には「汝等、主のために、凡て人の立つる所の者に服へ、或は上にある王、或

は惡を行ふ者を罰し善を行ふ者を賞むる爲に王より遣はされたる方伯に服ふべし」とあります。王に服し方伯に從ふ理由として、「主のために」と記してあります。王のために王に服ふに非ず、方伯のために方伯に從ふに非ず、主のために王や方伯に從へとは、之が明かに普通道德でなくして基督敎道德なることの憑證であります。

主イエスキリスト！　彼が根本であります。彼の爲に凡てが爲さるべきであります。此世の制度に服し秩序を守るのも、皆彼のためであります。これ此世の道德と基督敎道德との著しき差別であります。「主のために」と語は簡單でありますが、その內容は深遠且博大であります。此一語に道德の根據と實行力とが含まれてゐます。神とイエスを第一に置き國王と有司をその下に置くが如く見ゆる吾人の態度を見て、危險と叫ぶ人があるならば、其人は心靈の領域と物質の領域を混同する人であります。心靈問題と國家問題の差別を知らぬ人であります。人生の第一問題は心靈問題にして國家問題はその副問題であると云ふ、永久の眞理を忘るゝ人であります。かゝる人は宜しく史を繙いて、歐洲二千年の歷史に於ける基督敎の影響を調査すべき

であります。凡てを「主のために」なす基督敎と其信者が、實は現世に於て最大の忠臣であることは、そこに極めて明瞭に表はれてゐます。

尙ほ王と方伯に從ふべき理由として「そは汝等善を行ふをもて愚なる人の無知の言を止むるは神の旨なればなり」とあります。之は信者の善行が基督敎反對者の批難の口を塞がしむるに至るとの意であります。即ち十二節に似て行による福音の證明であります。勿論「主のために」に比しては小さき理由であります。しかし慥かに有力なる一の理由であります。

最後に十六、十七の兩節に注意せねばなりません。「汝等自由なる者の如くせよ、されど其自由をもて惡を掩ふことなく、神の僕の如くすべし、凡ての人を敬ひ、兄弟を愛し、神を畏れ、王を尊ぶべし」とは、極て適切なる誡であります。神なき自由は、自由の名を以て惡を行ふ口實とします。神ある自由は、人をして「自由なる者の如く」爲すと共に、「神の僕の如く」に行動せしめます。これが眞正の自由であります。惡魔よりは自由であり、此世の物慾權勢よりは自由であります。けれども

神に對しては僕であります。故に神意には絶對に從はねばなりません。何者も我等を束縛せずとも聖旨のみは我等を束縛します。故に「凡ての人を敬ひ、兄弟を愛し、神を畏れ、王を尊ぶ」も聖旨として之を爲すべきであります。自由の名を借りて惡を掩うて、放縱淆亂の行爲をなすべきではありません。先づ「神の僕」たることが第一問題であり、之が吾人の行爲の基本であります。

以上の四つの點に注意する時、私共は基督教道德の性質及び信仰の道德的價値を、明かに知ることが出來ます。基督教の信仰は實に道德上に著しき効果あるものであります。されば基督信者にして其行の不信者と異ならぬ者は、眞正の信者ではありません。いやしくも眞正の信者である以上は、其人格と言行とに於て普通以上である筈であります。基督信者と稱する者の中に、僞りの信者が澤山混つてゐます。しかし眞の信者も少からず混つてゐます。此の事は今も昔も變りません。初代基督信者に關する左の記錄は彼等の行の優秀を語つてゐます。

不信者は圓形劇場の慘酷なる闘技を喜び觀たが、信者にして一度でも其處に往つた者は直に破門された。

信者にして信仰のために入牢せる者はあつたが、犯罪のために入牢せるは一人もなかつた。不信者は其宗教的儀式に奴隷を加へぬ風があつたが、信者は教會の執事に奴隷の身分にある者をも用ひた。……疫病流行の時は、不信者は近親をも棄てゝ顧みなかつたが、信者は病者瀕死者の看護に力めた。戰鬪の後には、不信者は死傷者を放棄したが、信者は傷者を救はんと急いだ。

かくの如く我等も亦信仰より出づる行の勇者とならねばなりません。そして自ら福音の價値を味ひ、また之を他に傳へねばなりません。之をなすべき機會は、此世に於て我等の前に無數にあります。

下

語り終つて後は雜談に移り、意見を交換し、友情を暖めた。時は早くも進んで六時半となつた。乃ち辭してN村に向つた。日の長い五月の中日後でも、さすがに戸外は暮色既に蒼然たる有樣、薄暮の天地を包む淡き色に接しては愁想と哀思の動き易き我も、今日は急ぐ途とてたゞ驀地に目的地を指して進んだ。一里半に餘る道を一時間で歩まうとするのであるから、脚に全身の力を加ふるよりほかはない。併し

其日の仕事を半ば終へて、あとの半ばの期待に心を緊張(ひきし)めつゝ、やがて此夜を洋燈(ランプ)の薄暗き光にも強くかゞやく愛の顔に圍まれて暮すべき我幸福を思へば、既に四里弱を歩みて勞れし筈の我脚も思ひのほか輕い。

四年半歩み慣れし此道！　日の長い此頃は餘り暗くもならぬが、秋より冬へかけては、可成り暗い路を歩むのが常である。月のある夕、空に星のきらめく夜は割合にらくである。しかし曇れる夕、それよりも尙ほ風雨の夕は、さすがに當惑することもある。H村よりの出發時刻を成るべく早くし度いと思つても、それが思ふやうにゆかぬことが多い。樣々の夕に此道を歩んだことが回想される。烈しい寒風、篠つく大雨、面を向け難き南の向ひ風などが、度々我歩みを妨げた。或時の如きは、暴風雨の夜に提灯の火は直ぐ消えて、暗黑の路を濡鼠の如くなつて目的地に着いたこともあつた。しかし僅かに一回のほか、天候のために此歩みを中止したことのなかつたのは、余の大なる喜びである。さはれ余はどうして之を誇り得よう。之は誰にでも出來ることである。絕海の孤島に世と隔離せられて住むあはれなる病者に同情

して、强ひて彼等の群に身を投じて、彼等のために計り、遂に彼等の病を受けて殪れたる先輩さへあつたではないか。

N村のAの家に着いたのは七時三十五分であつた。友と友の家族との愛が我を圍んだ。食卓を圍んで愉快なる一時間を談笑の裡に費した。やがて七八名の人が集り來つた。多くは農家の青年である。家族の中にも數名の出席者があつた。合せて十數名を超えぬ小集會である。冬でも二十名を超えぬ此村の小集會は、農繁期に入つて尙ほ小さくなるのである。夏中は夜が短いため輪講を省くことになつて（但し余の出席せぬ日曜夜には輪講會をするのである）、直に一時間の講義をなした。時は既に九時、一日の勞働を終へ晩餐をしたゝめて來會することである故、夏は午後九時頃でなくては開會出來ぬ。來會者の半數以上は信者であるが、家族との關係上、彼等は日曜日なりとて肉體の勞働を休むことは出來ぬ。そして爲すべき務を全部終へて後、他(ひと)の睡眠に費す二三時間を利用して、我心靈補育の業に從ふのである。之を都會の青年學生中の信者や求道者に比する時、何と大なる相違ではないか。そはと

もかく、犧牲の福音を信じ、又は信せんとする彼等が、此福音を聽くだけの事に於て既に相當の犧牲を拂ひつゝあるのは、頗る首尾一貫の行爲であると思ふ。

講義は羅馬書の十二章を三回に分つて語つた其最後の回であつた。主題は愛であつた。終つて、一時間の雜談に友誼を暖めし後、散會した。余は勞れし體を靜かに床に横へた。

想起すれば、余が初めて此家の客となつたのは、明治四十年の秋であつた。其時W大學を卒業したばかりの余は、余の今住む地にて講演をなせし後、A等に伴はれて、三里に近き夜路を歩みて此家に着いたのであつた。其夜十人足らずの小集會があつて、余は二十分ばかり感想らしいものを語つた。場所は今寢てゐる此の奥座敷であつた。既に十年の昔である。然るに五年半前に於て余が傳道の生活に入るや、此座敷と余との關係が復活した。忘れもせぬ、余は五年半前の或日、余が傳道者としての最初の覺束なき說敎をなしたのは、此座敷に於てゞあつた。時は晩秋で、日は暖くあつたが、肌寒い風が吹き始める頃であつた。余の新生涯は、其日から辛く

目鼻がついたのであつた。爾來毎月三回は、必ず此處に於て余は說敎を試みた。そして二回は必ず此處に宿泊した。かくの如くにして五年半の月日は早くも去つた。聽者の間にも種々の變化があつた。しかし五年半を一貫して動かざるものは、主の恩惠である。かくて余も亦、汝の恩惠われに充ち足れりと叫び得る一人である。

余は尙ほ何年間を此座敷にて語り、この座敷にて臥せり得るであらうか。その事は全く豫測し得られぬ。余の願は今のまゝの傳道に一生を献げ得んことである。余の幸福と平和は慥かにそこに在る。さりながら、今まで度々余の願を斥けて好まぬ道に余を引きいれ給ひし彼が、余の殘生を如何に處置し給ふかは測り難きことである。それはさて置き、我生の既往現在に於て、最も余にかゝはる所深く又余に最もなつかしき回想を起さしむるものは、疑ひもなく此村と此家と此座敷とである。此處に於て、余が既往の生活中の最も緊張せる部分が、最も多く營まれたのである。彼もし我願に反して余を此土地を取り去り給ふ時ありとても、余が此處より受けたる拭はんとして拭ひ難き深甚の印刻は、我殘生を色濃く着色することであらう。何

となればそは實に我生命の破片であるからである。あゝN村よ！　汝はS郡に於て、又C縣に於て、必ずしも重きをなすものではなからう。さはれ微弱なる一箇福音の戰士の心に於て、汝は國の首都に增して意味ふかきものである。余は汝の健かなる發達のため、殊に汝のうちの心靈の覺醒の鮮かならんために、祈りてやまぬものである。汝願くは我等の友の期待にそむく勿れ！

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝、また三里に近き道を歩みて、家に歸着せしは午前十一時であつた。身も心も疲れはてゝ、余はたゞ手足を伸ばして仰臥するのみであつた。しかし之にまして心地よき疲勞は他に得がたきことゝ思つた。一ケ月のうちにて最も骨の折れる第三日曜は、右の如くにして終つた。月曜の休養がすめば、火曜日からまた余の平生の仕事が始まるのである。（大正六年六月稿）

我心境に住む思想家の群

預言者カアライル

「汝等はラビの稱を受くること勿れ、そは汝等の師は一人即ちキリストなり、汝等は皆兄弟なり。……また導師の稱を受くること勿れ、そは汝等の導師は一人即ちキリストなり」とは聖書の語である。まことに嚴密なる意味に於ての師は、キリストのほかには有り得ない。さりながら師弟の文字を第二義に於て用ふる時に於ては、此世の死者生者のなかに我師たるものは少なくはない。さはれ、余が或特殊の敬慕を以て先生！と呼び度き人が一人ある。それは外でもない、我カアライル先生である。

余が再生の恩師たるU先生が、日本に於けるカアライル學者たるは、周知の事實である。恩師の著書に數多く出で來るカアライルの名は、余を彼に對する未見の戀

に誘ひ行つた。好惡の感情は多くの場合に於て誤りなき直觀である。彼の名を慕ひし少年の我純なる感情は、決して我を裏切らなかつた。何となれば彼の思想を學ぶに至つて、彼が眞に慕ふべく仰ぐべき思想家であることが解つたからである。感謝す、十餘年前余が尙ほ黃口の少年たりし時、余の直覺が世に稀なる二人の思想家に余を牽きゆきしことを。その一はU先生であつた。その二は（U先生を通して）カアライル先生であつた。余にしてこの二人者を知らなかつたならば、余の生涯は今とは全く異る他の道を歩いてゐることであらう。回顧すれば、萬感胸に咽びて眼に涙浮ぶ。しかしそれは感謝を伴はない涙ではない。

英語の讀書力が少しついた時、余はカアライルの書物を讀み始めた。初めて讀みしは『英雄崇拜論』であつた。余は字引を引き〳〵、奇怪なる彼の行文に食ひ入つた。住谷天來氏の譯本を座右に置いて、難解の箇處に會ふごとにそれに依つた。高山の急端の如く強い先生の語が、深く我胸に突き入つた。その比類なく特色を有する文字は、確信其ものゝ體現と見えた。クロムエルも、ルーテルも、ノックスも、

マホメットも、先生の筆端に生けるが如く躍つた。何とも形容し難き活ける大精神が全篇を貫いてゐる。ことに各頁に躍動してゐる著者その人の姿は、深刻なる肝銘を余に與へた。ルーテルを論じても、ルソーを論じても、ナポレオンを論じても、先生は他人を語りつゝ實は自己を語つてゐるのである。英雄崇拜論一卷は、十數名の英雄の傳記であると共に、又實にカアライル其人の自傳である。先生の大精神が結晶して此書となつたのである。不朽の傑作と稱せらるゝも當然である。大文章とは實にかくの如きものである、又かくの如くあらねばならぬ。大文豪とは實に先生の如き人である、また先生の如くあらねばならぬ。これ當時の余の實感であつた。生れて初めて眞正の文學と眞正の文人とを知りたる余は、余も亦斯くの如き大著を世に供せんとの志望に襲はれた。これ身の程を知らぬ愚かなる野心であつた。しかし筆を執つて救主イエスの證明をなしつゝある我が、今も尙ほ先生の大精神に動かされつゝあるは、依然たる事實である。

爾來、余はカアライルの著書を讀む事に相當の時を與へた。『論文集』などを古本

屋より購ひ來つて讀んだ。『スターリング傳』も讀んだ。『過去と現在』も讀んだ。しかし余に最大の興趣を與へたのは『サアタ－・レザアタス』であつた。そして最大の感激を與へたのは『クロムエルの手紙及び演說』であつた。忘れもせぬ、曾て中西屋に『サアタ－・レザアタス』の安本をカッセル版中に見出したる時、乏しき囊中より廿五錢を投じて之を我物とせし當時の喜悅を。また九段の古本屋に『クロムエル傳』の五冊物を發見して、垂涎置く能はざりしも、囊中空しくして之を得ん術のなかつた時、偶々生れて初めての著述たる『リンコーン言行錄』の報酬の一部が入り來つたので、この生來初めて獲たる金を携へて直ちに其古本屋に赴きしことを、余は昨のごとく記憶して居る。

新陳代謝の方則は、余の小なるライブラリーにも行はれつゝ來つたけれども、カアライルの著述のみは一部も失せずして、今も我貴重なる財寶として遺つてゐる。乏しきを割いて求めたる我藏書は、余に取つては一として貴からぬはないが、格別にも貴きは、カアライルの著書である。彼等は東都にありて余と共に屢々その居所

を更へしのち、余と共と袖ケ浦に來つて濱邊に近く住みし余の座右に侍つた。余が此世の汚風に吹かれて、苦鬪に心身を消耗しつゝありし四年間は、彼等が海をわたつて來る潮風に其表紙を汚しつゝありし四年間であつた。さりながら、異常の孤獨に處して時の長きを喞てる余を、いしくも慰めしは、外形に於て美はしからぬ彼等であつた。のち袖ケ浦の濱邊を敎職と共に棄てゝ、南總の淋しき農村に多難なる獨立生涯を開始せし時も、彼等は余の忠實なる追從者であつた。當時飜譯中であつた『クロムエル傳』は格別にも余の机上を離れなかつたが、生來第一の精力を余より强要せしは此書であつた。彼等は今も余のライブラリイに――汚き身を其儘に――立つてゐる、たゞ未だ讀まざる『佛國革命史』のみは色美しくして。

『サアタ－・レザアタス』について、『クロムエル傳』について、其他カアライルの著書について、又カアライルの思想と生涯とについて語り度き事は少なくないが、今暫くそれを略さう。要するに先生は眞正の文人であつた。そして眞正の預言者であつた。天の聲を民に傳へし點に於て――殊にその聲を以て民を責めし點に於て――

先生は眞に預言者であつた。イザヤ、エレミヤに十九世紀の衣を着せたのは、實に我カアライル先生であつた。もし熱罵、激語の數多き故を以て先生を嫌ふ人があるならば、その人は預言者としての先生の心事を知らぬ人である。先生は罵らんがために罵る世の諷刺家（サチリスト）ではない。愛するがために罵る預言者（プロフエツト）である。英國と其民とを罵りし故を以て、誰か先生を目して非愛國者となすものぞ。先生は實に大なる愛國者であつたのである。人類を罵りし故を以て、誰か先生を指して人間嫌忌者（ミサンスロピスト）となすものぞ。先生は實に大なる人類愛好者であつたのである。眞に人を愛する者は、その人が眞理に背きし時に於ては、之を強く責むるより外の道を選び得ない。然り、警世の務は嘲罵を伴はずしては充分に行はれ得ない。先生の火の如き激語に、暖き愛の潛流がある。世を厭ひし不機嫌な先生の顏の半面に、世に對する大なる愛が認められる。愛國を口にするものが、眞の愛國者ではない。心の奥底に於て眞に國を憂ふる者が、眞正の愛國者である。民を罵りしイザヤ、エゼキエル等を有することが、猶太史の大なる名譽（ほこり）であるならば、此末の世に當つて尙且つ先生の如き預言者

の現はれたるは、天が未だ全く人類を棄てざる一證である。

Revere Heaven（天を畏れよ）Do Justice（正義を行へ）と敎へて、先生は慥に眞正の預言者であつた。Sincerity（誠實）と聲高く叫んだ先生は、必ずしもGospel（福音）と曰はなかつた。もし先生を評して福音的ならずと云ふものあらば、余は其人に同意しよう。しかしその故を以て先生を基督信者に非ずとなすものあらば、余は怒つて「然らず」と叫ばう。成程、預言者たる先生の思想は、勢ひ舊約の預言者のそれに近い。その著書に現はれたる處によりて推すれば、先生は羅馬書や約翰傳よりも、約百記や以賽亞書の方に多く親しんだかと思はれる。さりながら、聖書全體を指して世界最大の書となしたる先生は——又キリストを稱（よ）びて最も神聖なる名となしたる先生は——明かにキリストの弟子の一人であつた。たゞ世を責むる預言者の位に坐したる先生は、おのづからキリストの義の半面に執して、愛の半面に注がるべき力を餘さなかつた。福音の全野は先生の鋭烈に過ぎた眼には入らなかつた。それ故に先生の生涯にも思想にも、安慰、平安、歡喜、感謝等の文字に相當する事實は甚

だ少なかつた。先生の一生は悲憤と苦闘の一生であつた。併しながら精力を一方に集注したことが、如何に先生の預言を鋭烈ならしめたかも、同時に考へねばならぬことである。もし吾人が或一定の形式を以て基督信者なるものを律することがないならば、カアライル先生が其精神に於て、明かにナザレのイエスの弟子であることを、認知し得るであらう。少くとも先生は、教會の教義を守らざる故を以て先生を基督信者ならずと斷定したる多くの監督牧師輩よりも、遙に確實なる基督信者であつたのである。

云ふまでもなく。先生は完全なる人ではなかつた。先生の人格は餘りに多角形に過ぎた。あまりに粗野に過ぎた。その强情過激なる性格は、いやが上にも先生を孤獨ならしめた。さはれ注意すべきは、人生の些事に於て全からざりし先生が、人生の大事に當つて聊かも過まる處なかりし點である。先生は終始一貫、預言者たる孤高の位置を守りて、敢て此世の誘惑に陷ることはなかつた。此世に對する警告者の位置を守りて、孤獨の戰を戰ひ通し、一毫も此世に降ることをしなかつた。政府の

勳章と年金とを拒絶せしが如きは、明かに其の一例である。公人としての先生の生涯は、徹頭徹尾カアライル的であつた。かくて僅少微細なる私生活の缺點の如きは、多く問題とするに足らぬのである。

あゝ眞正の文人カアライルよ、近代稀有の預言者カアライルよ、我師として慕ふカアライルよ。願くは汝の勇氣と汝の精神とを少しく分與して、此愚かなる一文士をして汝に似たる健闘の一生を送らしめよ。而して彼をして天分相當の職功を此世に遺さしめよ。

理想家トルストイ

余は曾てトルストイ心醉者の一人であつた。余の學生時代には、倫敦自由出版協會刊行のトルストイ物の安本が、數多く書肆の店頭を飾つてゐた。トルストイ翁が所謂再生後の著作は、大部分この中にあつた。余はそれを貪り讀んだ。小說、論文、民話集の區別なく、凡て杜翁の著作とあれば之を讀まないでは氣がすまなかつた。

再生以前の作物も少しは讀んだ。多分『アンナ・カレンナ』と『戰爭と平和』を除くの外は、翁の著作の殆ど全部を、余は英譯か又は邦譯に於て讀んだことであらう。實に余は一時は杜翁の熱烈な信者であつた。我同感の波は翁の片言隻語に向つて押しよせた。そして翁の思想の缺陷を知り得たる今日——翁に對する我景慕の情が過去の語草(かたりぐさ)となりし今日——に於ても、翁は尙且つ我心境に住む思想家の群の一人である。

カアライルが論文の大家でありしと對して、トルストイは小說の大家である。露西亞文を讀み得ざる余は我判斷の正確を言ひ張る資格はないが、翁の論文は（其思想は別として）寧ろ冗長を以て評すべき者であつて、氣韻と靈味に乏しく、莊高の趣きを缺いてゐる。到底、天品を以て稱すべきカアライルのそれと比すべきでない。併し乍ら翻て翁の小說或は民話を見んか、我等は玆に絕大なる巨匠の勞作を認めずには居られない。實に眞に迫ると云ふは此方面に於ける翁の筆である。讀者に深刻にして名狀しがたき感激を與ふるは、實に翁の小說である。そして其民話の自然的

なるうちに自らの巧妙さを寓するは、又なき靈腕を思はしむるものである。『復活』を讀みし時の余が絕大の感激と、『クロイツェル・ソナタ』讀了後の余が深刻なる感動とは、既に十年の過去に屬するに、尙は且つ昨のごとく我心に鮮かにして、明かに翁の天才の裏書をなすものである。

トルストイは斯くの如くに藝術の天才であつた。しかし彼はたゞ藝術の領域にのみ止まり得なかつた。文藝は彼の深き心に充分の滿足を與へなかつた。彼は遂に宗敎信者となつた。『我懺悔』に於て彼は信仰に入りし我心の經過を記述した。そして『我宗敎(余は何を信ずる乎)』に於て我信仰を說述した。此書に於て、彼は敎會の基督敎——殊に露國敎會のそれ——に對して激烈なる彈劾の語を連ねてゐる。そして自ら原始基督敎と做(な)すものを揭げてゐる。彼は實に原始の基督的生命を、其至醇の形に於て、把握し且信仰し得たと思つたのである。敎會がイエスの福音を形式化し、原始の生命を形骸化して、空虛を抱き空虛に立てる既往現在の實狀は、心あるものの誰しも憤らざるを得ざる處である。杜翁が敎會とその雇人たる宗敎家に對して發

したる義憤の聲には、我等は全心の共鳴を感ずるものである。そして鋭利にして徹底せる其論理に對しては、我等は高く打つ心臟の鼓動を以て應諾と讃歎とを表するものである。國權をも敢て恐れずして、自己の主張を大膽に維持し且發表したる偉烈なる翁は、その國權の袖に隱れて神聖の衣を纏はんとする敎權を、藁一本ほどにも思はなかつたのである。そして詩人ホイッチャの如く

敎壇を破れ、僧侶を逐へ、
かくて吾等に大自然の敎を與へよ。

と叫んで、僞善の結晶物を破壞したる廢址に、眞の信仰の樹を育てんと欲したのである。偉人トルストイ！と余は衷心の叫を發せざるを得ない。

トルストイは山上の垂訓——殊にその中の五誡と彼が呼びしもの——の實行を以て眞正の信仰となした。そして萬人がこれを實行する時に於て此世は化して理想鄕となるべし、と云うた。社會改革の基礎を個人の覺醒に置きて、これを區々たる制度の改正に求めざりしは、彼が社會主義者と全然その品質を異にせるを示すもので

ある。しかし乍ら、是れ果して原始基督敎なりしかと問ふ人あらば、勿論否！と答へねばならぬ。トルストイの信仰は餘りに現世的であつた。あまりに非恩惠的であつた。あまりに律法的であつた。あまりに非心靈的であつた。彼は神に近く交りて、その恩惠に感涙とゞめあへざりし人ではなかつた。彼はキリストの如實なる救濟に浴して、靈魂の安住に至りし人ではなかつた。パウロ、ルーテル、バンヤン等に似たる靈的實驗は彼には無かつた。人として彼は偉人の群にある人であつた。しかし基督者としては、決して大なるものではなかつた。

此點に於て余は杜翁を責めんとする心は毫もない。人に萬全を望むことは出來ない。翁より人生問題の根本的解決を得がたきは、また已むを得ないことである。さはれ翁の宗敎の缺陷は、翁の長處の半面である。翁の宗敎の社會改良的なりしは、翁が全人類に對して抱きし切愛を語るものである。實に翁は全人類を前に置きて、其幸福と眞生活のための配慮に全精力を費せし人であつた。完全なる人類と完全なる社會とは翁の二大題目であつた。そして先づ個人に眞生活を送らしめて、以て理

想社會のおのづから成る日を期待せんとした。翁の再生後の著作を見よ、何れか同一の方向を指さゝる。それが『復活』の如き小說であつても、それが『我宗敎』の如き宗敎書であつても、それが『我等何を爲すべき乎』の如き社會問題の著作であつても、それが『光の中に歩め』の如き物語であつても、それが『人は幾許の土地を要する乎』の如き民話であつても、一として社會改革の臭味を帶びぬものはない。有名なる其の非戰論の提唱と、その根柢としての無抵抗主義の主張も、亦同一範圍のそとのものではない。これ實に「我は露國の民に非ず世界の民なり」と誇稱した る翁の、世界と萬民とに對して抱きたる大愛の迸出である。翁の信仰と思想を貴しとする人あらば、更に貴きは此大愛であることを我等を附言し度い。我等は全人類をその大なる心に抱きたる翁を、イザヤ、エレミヤ等舊約の預言者に比するものである。彼等は社會の敗頽を民の罪惡に歸し、律法格守の結果としての民族の繁榮を期待した。

もし汝等肯ひ(うけが)從はゞ地の美産(よきもの)を食ふことを得べし、もし汝等拒み背かば劍に呑まるべし、こはヱホバ其御口より語り給へるなり(以賽亞書第一章)

との彼等の預言は亦實に、トルストイのそれであつた。其共通せる特色は民族乃至人類に對する切なる愛心である。たゞ後者が全世界を見たるに對して、前者が多く自國を主として見たる別あるのみである。そして是れ、時代の相違が生み出せし差異たるに過ぎぬ。

言行の不一致を以て彼を責むるは、偉大なる心を見る能はざる淺薄者流のことである。彼が農民の生活を眞正の生活としながら、遂に純粹の農業勞働者となる能はざりし如き、彼が所有地の分配を企圖して之を實行し得ざりしが如き、矛盾は即ち矛盾であるが、我等は彼が比類なき意圖を有し比類なき計畫をなせしと云ふ事だけを以て、充分に貴きことゝ倣すものである。理想家たる彼に實行家たらんことを併せ求むるは、難きを人に强ふることである。要は彼が此理想の追求のために努むる處ありしか如何の問題である。そして理想の追求者として一生を終へし彼の忠實を思ふ時、そして其不可能なるに失望と悶えをつゞけつゝも尙ほ屈せざりし彼の强毅

なる精神を思ふ時、我等は無情なる批評家の群に陷ることを免れるのである。彼は實にその理想のために心に十字架をになひし人であつた。彼が大なる理想追求者として其生を卒へしは、一面に於て彼が抱きし宗教の不完全を示すと共に、他面に於て彼が眞生活希求の切實なりしを語るものである。彼は一生を眞生活の追求に用ひた。そして最後には、我理想追求の邪魔物たる家を捨てゝ、隱者の生活に入らんとした。而して此忠實なる理想追求者は、恰も殉教者の如くに、此世の貴族の身を以て、家を出でゝ放浪し、遂に寒村の驛舍に殪れた。これ彼の缺陷ある信仰の當然なる行き處なりしとは云へ、己の所信のために拂ひし犧牲と努力の貴さは云ふ迄もない。實に彼は永久の求道者であつた、永久の青年であつた。眞生活の摯實なる希求に從ふは、それ自身すでに眞生活なのである。「神と交はらんと努むるは、其事自身が神靈に感せし行である」と或倫理學者は云うた。我を忘れし努力と追求の一生は、寔にこよなき眞正の生涯である。眞正なる追求者たりし我杜翁は、そして其のために苦悶に苦悶を重ねたる彼は、眞正なる生活者であつたのである。たゞ我等は翁の

理想そのものに缺陷を認むるだけである。

然り、翁の理想は、人間最高のそれではなかつた。少くとも理想として完璧であつたとは云へぬ。しかし乍ら、問題は如何なる目的と動機との下にその理想が生れしかにある。そして翁が此目的と動機とに於て至醇高貴なりしは、誰人も認むる處である。故に翁はその思想と人格との有ゆる缺陷を以てして、尙且つ比類なく大なる警世者である。近世の詩人、思想家にして、トルストイほどに大なる感激と警告とを此世に與へたものはない。彼の思想に觸れて、人は誰人と雖も、現在の我生活を省みて眞生活の希求を思ひ立つ。彼が有せし內容に於ては多くの疑義を有する我等も、彼の抱きし眞摯と彼のなせし努力については絕倫を以て稱するものである。思ふ、十九世紀末葉と廿世紀初頭の若き人にして、眞摯良正なる者、直接間接に杜翁が一部の精神に觸れぬものは殆どあるまい。しかく翁の他に及ぼす警告と感激の力は大であつた。翁も亦人類が有する珍寶の一である、福音の高處に達せざりしは唯一最大の遺憾なれど。

人類の友ドストイエフスキイ

ドストイエフスキイはトルストイと共に、露國文壇の二大巨星である。二人者は何れも既に籍を天國に移した。しかし遺産を豐かに地上に遺したる彼等は、永く人類の記憶に遺るものである。實に彼等二人のごときは、人類の寶と云ふべきである。もしシェークスピヤ一人が英國にとつて印度帝國よりも貴いとの言が正しいならば、この二人者は露西亞にとつて、西比利亞全土より貴き所有物であると云はねばならぬ。否、我等東洋の民にとつても、彼等は有形の寶を以て代へ難き絶品である。

余はドストイエフスキイの著書を多く讀んだものではない。英文に於て讀んだのは僅に『罪と罰』と『死人の家』の二冊に過ぎない。その他二三の作物は、邦譯を通して之を味つた。また彼に關する著述としては、メレヂエコフスキイの評論を英譯に於て讀みしほかは、新城和一氏の『ドストイエフスキイ』を精讀したのみである。後者は我國にありて稀に見る好著であつて、稀有の大天才に對する强き熱愛と

深き理解の結晶である。彼の著書を多く讀まざる余も、この絶好なる紹介に導かれて、彼をひしと我胸に抱くに至つた。

卒然として余の前に彼が立つ。その顏その姿。小さい體とやせた肉は、彼が生來の不健康を遺憾なく表はす。その顏はうち見た所、陰氣で、さびしくて、冷い。カアライルがルウテルの容貌を評して、一寸見には厭な顏 (repulsive face) であると云うた語が、內容を異にしてドストイエフスキイに能くあてはまる。持つて生れた病的神經に加へて、地獄の業火に苛まれ、荒れ狂ふ暴風に傷つけられし彼の生涯を想ふときは、成ほどと肯かれる。しかし博い額は彼の所有せし廣汎巨大なる思想の世界を體現し、深い眼は彼の特有物たりし鋭利深刻なる洞察力を語つてゐる。深く思念に沈潛せる彼の顏を前にして、我等も亦、人生と世界と神と宇宙とに關する眞摯なる瞑想に導かれる。彼の容貌に人を深く動かす或物の宿つてゐるのは、それが彼の全人格と全思想の象徵であるからである。

彼の一生は苦難と努力の一生であつた。生れ出づる時、彼は天才のほかに、病弱

なる肉體と病弱なる神經とを携へきたつた。これが彼を一生涯くるしめた。その天才を除いては、天賦に於てかく薄倖なりし彼は、この世の境遇に於ても、亦いたく薄倖であつた。貧に生れて、貧に成長し、貧に一生を送つた彼は、僅かに晩年の數年を除いては、全き窮乏の奴であつた。一椀の茶を得るに苦しみ、一錢の銅貨なきに煩ふは、度々のことであつた。負債は山積して、彼の壯年時代は其の壓迫のもとに送られた。ために彼は亡命のやむなきに至つて、四ヶ年餘も、故國を偲びつゝ海外に漂泊せざるを得なかつた。その間彼と彼の妻とは、赤兒を抱へつゝ、異常なる肉の窮乏と肉の病患とを忍ばなくてはならなかつた。貧乏神と債鬼とは、腹背より彼の一生を攻めたのである。

靈に活くる思想の人として物の缺乏は忍び得べし、忍び難きは彼が生命の據り處たる思想そのものの誤解に基づく官權の壓迫である。彼は無政府主義者たる嫌疑のもとに一度斷頭臺に上らんとし、特赦を以て流刑を受けるに止まつたが、此不當なる刑罰は甚しく彼の肉體と精神とを蝕した。四年の獄舍生活を西比利亞に送りて、

此世ながらの地獄の苛責を受けた彼は、出獄せし後もなほ六年間の配流生活にあり て、本國に歸ることを許されなかつた。げに長き劇しき苦みであつた。しかし西比利亞流刑の十年は、彼が六十年の生涯の縮圖に過ぎなかつた。老後の數年間を除いて、彼が何ものかの壓迫になやまぬ日は一日もなかつた。生來の病軀と信仰上の煩悶と物の缺乏とを外にして、政府か知人か民衆か家族か——何者かゝ必ず彼を惱ましつゝあつた。驚くべき苦難の一生よ！

さりながら彼の心靈の世界は、苦惱の壓迫に幾度か破滅に瀕せしも、遂に破滅するに至らなかつた。彼が靈を以てする肉に對する戰は、遂にいみじき勝利の凱歌をあげた。青年にして早く既に、彼は病苦艱難に負けざる心靈の所有者たるを證した。彼は信仰を以て苦難に堪へた。不當の刑苦を受けて、彼はそれを自分の十字架であると曰うて堪へた。キリストの殉教の生涯を想起して、己のそれを忍んだ。囹圄の苦は己を發狂より救うたものであると曰うて、彼はむしろそれを恩惠として味ふの態度に出でた。夫妻同時に病床に倒れて、貧苦その極に達する時に於てさへ、彼は

希望ある前程を見るだけの餘裕を持つてゐた。

のみならず、彼は貧苦にありても、濫作の弊に陷らなかつた。物を得るの必要は彼より多くの述作を强要したけれども、粗末な作品を多作せんには、彼の藝術的良心は餘りに鋭敏であり、彼の人柄はあまりに眞摯であつた。推敲また推敲、多くの時と多大の勞力とを費して、辛うじて一作品を得る有樣であつた。構想こゝろに成らざる時は、彼は平然として怠惰を選んだ。かくて彼は、彼の藝術家たる地位を低下せざらんために、殊更に貧窮を選んだのである。何ものと雖も、彼の文藝的天才と預言者的氣品を害ふことは出來なかつた。彼は己の文學者としての天職を、能く自覺してゐた。そして全人類を心に抱く預言者としての責務を、忘るゝことは出來なかつた。この高貴なる職分を汚すことは、彼の貧窮迫害よりも恐れた處であつた。故に彼は前者の保持のために、後者を甘受したのである。即ち彼の一生は、イエスに似たる十字架の一生であつた。わが理想を遂げんため、わが職責を果さんため、わが高位を汚さゝらんため、彼は自ら進んで窮乏の生を選び、自ら進んで迫害の怒

濤に身を投じた。ために苦惱は少なからざりしも、天の附託に於ては一毫の損ずる處なかつた、一毫の背く處なかつた。この意味に於て彼の生涯は、トルストイに比して、遙かに多く基督的であつた。トルストイの如き自己撞着は彼にはなかつた。彼の一生は、その天職と天職遂行のための十字架とに集注せられし一生であつた。彼の一生は、自己以上の或者のために自己を棄てた一生であつた。この意味に於て彼は眞人であつた。希伯來預言者に比すべき眞人であつた。

彼は暗黑のなかに光明を見た人であつた。いかなる惡漢、いかなる賤婦、いかなる耽溺者のなかにも、心靈の光と愛の輝きを見た人であつた。彼は萬人がその本來に於て神の子たることを敎へたのである。從つて彼の思念の中にあつたものは、全人類の現在と未來とであつた。彼は同胞を愛し、また全人類を愛した。彼は露西亞を愛し、また全世界を愛した。故に彼は當時流行の民族主義——スラブ民族主義、ゲルマン民族主義等この度の歐洲大亂の遠因をなすもの——を排し、民族間の憎惡と爭鬪を非なりとした。預言者的性情の人の常として、彼は平和を愛し、鬪爭を野

蠻視したのである。そして輕薄淺慮なる時代の潮流を戒めたのである。同時に彼は社會主義、及び之れに類する物質的社會改良の企圖を、淺しとして斥けた。これ一には、彼が近世社會主義共通の無神論を喜ばぬためであつた。また一には、彼が精神の復興開發を現世改善の根蔕としたるためであつた。此點に於て彼は、同じく全人類主義に立ちしトルストイと少しく異なつてゐた。彼はヨリ多く徹底的であり、ヨリ多く心靈的であつた。社會改良的なりし杜翁と、心靈革命的なりし彼とを比較する時、その思想に於て後者は前者の兄であつた。前者の基督敎は、後者のそれまで發達すべき餘地をもつものであつた。後者が平安のうちに老後の數年を送りたるに、前者が死するまでその煩悶を續けたるは、寔にやむを得ざる事實であつた。

彼の生涯に二三の瑕瑾があつた。さはれ暗雲にしつこく取圍まれし時に於て、時に彼が正路を踏みはづせしことのあつたのは、深く咎むべき事柄ではない。我等は彼の錯誤を悲むと雖も、これを責めようとは思はない。むしろ我等は、彼の嘗へがたき慘苦も、家族と兄弟と友と民衆と全人類に對する彼の切愛を傷けなかつた一事

に、驚歎の眼をみはらんと欲するものである。深く美はしき此愛心は寔に一の驚異である。貧苦と病魔と患難とにまつはられし彼がこの博く、深き愛心に手傷を負はざりし事を思ふ時、われ等は彼の有せし神に對する信仰の働きをそこに見ざるを得ない。

げに彼はキリストに對する信仰に於て、甚だ徹底的であつた。キリスト的精神は彼の作物、彼の思想に一貫せる特徴である。ある意味に於て、彼の作品は殆ど全部福音の證明であると云へよう。もとより神學者のごとく說いたのではない。福音的精神を以て、人生の凡てを照らしたのである。もし眞理がイエスに存しないならば寧ろ眞理を棄てゝもイエスに從はうとは、彼のイエスに對する信仰を言ひあらはしたものであつて、基督敎的信仰の眞核は彼によりて確と把持せられたのである。しかし彼は、ロシヤ人として舊敎々會から强ひられたまゝの基督敎を、無批評に受けいれたのではない。敎會の死せる形式と敎理は、どうして彼の如き深き人を滿足させることが出來よう。彼は永き煩悶と苦鬪の結果、實驗的に信仰の確立にまで達し

たのである。獄中の四年は、彼にとつては、聖書を熟讀する好機會であつた。彼の生涯は信仰の試錬者として、此上なきものであつた。幾多歐洲新思想の波に蕩搖せられし彼の時代の彼の國は、信仰の鍛錬場として絶好のものであつた。心靈の爭鬪は、永き懷疑を經過してのち、遂に彼をして福音の肯定に終らしめたのである。これ彼のみづから告白する所である。ゆゑに彼は晩年に至れば至るほど、益々信仰的光輝を放つ作品を世に出だすを得た。多くの天才は中年を越えてのちは衰へる。ひとり我ドストイエフスキイのみは、不斷の發達を續けて、死に至つて初めてやんだ。彼が最後の作たる『カラマゾオフ兄弟』が彼の最大傑作たるは、人々の認むる所である。これ偏に彼の信仰のはたらきである。云ふまでもなく、彼は現存敎會の腐敗を認めてゐた。しかし乍ら、杜翁の如くそれを痛擊はしなかつた。彼の態度は、も少し積極的であつた。彼はキリストに基礎を置く全人類の改造を期してゐたのである。

あゝ人類の友ドストイエフスキイよ、汝は單なる藝術の天才ではなかつた。汝は

或信仰と或理想とを抱いて居た。そして其ために十字架を負ふの生涯を送つた。血と涙とが如何に屢々、如何に多く、汝の總身より溢れ出でたことであらう。二三の小敗北は汝にもあつた。しかし世にも鮮かなりしは、汝が最後の勝利の中に此世を辭した。かくて苦難の數十年は豐かに償はれ、汝は戰況の報告をなすべく天國を指して旅だつた。勝利は固より善き勝利であつた。併しそれにも增して慕はしきは、當然負ふべき十字架の下に苦惱に堪へし汝の生涯である。あゝ小なる余の生涯も、全く十字架のないものではない—汝のそれに比する時は百に對する一に等しきものではあるが。理想と信仰と天職とのために、犧牲の一生を送りし汝よ、願くは我を勵して汝に似たる道を歩ましめ、汝に似たる努力をなさしめ、汝に似たる忍耐と希望とにあらしめよ。（大正六年七月稿）

附言、余は余の著書「悲哀より歡喜まで」に於て、ドストイエフスキイの思想を論じて、そのイエスの福音に何等附け加へし處なきを說いた。余のこの意見は今も少しも變らない。もし彼と之とを比較して余を咎むる人あらば、そは大なる誤解である。彼に於ては余は世人が源を忘れて末にのみ走る輕佻を難じ、之に於ては專ら聖なる源より出づる末の美を描いたのである。

霖雨の日と晴れたる日

霖雨の日

外には軟かに降る雨の音がしと〳〵と聞える。時々あはたゞしげな風が樹葉を振つて、水滴をばら〳〵と落す。二里を隔てた白濱の濤聲が、今日は手に取るやうに聞えて、怒れる濁浪が目に見えるやうな氣がする。落ついたやうな落つかぬやうな日である。しかし何となく筆を執つてみ度い日である。

今日は勞れてゐる。昨夜をY村の傳道に用ひたからである。宵より降り出した雨は、友の家で明けた今朝もなほ降つてゐた。尻をからげ、裸足で泥をこねながら歸つて來た。いよ〳〵霖雨の時候となつたのだと思ふ。自分の舊生活に於ては、霖雨は何よりも厭であつた。W大學の學年試驗は、いつも梅雨の頃に行はれた。天然の壓迫に加へて人造の壓迫を受けるのは、自由に憧憬せる余にとつては、この上なき

重荷であつた。その結果は健康の衰退のみであつた。中學教師の四年間は、梅雨の候だと云うて、することに變化はなかつたが、心からでない教育事業のために泥濘を蹴つて往復する自分の姿が、格別にもみじめに我眼に映つた。

都會人としては何よりも厭であつた此の梅雨期が、天然の大なる惠みであると云ふことを學ぶためには、余は農村生活を營まなければならなかつたのである。それは昨年、梅雨期に一滴の雨をも見ないために、農家が困惑と狼狽を極めたその慘狀を目擊して、尙ほ痛切に感ぜられた。

シオンの子等よ、汝等の神エホバによりて樂め喜べ、エホバは秋の雨を程よく汝等に賜ひ、又前の如く秋の雨と春の雨とを汝等の上に降らせ給ふ、打場には穀物盈ち甕には新しき酒と油溢れん（約耳書）。

と、降雨に會して直ちに恩惠の神を聯想したるユダヤ人は、さすがに優秀なる民族であつた。余が都會生活に於ける梅雨期の不平は、自己本意より割りだしたる我儘極まるものであつた。眼を田園に放つ時は、不平は變じて感謝となるほかはない。

謝す、神よ、われも亦、
輝く丘に、くらき林地に、

また日没の美しき海に、
汝のやさしき愛を認む。

と詩人ホイッチャは歌ひ、

驚くべく且多樣なる眞理を、
神は天上の星にしるしぬ。
されどまた我等の下なる輝ける花にも、
神愛の啓示はあふるゝなり。

と詩人ロングフェローは詠じた。しかし神愛の表顯は、丘と林と海と花とに限らない。人の身體と精神を壓迫する長き淫雨も、亦その一である。そして此事を認めてこれを感謝し得るものには、壓迫が壓迫でないことも事實である。農村に暮して、農家の生活に同感をいだき得る今の余は、昨夜窓外の雨聲を聞いて、「善くぞ降りし」と叫んだ。そして待ちに待ちし友の姿を戸口に認めしが如くに心はおどつた。明日の歸路のみじめさも問題にはならなかつた。――來るべき三週間の梅雨期、余はこれを愉快に送り得んことを願ふ。

天然に對する我が見方の光明化は、余の農村生活を以て直接の原因とする。しかし其の遠因としては、神に關する信仰を擧げねばならぬ。そして信仰に基ゐする天然觀の變化は、當然人生觀の變化を伴ふものである。殊に自己の生に對する光明觀は、我が小なる信仰の貴き產物である。思ひ出づれば、初て面の當り人の世の實相に接してより以後十餘年の我生涯は、疑ひもなく多難の語を以て概括せらるべきものである。中學卒業――私立大學入學――敎師生活――傳道生活と、數へ來れば平坦にして他奇ないと見える。然るに其他奇ない形の內容を組みたてゝ居る實質を、當然最も能く知つてゐる余は、いまだ曾て涙なくしてそれを想起したことはない。物の壓迫、肉の惱み、精神の痛み、靈魂の悶え、我に罪なくして受けし屈辱と憂悶――これ等は少からず我既往十五年の生を襲つた。それの內容は、事の性質上、到底人に語り得ぬことであれば、余はひとり我胸にそれを祕めつゝ墓に下るより外に道はない。しかし一事の語り得るものがある。それは所謂不幸が、眞の不幸でなかつたと云ふことである、否眞正の幸福であつたと云ふことである。

「凡ての事は神の旨に依りて招かれたる神を愛する者のために悉く働きて益をなすを我等は知れり」とは、使徒パウロの實驗の告白である。キリストのために「之等の凡てのものを損せし」彼れ、主のために「常にイエスの死を身に負へ」るほどの異常の大苦難を嘗めたる彼にして此言ある、けだし異數なりと云はねばならぬ。さり乍ら彼の大なる經驗に似た小經驗が、多くの基督信者にあるのである。そして余もまた幸にして其一人であると云ひ得る。（大正六年六月稿）

晴れたる日

霖雨は六月の廿日頃に終つた。しかし梅雨期はまだ終らない。ために六月下旬と七月上旬とは、天候やゝ不穩であつた。強い南風が吹きつゞいて、しつこい濕氣を持ち來り、空は曇りがちであつた。時々ばら〳〵と雨が降つた。人々は皆蒸熱に苦しんだ。七月八日は此の過渡期の最終の日であつた。空はほゞ晴れてゐたが、强烈な南風は夕方まで吹き續いた。この日は第二日曜日で、午後より我家に小集會があ

つた。我等は圓坐を作つて聖書を繙いた。余は一時間ばかり約翰第一書について語り、あとは一同で路加傳第六章の研究をした、戸外は酷(ひど)い暑さであつた。しかし暖い南風ながらも、これを室内で豐かに受けつゝ友と語りたる半日は、さすがに快きものであつた。此日、都會の人は、烈しい南風に砂塵を浴びていたく苦しんだと、此夕東京より歸り來りし或人は余に語つた。靜かなる農村の生活にありては、家にある人にとりても、戸外に働く人にとりても、南風も亦天の惠の一部である。

翌日より南風はやんだ。天候は平穩となつた。日は朝早くより赫々として照つた。空は殘りなく晴れわたつた。われ等はいよ〳〵我國夏期の快爽なる天候に入つたのである。涼しき風は二里を隔てし海より、颯々として吹き來る。この海風を室内にありて受くる時、暑熱の感は悉く失せる。今日まで三日間、すでに同じ天氣が續いた。實に心地よき極みである。東と西の風が自由に入つてくる此家に住んでからは、一年の中に夏ほど快い時期はない。夏は暑い、同時に風の吹かぬ日は稀である、陰鬱なる日は稀である。夏に苦しむのは、多くは風を遮る家屋の構造と位置とに因る。

強き日光は涼しき風を伴うて、人間生活の安全擁である。天の恩惠をわざと遮斷する者は、ために自ら苦しむの實を結ぶもまた已むを得ない。

豁然たる天空を仰ぎ、翠緑いろ濃き森林を眺め、海をわたつて來る涼風に浴して、わが滿足は無限である。さらに眼を庭に移すとき、余は我を圍む天然の惠みの至大なるに驚くほかはない。數十株の蜜柑樹は、今やその精氣の絶頂に達してゐる。重なりあつて茂つてゐる肉厚き葉の濃緑は、一部は肥料を施し雜草を除き剩枝を截りたる我勞力を語つては居るが、全體としては本具せる自然力の發揚である。來るべき冬の甘味を豫想せしむる果は、豆粒ほどの大さで、夥しく葉蔭に隱れてゐる。これを育てゝ豐醇の甘味をつくり出すは、空氣と日光とを除いては、大地に潜む不思議な力である。——蜜柑樹の間の空地に生いてゐるのは野菜類である。蒔いて間もない南瓜、大根、芋、玉蜀黍、豆類等が、毎日の暑さにどん〳〵育つてゆく。地を耕して小さき種を蒔く、すると芽が出る、成長する。僅かの肥料を施し、たまに雜草を除く。それだけの勞力である。然るに結果は著しい。普通の結果である、しか

し勞力に比して著しいのである。まことに、一粒の麥もし地に落ちて死なずば唯一つにてあらん、死なば多くの實を結ぶべし。何等の榮なき種一粒、これを輝く寶玉と比して月鼈の相違である。しかも一度地に棄てんか、乙は泥土に塗れるのみであるに、甲は無限の生命力の把持者なるを自證する。目に慣れて人はこれを怪しまぬ。けれども考へれば考へるほど、不思議な力の表顯である。——後庭に於ては、今や胡瓜が眞つ盛りである。毎日七八本を穫て、その清新なる味に皆舌鼓をうつて居る。その味は店頭より購ひきたりしものとは比較にならぬ。これ僅かに三十本の苗を購ひて、これを植ゑ、僅かの肥料を施し、そばに竹の枝を挿しただけの勞力の結果である。その傍に立つ數十本の茄子は、やうやく實を結びはじめた處である。七月、八月、九月、十月と、われ等はそれより千にあまる實を收め得ることであらう。これも二三回ほどこす僅少の肥料を以て、事足りるのである。一粒の種子が藏する無限の力、この無限力を發揚せしむる大地の潜勢力、いづれか不可思議ならざるべき。惠みは我小なる庭に充ち溢れる。

余がいま此筆を執りつゝある座敷のすぐ前には、十數本のモンドフリーシャと夏菊と孔雀草とが、赫々たる日光と向きあつて幾百の美花を開かせてゐる。晴れたる夏の日、強烈なる光線に輝く花を見るほど、快いことはない。人よ、その花一つを手に取つて熟視せよ。生命の強烈、色彩の微妙、美の豊満、光澤の芳醇。げに神秘そのものである。げに靈偉そのものである。誰か云ふ奇跡の時代はすでに去れりと。僅かに一反歩に満たぬ土地に、神の奇跡は満載せられて居るではないか。

神の恩惠は天地に充ちてゐる。これを知らぬは、黄金の山にありて黄金を見ぬと同樣の愚である。神の恩惠は我等の生涯を蔽ふてゐる。これを悟らぬものは、生命の靈泉の傍に佇立してこれを汲まぬ愚人である。（大正六年七月稿）

M村の二日

初の日

大正五年の春、余はM村に於て公開の講演を爲した。

余は基督教の傳道者である。ゆゑに「機會を得るも機會を得ざるも」福音の證明をなすべきである。しかし余は多く公開の演説を避けるものである。これ「豚に眞珠を投げ與ふる」を好まぬからである。されば余は、永く聖書を學ばんと欲する人々を求める。二人以上の人が毎月一回以上相會して余の聖書講義を聽かんとする所へは、余は道の遠きを厭はずして出張する。これ福音の證明は、聽者の心の眞面目を伴はずしては、害あつて益ないからである。福音は至實である、みだりに投げ與ふべきものではない。

しかるにM村に於て公開演説をなしたのには、少しく理由がある。この村で二人

の人が眞面目な求道心を起して、毎月一回余の聖書講義を聽くことになつたのは、その一ケ月ばかり前のことである。一人は村の校長、一人は青年會長である。他にも數人の來會者があつた。故に此際一般の人に向つて宗教の必要を說く時は、或は求道心を起して毎月の講筵に列席するものが生ずるかも知れぬ。——かく思つて余は公開講演の依頼を承諾したのであつた。

來會者は四五十名しかなかつた。余は宗教の必要を說くこと一時間半にして降壇した。余は最後の三十分を基督教の說明に用ひた。そして泰西文明の利器を爭つて用ふる日本人が、その宗教のみを理由なくして斥ける浮薄を責めた。少くとも基督教の教義を研究して、之に排すべき要素を發見したならば、之を排するがよい。そしてもし其の優秀なる宗教たるを發見したならば、宜しく大人の襟度をひらいて之を容るべきである。汽車、電車、電燈、自働車、瓦斯、洋服、洋食と、爭つて泰西の風を學ぶも、漫然として基督教をのみ排するは、寛大なる君子國の民として耻づべきではないかと。——余は凡そかくの如き語を以て聽衆の反省を促した。

聽衆のうちに嘗て郡會議員なりしといふ○○○○なる人があつた。此人が數日後に校長に宛てゝ送りたる手紙を、校長より余の處に轉送し來つた。

……扨先日講堂ニ於ケル〔演說會場は學校であつた〕外教先生ノ勅語ト論語ニ批評ヲ加ヘタルガ如キ話ハ、事小ナリト雖モ臣民トシテ有ルベカラザル言ナリ、若シ如此言ヲ生徒ハ勿論青年輩ヲシテ聽カシメバ其德性ヲ害スルコト必然ナリ、彼ガ如キ人間ハ將來校門ニ入ルヲ許サズト御覺悟被下度奉願上候、〔中略〕彼ガ如キ不法ノ言葉ヲ發スル人間ハ門前拂ヒヲナシテ可然ト奉存候、〔中略〕前陳ノ言葉少シク不穩當ニ候得共近ク壯年者修身齊家ノタメ高意ヲ煩ハシ度婆心申上候……。

そして此人の憤慨の餘り作りし詩は左の如きものであつた。

豈只先皇垂訓言　古今大道此中存
漫然休說歐洲美　日本由來有定源

超えて一月、同じく聽衆の一人より左の如き詰問狀が來た。

口演

君ハ先月十日○○村小學校ニ於テ（宗教ノ必要）ト題スル講話中（教育勅語ヲ讀ンダカラトテ勇氣ノ出ルモノデモナイ）ト辯ジ去リタルハ、如何ナル意識ニ因ツテ如斯不敬ノ言論ヲ以テシタルヤ、明カニ說示セヨ、我々日本臣民ハ教育勅語ヲ遵奉シ、各自之レヲ意思ノ中心トシテ智能ヲ啓發シ、義勇公ニ奉ズルノ氣

風ヲ養成シ、皇運ヲ扶翼スルヲ以テ忠良ナル臣民ノ本分トス。

何ゾ宗教ノ必要ヲ感センヤ、寧ロ不必要ナルノミナラズ有害無益ナリ、單ニ自己ノ安樂ヲノミ企望スルガ如キ宗教何ニカセン、嘘塞以テ此等ノ陳腐ナル嘘語ニ迷信セザルコソ、臣民ノ臣民タル所以ナリト確信シテ疑ハザルト同時ニ、大ヒニ貴説ノ不敬ナルニ憤慨セザルヲ得ズ。

社會ノ先覺者ヲ以テ任ズル君ニシテ若シ處信ヲ明ニセザルアラバ、我々ノ赫怒ニ止マラズ終ニ帝國ノ威嚴ヲ損スルガ故ニ、茲ニ改メテ之レヲ詰問スル次第ナリ敬具。

大正五年四月八日認　　○○○○拜

傳道師御中

右ニ付何等御回答ナキニ於テハ、新聞紙上ニ掲載シテ邪教退治ノ方法ヲ講ズル覺悟ナルヲ以テ、猶メ前以テ申上置候。

棄て置いた處、再び左の如くハガキを以て言ひ來つた。

二回目發信　（四月十一日）

（勅語）ニ對シ不敬ノ語ヲ以テ云爲シタルハ國民道德ノ根底ヲ破壞セントスル邪教ナリ、神國タル帝國ニ存在セシムベキ宗教ニアラズ、故ニ宗教ノ本義ヲ明カニシ我國體ニ背反セザル理由ヲ辯明セザルニ於テハ新

聞紙上ニ登載シテ退去ヲ命ズベシ、布教師タル君ニシテ何故ニ處信ヲ提示セザルヤ、君ノ所説即チ中心トスル信念ナキノ致ス所ナルベシ、如斯軟弱ナル意識ヲ以テ世道人心ヲ風靡セントスルハ、陽ニ飾言陰ニ醜行ノ類ニ非ザルナキヤ。

後にて聞く處に依れば、此詰問狀の發信人はM村に於ても非常識を以て名高き人であるといふ。そのことは手紙の文面に依つても明かに認められる。然り、非常識である。しかし同時に極めて眞面目である。この點に於ては、現代の青年が何事に對しても「どうでもよい」と云ふ態度をとつて居るのに比して、遙かに採るべきであるとも云へる。さりながら、固陋、暗昧といふ方面に於ても亦、申分なきものである。讀者よ、之は決して余一個人の問題ではない。また以上の手紙の發信人その人の問題ではない。かくの如きは明かに、我民族の大多數者の中に存する對基督教の態度の表明である。手紙は僅かに二三本である。しかし之に接したる余は、現代多數の同胞のうちに尙ほ根深き、固陋と暗昧と膚淺とにはたと出會つたのである。余は周知の事實に對して今更のごとく驚いた。

越えて五月下旬第三回の詰問狀が來た。文句は益々暴慢非禮である、意味は前と大同小異である。かくの如き詰問に對しては、答へようといふ意向になれぬので、其儘にしてある。

余一個に關する小なる出來事をこゝに詳記せしは、余を責めたるこの二人者が、まことに能く今日の愛國者なるものを代表するからである。抑も余は當日の講演に於て、勅語の批評をなしたのではない。道德は美なれども人に充分なる實行力を與ふる力を有たぬ、眞の實行力は宗教的信念に求むる外ないと——これ當日余の述べたる宗教の必要なる理由の一であつた。そして余は云うた「論語美なりと雖も勅語貴しと雖も、たゞ之を讀み之を暗誦せしのみにて充分に實行し得るものでない、これの實行には深き信念を要する」と。余は勅語に關して特別に言うたのではない。一般道德について言うたのである。されば勅語といふ語を言はなくもすんだのである。勅語といふ語は、咄嗟の間に余の口より出た語に過ぎなかつたのである。しかるに此片言隻句をのみ捉へて（講演の全體の意味を認めずして）基督教そのものを

論斷せんとす、これ今日の愛國者のなす所である。

今や忠君愛國なるものを多くの人は唱ふると雖も、其眞意を知る人は稀である。甚だしきに至つては、愛國即尙武と心得てゐる者もある。今や國民道德なるものを口にする人は多しと雖も、その深意を知る人は稀である。甚だしきに至つては、武を練り敵國と戰ふを以てそれなりと心得てゐる者もある。かくの如く、彼等は自ら最も貴しと思ひ居る其者の眞相を知らぬ。ゆゑに實は彼等は、似而非者を貴んで居るのである。しかしながら、新思想を擊つに最も良き彼等の武器は此者である。國體を破壞すると云ひ、國民道德を亂すと云ひ、忠君愛國に悖ると云ふ、云ふ所は頗る茫漠なれども、他を擊つには之にまさつた道はない。不忠と難じ不敬と罵れば、新思想は忽ちその前に萎縮するかと見える。云ふ所には何等の根據がない。しかし其聲は大にして力あるが如く思はれる。「今や愛國なるものは路傍の石のごときものである、これ他を擊つために容易く手に入れ得る武器である」と某博士は云うた。彼等にとつては、げに倔强なる武器である。

不忠非愛國を以て人を責むるもの、必ずしも眞正の愛國者ではない。曾て余が中學に職を奉せし時、余が基督敎を信ずる故を以て、余を危險視しゐたる一同僚があつた。彼は勅語捧讀式に於ける余の態度を不遜なりとして、陰に余を批難した。しかし彼が退職軍人にして軍隊的精神を以て生徒を律することの外、何等彼自身の思想及び行爲に於て、忠君愛國とみとむべき點はなかつた。苛稅の不平をならべる點に於て、彼は他の同僚と少しも異ならなかつた。この點に於て彼は、少くとも眞正の愛國者とは見えなかつた。また頻に忠君愛國を口にする一敎師があつた。曾て宴會の席上、彼は余等二三の禁酒者を罵つて云うた「酒を呑んでも差支ないではないか、明日御勅語の精神を以て敎壇に立ち得れば宜いではないか」と。かく云ひし彼は、その席上に於て最先に見るに堪へぬ醜體を演じた。彼の品性の下劣なるは、敎師一同の認知せる處であつた。そして彼は最も多く忠君を口にする人である。敎育勅語を守るを以て忠君愛國とする以上、苟も愛國者たる者は少くとも先づ第一に、道德の遵守と品性の鍛錬とを心掛くべきである。國難に殉すべきは「一旦緩急あ」

りし場合に限る。平時は「父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭謙己を持し、博愛衆に及ぼ」さねばならぬ。しかるに此事を怠りつゝ、自ら愛國者を以て任じ、徒らに他を責むるに非愛國を以てす、そも〳〵本末を轉倒せる行爲で國論者なり」の聖書學者デビッドスン氏の斷じたる「僞の預言者とは他なし當時の愛はないか。英との語は、深き洞察力の生みし斷定である。

忠君愛國を多く口にするものが愛國者であるならば、世に曲學阿世の官學者流はどの愛國者はあるまい。併し眞正の愛國者は、彼等ごときものではない。眞正の愛國者は、眞にその國を愛するものである、眞にその同胞を愛するものである。孝子は親を諫め、忠臣は君を苦諫する。これ眞の愛があるからである。ゆゑに眞正の愛國者は、同胞を鞭たざるを得ない。これ彼等を矯正し、彼等を清め、彼等を救はんためである。民の不信を責めてやまざりしイザヤ、エレミヤの徒を、誰か愛國者ならずとすべき。彼等はその國を愛せしがゆゑに、その政治家と宗敎家と民との輕浮を責めてやまなかつたのである。そして愛國論者たる後者はこれを悟らずして、彼

等眞正の愛國者を冷遇し、また迫害した。しかし彼等の眞の愛國者なりしや今や明かである。英國民を罵つてやまざりし思想家カアライルは、眞正の愛國者ではなかつたか。彼は眞に國を愛せしがゆゑに、其民の輕佻不信を責めたのである。「我は世界の民なり」と揚言して、大膽に所信を公言したるトルストイは、危險思想の唱導者たる故を以て政府と教會との忌む所となつた。しかし乍ら、其の偉大なる叫を以て現代世界の人心に一大覺醒を與へたる彼は、まことに眞正の愛國者ではなかつたか。

救主イエス、彼は實に大なる愛國者であつた。彼は愛國者なりし故に、彼の國人の不信と其の結果として起るべき國の滅亡を、坐視するに忍びなかつた。故に彼は彼等を正道に導きて、以て國の滅亡を未然に禦がんとした。しかるに頑愚なる彼等は彼を納けなかつた。かれ等は大なる味方なる彼を大なる敵とおもひて、之れを十字架に釘けた。彼がしば〳〵民の不信を責め、宗教家の墮落を罵り、萬斛の熱涙を以てエルサレムの覆滅を預言したのは、彼が心に强かりし愛國の至誠の所爲である。

大なる世界と數限りなき人類とに眼をそゝぎたる彼も、つひに自國とその民とを忘るゝことは出來なかつたのである。ひとり怪しむ、二十世紀の今日に於て、尙且つ彼より發せし宗教を非愛國として排するもの多きを。

もしそれ基督教が平和主義を抱くの故を以て、國民道德を亂すものとなす人あらんか、慈悲忍辱を旨とする佛教を二千年間信じ來つて、何故日本人はこれを危險視しなかつたかと、余は答へる。凡そ絕對者の存在と人類の一如とを說く宗教にして、いかで人類相殺を是認することが出來よう。また苟も人として、誰か好んで爭鬪殺伐の事に從はう。さればこそ人々は戰爭を以て「避け難き禍」となすのである。「四方の海皆はらからと思ふ世になど浪風の立ちさわぐらむ」とは、聰明なりし日本皇帝の御歌ではないか。世界の平和を說いて、戰てふ人類の災禍を地上より拭ひ去らんとする基督教は、世界と國とに忠なるものでなくて何であらう。

余は愛國者を以て自ら居るものではない。余は福音の宣傳のほかは、日本國民としての普通の義務——納稅、法律遵守等——を果すのみである。しかしながら、余

が筆に口に福音を傳へて、少數の同國人にナザレのイエスを紹介しつゝあるは、余としては疑ひもなく彼等を愛する最上の途である。余としては之れ以上日本國のために盡す道はないのである。少くともそれが國に不忠なる行爲でないのは、極て明瞭である。

後の日

前記の講演のために余の受けたる垢罵と侮辱とは敢て問はぬ。余はたゞ、過れる愛國思想の殼内に欝屈して世界の廣野に眼をはなつ能はざる捕囚者の、尚いまだ我國に數多きを悲むのである。その精神は或は嘉すべきであらう。さはれその思想は、正に明治以前のそれではないか。かくても尚ほ世界一等國民の列に入れりと爲して居るのであらうか。余は慚然として長太息を發せざるを得なかつた。そして他にも猶ほ我等の唱ふる基督教を危險視し居る者のあるべきを思ひて、翌月の聖書講義會に於ては、余は此點を明かにせんと努めた。

余は先づ馬太傳廿二章十五節——廿二節を朗讀した。そしてその大意を解明してのち、廿一節「カイザルの物はカイザルに歸し、また神の物は神に歸すべし」について大凡左のごとき說明をなした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

人間の務と云ふものは、種々の方面にわたつて居るものであります。先づ我等は家族の一員として、家庭道德を守らねばなりません。そこでは親は親たり、子は子たり、夫は夫たり、妻は妻たり、兄は兄たり、弟は弟たらねばなりません。各その道を離れて勝手に振舞ふ時、一家の平和は亂れずには居りません。また我等は都會又は村の一員として守るべき道があります。町村稅を拂はなくてはなりません。協同の事業には手助けせねばなりません。その土地の秩序を破つてはなりません。次には國家の一員としての責務があります。納稅兵役等に服さねばなりません。國利民福に多少の貢献をせねばなりません。いやしくも國に不利益なる行爲があつてはなりません。そして次には世界人類の一員としての務もありませう。

以上はいづれも普通道德であります。そして誰しも知つて居ります。しかし之で充分でありませうか。人の務はこれで盡きて居ませうか。われ等は國家以外、世界以外に、宇宙といふものを考へずには居られません。我等が之を思考の中に入れるを好むと好まぬとに係らず、天はその大なる沈默を以て我等にせまります。太陽はその赫々たる光を以てわれ等を照します。星はその神秘の光を以て、何事かを我等に囁くごとく見えます。大宇宙がその大なる力を以て、我等を圍みつゝあるのであります。かくて我等は、宇宙の中にある一個の己れを自覺するのであります。宇宙に生を享けたる我は、慥かに一個の「我」であります。「一個人」であります。然らば則ち、宇宙と相對する一個人として、我は如何なる道を守るべきであるか。これ倫理、哲學の根本問題であります。そして宗敎の根本問題も此外ではありません。人が此大問題に觸るゝ時、所謂國民道德を以てこれを解くことは出來ません。一個の人としての我本來の面目を發見せずば、遂に滿足することは出來ません。マホメットがシナイ山を仰ぎて、宇宙の本源について瞑想せし時、彼の前には家族も鄕黨も

ありませんでした。カントが其書齋に於て、人生の根本義を探りし時、彼の前には國家もなにもありませんでした。彼等はたゞ人として立つたのであります。然るが故を以て、彼等に不忠非愛國の名を冠することが出來ませうか。

この問題についての基督敎の答は、至極簡單であります。宇宙の本源に愛の神を認むるのであります。そして人は神の子として神を愛し神に仕へよと言ふのであります。即ち神と人との關係を正しくして、人をして其本來の面目を發揮せしめんとするのであります。人心の最も深き處に存する宗敎心は、即ちその人の天の父に對する愛慕であります。愛はその對象物を求めます。親の愛は子を求め、子の愛は親を求めます。男女の愛も亦その相手を求めます。對象物を發見せぬうちは滿足しません。人は天父を發見して其本具する宗敎心を滿足せしめずば、遂に不安と不調和と淆亂とを免れることは出來ません。實にこれ、人が人たるの道であります。

そして先づ人が人たらざるうちは、何事も思ふやうに行はれぬことは疑ひ得ません。國家道德も。家庭道德も、對人道德も、之を行ふ者は個人であるゆゑ、個人自

身の根本が確立せずしては、思ふやうに行はれる筈がありません。されば個人一身の根本的改造と確立とを主眼とする基督教は、人と世とに徹底的の救濟を與へるものであります。少くとも自らさう主張します。私自身はさう信じて此教を說いて居ります。人はその本來に於て神の子なりとは、基督教の高唱する所であります。ゆゑに天父を信じて之に仕へるのが、人の人たる所以であります。個人の安心も、確立も、進展も、凡てその源泉を茲に置きます。しかるに今日の人は、自己の神の子たる榮位を棄てゝ、徒らに財と名に仕へて居ります。これ恰も、正宗の名劍を棄切庖刀として用ふる如きものであります。その銹びくさるは當然であります。實に人は一刻も早く醒めて、その本來の榮位に歸り、以て自己心靈の價値を發輝せねばなりません。人は速かに天父に歸らねばなりません。かくの如くして人が先づ一個人として眞の姿に立つ時には、その他の凡ては快刀を以て亂麻を斷つが如く解決されてしまひます。

かくの如くに宗教は萬事の根源であれば、國家にとつては實は甚だ大切なるもの

であります。良き宗教あつて良き人生れ、良き人生れて良き國家があるのであります。もし基督教にして國家に取つて然く危險なるものならば、何故に日本國は早く之れを禁止しませんか。信教の自由は憲法のゆるす處であります。日蓮、法然、親鸞等——我國に於ても曾て偉大なる宗教家が現はれて、幾萬の人を救うたではありませんか。誰か彼等を目して、日本國の大忠臣となさぬものがありませう。彼等は偏に個人の安心を說いて、人をその根本に於て救はんとしたのであります。忠と孝とは彼等の取扱つた問題ではありません。しかも彼等は日本國の貴き寶であります。何故にひとしく個人の救濟を旨とする基督教をのみ排せんとするのですか。

今日の佛教家が多く忠君愛國を說くがゆゑに佛教が日本に取りて貴く、基督教が神のみを說くが故に危險なりとするならば、そは嗤ふべき淺見であります。宗教の本旨は、絕對者と一個人との關係を正しくするにあります。從つて之が宗教家の務でなくてはなりません。君の恩、親の恩と云ふが如きは、普通道德であります。これは宗教を待たずして誰人も知つて居る所であります。道德家、倫理學者は忠孝を

説くべきであります。しかし宗教家の務は他にあります。彼は忠孝を輕んじません。否それ相當に之を重んじます。しかしながら、彼は偏に人間本來の道を説いて、人をその根本に於て救はんとします。徒らに「四恩」を説いて得々たるが如きは、宗教家の墮落であります。時勢に阿ねらんとして、宗教家が自らその顯要の地位を棄てたのであります。

まことに道德は貴いものであります。しかしながら道德は、知つたゞけでは實行出來ぬものであります。道德は人に道を知らせるだけで、之れが實行力を供しません。これ天下公知の事實であります。日本國民は皆教育勅語を知つて居ります。しかし、あの貴い道德を立派に實行し得るものが何人ありますか。今日、我國全體にわたる敗頽淫靡の恐るべき傾向は、これ今の教育の明かなる失敗を語るものではありませんか。いかに貴き教訓にても、それだけにては實行出來ぬからであります。まことに人はその內心に生命と力を與へられなくては、いかに美なる道德を與へられても之を守ることは出來ぬのであります。そして內心に道義實行の此勇氣と能力

とを與へるものは、實に宗教的信仰のほかには在り得ません。

いまや我國は各種の難問題に苦しんでゐます。教育問題、農村問題、青年問題、社會問題、生活問題——何れか人心の復興を要とせぬものがありませう。人心の復興は現時の最大急務であります。然るに救濟の企畫は專ら形式に走りて、毫も根本に觸れません。かくて人心の沈頽は、底止する所なき有樣であります。たま〳〵宗教的信仰の必要を考ふるものありと雖も、茫漠不徹底にして宗教の根本義を逸し、ひたすら官省的に流るゝを免れません。他を救濟せんとする人自身が、自己一身を救濟する道をすら知らぬ有樣であります。これ神の眞理を斥くる國と民の、當然受くべき混亂であります。現時の最大必要物なる人心復興の靈藥は、正に基督教の所有物であります。イエスキリストは之れを日本國民に提供しつゝあるのであります。しかるに日本國民はこれを受けぬのであります。

あゝエルサレムよ、エルサレムよ、豫言者を殺し、汝に遣さるる者を石にて擊つものよ、母鷄の雛を翼の下にあつむる如くわれ汝等の小供を集めんとせしこと幾度ぞや、されど汝等は好まざりき。視よ汝等の家